2018 年 3 月期

関西大審査学位論文

フォーカシングにおける交差の機能に関する研究

－心理療法・メタファー・なぞかけ－

関西大学大学院 心理学研究科

11D8503　岡村 心平

論文要旨

本研究（論題：「フォーカシングにおける交差の機能に関する研究－心理療法・メタファー・なぞかけ－」）は、本研究における問題と目的を提示する「第Ⅰ部（第 1 章)」、心理療法やフォーカシング実践についての理論的検討を主とする「第Ⅱ部（第２章、第 3 章、第４章、第 5 章)」、実際のセッション記録をもとにした新たな実践方法の検討を主とする「第Ⅲ部（第 6 章、第 7 章、第 8 章、第 9 章)」、これらの議論に関する総合的考察を主とする「第Ⅳ部（第 10 章)」の４つから構成されている。

第Ⅰ部(第１章)では、フォーカシング実践とその考案者である Eugene Gendlin の哲学的な取り組みについて概観し、フォーカシングと Gendlin 哲学の言語の位置づけとその特徴、及びフォーカシングにおける言語機能を特徴づける「交差(crossing)」の概念について触れた。Gendlin の業績全般における交差概念の概要や、その用いられ方の特徴、先行研究における交差概念の展開について参照した。その上で、本研究における目的として、(1) Gendlin の交差概念による心理療法フォーカシング実践の検討、(2) メタファーと言語の創造的な機能としての交差への着目、(3)方法としての交差の実践応用への意義の検討、及びその方法の考案、という３つの論点を提示した。その上で、本研究の構成を提示した。

第Ⅱ部(第 2 章、第３章、第４章、第 5 章)では、理論的検討として、心理療法におけるメタファーの機能やその特徴、さらに Gendlin のメタファー観、及びこれを特徴づける交差概念について概観した上で、フォーカシングにおけるメタファーの機能と、対人関係的な相互作用における交差概念の使用の特徴について検討を行った。

第 2 章では、心理療法におけるメタファーの使用の有効性を示す先行研究を整理した上で、修辞学的な分類(メタファー、シミリー、メトニミー)をもとにした心理臨床的な知見や、認知言語学的な観点による心理療法のプロセスの分析に基づく知見などを参照した。次に、精神分析や家族療法の知見がその理論的背景として反映している心理療法におけるメタファーの機能について概観した。

第 3 章では、フォーカシング実践やその心理療法的応用におけるメタファーの機能に反映されている Gendlin のメタファーの捉え方について言及するために、Gendlin (1962/1997)、Gendlin (1986)、Gendlin (1991/1995)という３つの論述を参照しながら、Gendlin のメタファー観の推移について検討した。検討の結果、時代を経てある種の「進展」が認められる Gendlin のメタファー観(Gendlin, 1991/1995)では、交差概念によって

支えられる「状況についてのメタファー」によって、言語による新たな理解の創造という観点がより重要となっていることが明らかとなった。また、このような Gendlin のメタファー観の進展がもたらす臨床的意義について検討した。

第 4 章では、前章(第 3 章)におけるメタファーや交差の機能についての議論を参照しながら、フォーカシングやその心理療法的な応用のプロセスにおけるメタファーの機能について検討した。フォーカシング指向の心理療法実践におけるメタファー使用への言及として、Hendricks(1986)の心理療法の治療変数としての高体験過程レベルにおけるメタファー使用などを参照しながら、フォーカシングにおける「ハンドル表現」のメタファー的な特徴とその機能について検討した。さらにフォーカシングのプロセスについて、状況についてのフェルトセンスを「状況についてのメタファー」であるハンドル表現として言い表す「喩える」という契機と、そのハンドル表現についての意味を問い、探求する「アスキング」のステップにおいて特徴的な「尋ねる」という契機の 2 つから捉えた。この「喩える」と「尋ねる」というフォーカシングの重要な 2 つの契機について、Gendlin の交差概念の機能から考察した。交差概念によって、フォーカシング・プロセスにおけるメタファーのもつ創造的な特徴と、それを引き出すためのアスキングの機能の特徴がより明確に捉えられる点について論じた。また、このようなフォーカシングの創造的なプロセスの特徴は、第 2 章において外観した心理療法全般におけるメタファーの機能とも多くの共通点が見出された。

第 5 章では、Gendlin(1991/1995)において見られる対人関係的な相互作用における交差への言及について、その脚注での議論を追いながら文献学的に検討を進めることで、心理療法における対人的な概念、特に「共感」をめぐる理論的な考察を行った。Gendlin (1991/1995)が対人的な相互作用における交差に関連して用いる「共に感じること (co-feeling)」という概念は、Gilligan and Wiggins (1987)における倫理観の発達における他者の異なる体験の理解に関する用語として、同一の体験を有する場合のみ用いられる「共感(empathy)」と対比的に用いられるものであった。また「共に感じること」という表現自体は、Gilligan らが Kundera(1984)の小説の作中において「同情(compassion)」のパラフレーズとして用いた言い回しを用いたものであった。心理療法における「共感」をめぐる議論を参照したとき、「共に感じること」という概念は、Freud のいう同一化としての「共感(empathy)」とは対比的であり、むしろ Rogers の「共感的理解(empathic understanding)」における「あたかもそのようなという性質(as if quality)」と共通の特徴

を有しており、これは交差概念の機能の例として挙げられるメタファーの「あたかもそのような」という仕方での理解、その仮想性という特徴に反映されていると捉えられた。交差や「共に感じること」という観点によって、心理療法における対人的な相互作用をめぐるさらなる検討の可能性が示唆された。

第Ⅲ部(第 6 章、第 7 章、第 8 章、第 9 章)では、実践的な検討として、交差の概念によって特徴づけられるなぞかけを用いたフォーカシング・ワーク「なぞかけフォーカシング」簡便法を考案し、実際のセッション記録を提示し、そのプロセスの特徴について検討した。また、Gendlin の交差概念の創造的な特徴を検討するために、人間性心理学における創造性への言及を参照し、さらなるセッション記録について交差概念から解説した。また、なぞかけのような言葉遊びがもつ創造性について、メタファーやなぞなぞをめぐる歴史的事例や民俗学的な知見を参照することで、Gendlin の交差概念の観点からその教育的意義について検討を行った。

第 6 章では、フォーカシングのプロセスにおけるハンドル表現とアスキングの関係について、言葉遊びである「なぞかけ(三段なぞ)」の特徴とのあいだの共通性を、Gendlin のメタファー論や交差概念から検討した。また、交差の概念に特徴づけられるなぞかけにおける新たな理解の創造的なプロセスをめぐって、メタファーや、創造的な推論方法としてのアナロジー、あるいは仮説発見的な論理であるアブダクションとの関連について論じ、これらの創造的な推論における身体感覚の重要性について検討を行った。また、メタファーやアナロジーによる推論を特徴づける、認知意味論における「対応づけ」概念と、Gendlin の「交差」概念の比較検討を行い、創造的な思考法を支えるスロットの機能や、両者の相違点について整理した。その結果として、なぞかけの構造における創造的な推論を促す機能を活かし、かつその身体感覚の重要性を加味するなぞかけを用いたフォーカシング実践の可能性が示唆された。

第 7 章では、前章(第 6 章)の議論を踏まえた上で、なぞかけの構造を利用したフォーカシング・ワークである「なぞかけフォーカシング」簡便法を考案し、ワークの進め方や実施上のポイントなどについて記述した。次に、そのステップを用いた実際のフォーカシング・セッションを実施し、セッション記録を提示して、その特徴を理論的に検討した。考察では、交差に特徴づけられるなぞかけフォーカシングのプロセスについての概略や、なぞかけにおける「その心は？」という問いかけをめぐるフォーカシング的意義の検討、問いかけというステップにおいて「時間をかける」ということのフォーカシング的な機能に

ついて論じた。また、このような考察から、なぞかけフォーカシング簡便法の活用法について、特にリスニングの「稽古」としての教育的意義について言及した。

第 8 章では、前章で提示したセッションとは別のなぞかけフォーカシングのセッション記録を提示し、実際のセッション記録を実例として、交差の機能による「掛け合わせる」という創造的な思考方法の特徴について、人間性心理学における創造性についての言及から考察した。人間性心理学において創造性は重要なテーマであり、その創始者、貢献者である Maslow や Roger もたびたび言及している。Maslow(1968)は自己実現における創造性について検討し、また Rogers(1961)は創造性の内的条件として「体験に開かれていること」「評価基準が内部にあること」「要素や概念と遊ぶ能力」の 3 つを挙げている。本章で提示した実際のなぞかけフォーカシングのセッション記録において明らかなように、なぞかけフォーカシングのプロセスには、人間性心理学における創造性の特徴が豊富に見受けられる。その一方で、Gendlin はこのような創造性をフォーカシングや交差に基づく「掛け合わせる」という方法を通して、誰もが学び習得する可能性があるものと位置づけられていることが考察を通して明らかとなった。このことから、Gendlin における創造性への言及は、このような具体的な手続きや方法を考案するという特徴において、人間性心理学における創造性の捉え方を進展させる可能性を含むと示唆された。

第 9 章では、第Ⅲ部においてテーマとしてきたなぞかけのような言葉遊び自体に本来備わっている創造的な特徴について、Gendlin の交差概念からさらなる考察を進めた。まず、メタファーやなぞなぞをめぐる歴史的な位置づけについてアリストテレスの比喩と謎の捉え方を参照し、そこで言及されている特徴について Gendlin の交差概念との関係を検討した。また、交差概念となぞなぞの関連をさらに示すために、その歴史的な事例として寓話『不思議の国のアリス』に登場する「帽子屋のなぞなぞ」をめぐる逸話を紹介し、このなぞなぞと日本のなぞかけ、さらには Gendlin の交差概念に見られる共通点を指摘した。また、交差概念によってより明示的にとなった言葉遊びの創造性について、ホイジンガによる「遊び」の民俗学的かつ教育的な意義を参照しながら、フォーカシング指向の取り組みにおける動向として注目されている「フェルトセンス・リテラシー」という着想を紹介した。結論として、なぞかけのような言葉遊びが本来的に持っている「わからないことへ興味をもつ」ということを促進し、「わからないことへのリテラシー」を育むという教育的意義について言及した。

第Ⅳ部(第 10 章)では、これまでの議論を踏まえた上で、本研究の総括を行った。まずは総合的考察として、本研究で明らかとなった知見を整理し、同時にさらなる発展的な議論を踏まえながら(1)メタファーとアスキングの機能についての心理療法的意義、(2) なぞかけフォーカシングの実践的意義と遊ぶという観点、 (3)メタファーと交差によって「新たな理解」を共有するプロセス、という 3 つの観点から論じた。さらに、本研究における課題と、今後の展望について検討した。

目次

第Ⅰ部　本研究における問題と目的

第１章　序論

第１節　導入：フォーカシング実践と Gendlin の哲学 3

第２節　Gendlin の言語観とフォーカシング実践における言語の位置づけ..... 3

第３節　フォーカシング実践における言語の機能と Gendlin の交差概念 16

第４節　本研究の目的と構成 32

第Ⅱ部　理論編：心理療法におけるメタファーと交差概念

第２章　メタファーと心理療法

第１節　導入..... 39

第２節　修辞学や言語学における定義から見たメタファーの心理療法的意義.... 40

第３節　心理療法におけるメタファーの機能 43

第４節　結語..... 46

第３章　Gendlin におけるメタファー観の進展

第１節　導入..... 47

第２節　Gendlin におけるメタファー観の推移..... 48

第３節　考察..... 55

第４節　結語..... 59

第４章　フォーカシングにおけるメタファーの機能

第１節　導入..... 61

第２節　Gendlin のメタファー観とフォーカシング実践 61

第３節　クライエントによるメタファー表現 64

第４節　フォーカシングにおけるメタファーの機能 67

第 5 節　考察..... 71
第 6 節　結語..... 72

第 5 章　対人関係的な相互作用における交差の機能と「共に感じること」
第 1 節　導入..... 75
第 2 節　対人的な相互作用における交差：「共に感じること」 76
第 3 節　「交差」概念から見た「共感」概念 81
第 4 節　結語..... 86

第Ⅲ部　実践編：方法としての交差となぞかけフォーカシング

第 6 章　交差概念から見たフォーカシングとなぞかけの共通点
第 1 節　導入..... 91
第 2 節　なぞかけとフォーカシングの構造的な特徴 91
第 3 節　なぞかけと創造的な推論における身体性..... 96
第 4 節　「対応づけ」概念と「交差」概念の比較検討.....102
第 5 節　結語：なぞかけを用いたフォーカシング実践の可能性 107

第 7 章　なぞかけフォーカシング簡便法の考案とセッションの実際
第 1 節　導入.....111
第 2 節　なぞかけフォーカシング簡便法：ステップの提示.....111
第 3 節　なぞかけフォーカシングの実際：セッション例の提示 114
第 4 節　考察.....115
第 5 節　結語.....118

第 8 章　人間性心理学における創造性と交差の機能：セッション例からの検討
第 1 節　導入.....121
第 2 節　交差の創造性：「掛け合わせる」という思考方法 123
第 3 節　「掛け合わせる」思考方法の実際：交差となぞかけ 127

第 4 節　考察.....130
第 5 節　結語：人間性心理学における創造性の進展 134

第 9 章　言葉遊びの創造性：交差概念による文化的・教育的着想
第 1 節　導入.....137
第 2 節　言葉遊びと交差：メタファー・なぞなぞ・なぞかけ 138
第 3 節　なぞかけと交差の創造性：「帽子屋のなぞなぞ」をめぐる逸話から.....142
第 4 節　言葉遊びの創造性とその教育的意義 144
第 5 節　結語：わからなさへのリテラシーを育むこと 146

第Ⅳ部　総合的考察

第 10 章　総括
第 1 節　総合的考察.....151
第 2 節　課題と今後の展望.....162

文献.....165

謝辞.....177

第Ⅰ部　本研究における問題と目的

第 1 章　序論

第 1 節　導入：フォーカシング実践と Gendlin の哲学

フォーカシング(focusing)(Gendlin, 1981)という実践は、オーストリアのウィーン出身で、アメリカの哲学者で心理療法家でもある Eugene T. Gendlin の考案したセルフヘルプ技法、および心理的な対人援助のための技法である。フォーカシングは、アメリカの臨床心理学者でクライエント心理療法(client centered therapy)の創始者である Carl Rogers らが取り組んでいた、心理療法の効果研究(e.g. Klein, et al., 1970)の知見などの当時の心理療法研究の成果と、Gendlin 自身の専門領域である現象学や解釈学などの哲学的な知見が合流し、考案されたものである。セルフケアや問題解決のため広く一般に普及されるように想定されたフォーカシング技法は、後に再び Gendlin 自身によって心理療法へと還元され、それはフォーカシング指向心理療法(focusing oriented psychotherapy) (Gendlin, 1996)と呼ばれている。また、フォーカシングの特徴を創造的な思考法へと活かすためのステップとして、Thinking at the edge(TAE)という方法が、Gendlin や Hendricks らによって考案、展開されている(Gendlin, 2004; Gendlin, 2009)。

Gendlin 自身の哲学分野での業績は、フォーカシング技法の考案以降も発展し続けた。博士論文を改定・改題した *Experiencing and the Creation of Meaning* (Gendlin, 1962/1997)から、晩年の主著 *A Process model*(Gendlin, 1997a)に到るまで、多くの哲学に関する文献を提示している。

実際には、1990 年以降に Gendlin の発表する論文のほとんどは哲学分野に関するものである。1997 年には、哲学者の David Levin が編著者となり、哲学や言語学、心理学、認知科学などの立場の 14 名の研究者が「ジェンドリン哲学(Gendlin's Philosophy)」について論じ、Gendlin 自身がそれに応答する *Language Beyond Postmodernism* (ed. Levin, 1997)が出版された。2010 年代に入っても、Gendlin は独自の哲学(Philosophy of the implicit, A Process Model)に関する分野の研究論文を多く発表し、2017 年に逝去するまで、自身の哲学を展開させ続けた。

第 2 節 Gendlin の言語観とフォーカシング実践における言語の位置づけ

1. フェルトセンスの特徴−「前言語的」な性質をめぐって−

Gendlin の哲学、およびその特徴が色濃く反映されているフォーカシング指向の実践

は、漠然と身体に感じられている有意味な感覚、フェルトセンス(felt sense)を重視するという特徴がある。“felt”という「感じる」という動詞(feel)の過去分詞と、“sense”という「意味」や「感覚」を意味する Gendlin 独自のこの用語は、Gendlin 自身が考案した６つのステップからなるフォーカシングの教授法、「フォーカシング簡便法」(Gendlin, 1981)においても用いられており、フォーカシング実践を最も特徴づける用語である。

フェルトセンスやそれを感じることについて、Gendlin は「からだの内側でのある特別な気づき」や「特定の問題や状況についてのからだのセンス(感覚)」と説明され、怒りや恐怖など、明確に感じられる情動(emotion)とは対比的に説明される(Gendlin, 1981)。また Gendlin(1996)の *Focusing-Oriented Psychotherapy* では、情動だけでなく、イメージや通常の生理的な身体感覚、不安、また催眠時や変性意識状態など、セラピー場面でクライエントが体験しうる他のものとフェルトセンスがいかに異なるのかを記述し、フェルトセンスの特徴を説明するために著作の一章分を割いている。森川(2012)がフェルトセンスにおいて「フォーカシングの中核概念であり、これを体感的につかめればフォーカシングの主要部分を理解したと言ってよい(p.395)」と記述しているように、フォーカシング実践を理解するために、フェルトセンスの性質や特徴を理解することは非常に重要であることがわかる。

このようにフェルトセンスについての理解のための説明に重きを置かれているということは、同時にフェルトセンスやそれを感じることの特徴を理解することの難しさを示しているとも考えられる。フェルトセンスについては多くの実践家、研究者が言及しているわけであるが、フェルトセンスについての性質として「前言語的な」あるいは「言語以前の」感覚という形容の仕方がある。近田(1999)は、フェルトセンスについて以下のように記述している。

> それは言葉や感情やイメージになる以前の身体で感じられる「気になる感じ」である。フォーカシングでは、すでに明確になっている「言葉」や「感情」あるいは「イメージ」や「考え方」を扱うのではない。「なんていうか……」の「……」の部分、あることは分かっているのだが、まだ表現できない「何か」を大事にする。そして、それは注意を向ければ感じられるものである(近田, 1999, p.62)。

近田はこのように、フェルトセンスはうまく言葉にできないこと、まだ表現できない

「感じ」であるという特徴をもつと指摘する。また「なんていうか……」というこの言いよどみの先にある“…”で表記される部分を感じることを、フォーカシングでは重視している。

また池見(2016a)は、フェルトセンスや、からだで感じることの特徴を形容するものとして「前概念的(pre-conceptual)」や「前言語的(pre-verbal)」という表現を挙げている(p.46-48)。漠然とからだで感じられていることは、何らかの概念的な理解以前の「なんとなく」という表現がふさわしいような仕方で捉えられ、それは「それ」や「あれ」というような「何か」としか言いようがない場合がほとんどである。うまく言えないという「前言語的な」性質が、フェルトセンスの有意味な性質を特徴づけている。

身体感覚の「前概念的」という特徴については、Gendlin もたびたび用いており、例えば「暗在的なからだの感じは前概念的である(preconceptual)(Gendlin, 1964)」と記述している。このような「前言語的」や「前概念的」という表現が強調されると、フェルトセンスと言語を対比的に図式化して、前言語的なフェルトセンスの質感をより感じるために、言語での表出を控えることが求められるように思われる。実際に、Gendlin はフォーカシングのステップにおいてある問題についてのフェルトセンスを感じることを促すために、「『この問題全体はどんなだろうか』と自分に聴いてください。でも、それに言葉で答えないでください(but don't answer in words)。問題の全体を感じてください。その感じの全部です(Gendlin, 1981, p.60)」という教示を用意している。この場面のみ切り取ってしまえば、フォーカシングでは感覚の「言語化」を排しているようにも捉えられがちであるが、実際のところはそうではない。

フェルトセンスの性質としては、決して「非言語的」ではなく、池見(2016a)らが記述するような、あくまで「前言語的」と形容される所以がある。もっとも次に詳細に見るように、Gendlin 自身は身体感覚を「前言語的」という位置づけでさえない、と指摘している。このことは、Gendlin 自身が論文中にたびたび用い、近田(1999)の引用の中にもあった“…”という仕方で表記される身体感覚の性質から論じられている。

2. Gendlin における“…”という表記とその性質

一般に“…”という表記は、「三連ドット」や「三点リーダー」と呼ばれ、文章や言葉の省略(ellipsis)を示す他、沈黙や時間の経過などを示すものである。また、例えば“to be continued…”のように、未完結やさらなる継続、余韻を表現するためにもしばしば用いられる。ここで取り上げたいのは、単なる言葉の省略や欠如、内容の継続を示すものと

は異なった、Gendlin 独自の“...”の使用法である。

Gendlin の“...”の使用例は、言語における身体感覚の機能を示すための具体例を述べる中で見受けられる(論文によってドット(“.”)の数が 4～6 個と一定でなく、またアンダーラインで強調されているものもある)。この使用法は、フォーカシングが考案された後の 1980 年代後半から、1990 年代以降に発表された Gendlin の論文の中で特に顕著である(Gendlin, 1987, 1991, 1991/1995, 1992,1993, etc.)。

また、先の近田(1999)だけでなく、Purton (2004)や Karali & Zarogiannis (2014)など、複数の先行研究においても、フォーカシング指向心理療法の理論的な理解をための手がかりにとして、Gendlin がしばしば用いるこの“...”に注目している。Purton(2004)は Gendlin が「この“...”、(ドット、ドット、ドット)という特殊表現(device)によって「感情プロセス(feeling-process)」をしばしば指し示す (Purton, 2004, p. 177)」と指摘し、その特徴として「(...) はそれ自体は言葉では表現されえないが、言葉を導き出すことができ、また言葉は‘それ’に影響を与えうる」(Purton, 2004, p.177)と記している。

また Karali and Zarogiannis (2014)はこの“...”について以下のように捉えている。

> Gendlin uses the device [...] (“dot, dot, dot”) to depict the *implicit* that has not yet been made explicit sometimes he also refers to the implicit as “the more,” while the process is sated as *experiencing*, to stress its fluid, active qualities (Karali & Zarogiannis, 2014, p.37).

Gendlin が“...”という特殊表現で示しているものは、「感情プロセス」や「暗在」、そして「より多くのもの」というような様々なものを指し示しており、かつ“...”それ自体は言葉では表現できないという性質をもつ。また後で確認するように、Gendlin 自身もこの“...”について、論文中で「ブランク(blank)」や「スロット(slot)」、あるいは「むき出しの発言(naked saying)」や「休止(the pause)」、「含意(implying)」というような、様々な用語によって言及されている。フォーカシングにおけるフェルトセンスも、この“...”を指し示していると言える。

この“...”に対して、上記のような様々な用語が用いられていること自体が、“...”それ自体が言葉では表現できないが、なんらかの言葉を導き出すことができるという“...”の「前言語的」と形容しうる性質を既に如実に示していると言える。

3. Gendlin における“…”の使用例

Gendlin が“…”の例としてたびたび用いる場面として、(1)何かを思い出せないときの例、(2)詩人の詩作の例、(3)心理療法からの例という３つを提示する。先に指摘した通り、“…”という表現は 80 年代後半から 90 年代に入って以降に頻繁に用いられており(Gendlin, 1987, 1991, 1991/19951992, 1993,etc.)、“…”の例として挙げられている場面も同じモチーフが繰り返し使用されている。

(1) 何かを思い出せないときの例

Gendlin は、日常生活の中で起こりうる「何かを思い出せない」場面を例に挙げている。以下に引用する例は、多くの論文で用いられているモチーフである。

> You see someone you know coming down the other side of the street, but you don't remember who it is. This is totally different than seeing a stranger. The person gives you a very familiar feeling. You cannot place the person, but in your body there is a gnawing feeling. That gnawing feeling does know. Your body knows who it is. It is ....., a whole sense in your body.
>
> Your body also knows how you feel about the person. Although you don't remember who it is, your ..... has a very distinct quality. If you had to describe it, you might say, for example: "It is sense of something messy. I feel a little as if I'd rather not have much to do with that person, but there is also mixed in with it some odd curiosity that doesn't feel too sound, and uh ....." If you went on further into it, you could find more and more, both about the person and about yourself. But the whole felt sense cannot be put into words. However well you express it, there is always more left in it than you said. Even to say some of it, you have to make up new phrases because it does not fit into the usual phrases and categories. It is uniquely your sense of that person. Any other person would give you a different body-sense.
>
> By focusing your attention on the ....., you may suddenly remember who the person is. Now you might be surprised. You might say "I didn't know that I felt that way about the person!" (Gendlin, 1993, p.31)

これらの例は日常生活の中で誰しもが体験しうるものであるが、Gendlin はこのときの「思い出せないが、確かに知っている」という際に身体的に感じられているその質感を“...”という表記で表現している。

(2) 詩人の詩作の例

次に挙げる詩人の例もまた、Gendlin が頻繁に用いているモチーフである。この例をあげる際にはたびたび「私はあなたの秘密を知っている。あなたは詩を書いたことがありますね？」と読み手に問いかけ、詩を書いている際の視点に立ってこの例を読むように促している。細かな表現に違いはあるものの、多くの論文でほとんど同様の場面を例示に用いている(Gendlin, 1987, 1991, 1991/1995, 1993, etc.)。これらの中からたびたび記述されている“...”について詩人による詩作の場面の例を Gendlin(1991)から引用する。

> The poet stops in midst of an unfinished poem. How to go on? Perhaps there is only confusion. No leads.
>
> The poet reads and re-reads the lines. Where they end something *does* come! The poet hears (knows, reads, senses, ...) what these lines need, want, demand, imply, ... What the next line must say is now already here — in a way. But how to say that? What is *that?* It is ..... — the poet's hand is silently rotating in the air. The rotating gesture says that.
>
> The poet tries this line and that. Many lines come. Some seem good. The poet listens into what each of those lines can say. Poets constantly listen into an unexplored openness — what can this new phrasing say? A great many such lines come and are rejected. The poet reads to the end of the written lines again and again. Each time that ..... comes.
>
> The lines that offer themselves try to say, but do not say — *that. That* seems to lack words, but no. The ..... is very verbal: It knows the language well enough to understand — and reject — all the lines that come. That blank is not a bit pre-verbal; it knows what must be said, and it knows that the lines which came don't say that.
>
> The blank is *vague, but it is also more precise* than the poet can as yet say. It cannot be said in common phrases. Poetry creates new phrases to say something

new. This ..... demands and implies a new phrase that has not yet come. So the ..... is actually more precise than what has ever been said before in the history of the world.

Of course, in a way the blank *is said* by the lines leading up to it. The poet can have (get back, keep a hold of, hear, sense, ...) this blank by re-reading and listening to the already written lines — over and over. So they do seem to say it, or, more precisely: They have a role in saying what is further to be said.

But when the next line does come, it nearly always forces some revision of these already written lines. The written lines imply something that will revise — those very lines (Gendlin, 1991, p.47-48)

引用の一節にある“So the ..... is actually more precise than what has ever been said before in the history of the world”という言い回しは、Gendlin (1991/1995)の“new in the history of the world” という記述と同じく、詩人の例が記述された論文においてたびたび用いられている(Gendlin, 1987, 1991, 1991/1995, 1993)。つまり、詩人がまだ言葉にできていないこの“...”の中を埋めるであろう、この詩人が思いつく新しい表現は、これまでの歴史の中で初めて用いられることになるかもしれない全く新しいものだ、ということになる。つまり、この詩人の例における“...”は、1つめの例のように「単に忘れてしまったものを思い出せない」ということではなく、創造的なプロセスにおいても生じうるものである。

(3) 心理療法の例

最後に挙げる例は、心理療法の一場面からのものである。Gendlin が心理療法家として関わったと考えられるある女性クライントとのやりとりが、逐語的に提示されている。そのクライエントについての詳細は説明されていないが、ここで重要なのは、クライエントがどのように語っているかという点である。次は、Gendlin(1992)からその例を引用する。

The client has a felt sense, something about not wanting to live, being pulled to die, something very sore. She says that she badly needs rest, but resting is impossible because *this*, in her, will not rest.

(silence) . . . . . This needs to rest, and it can't. If it lets down and rests it will die.

I keep her quiet company. I only repeat: "Maybe it could let down and rest if you could trust something." As therapist, I think, "If only I knew what to do!" No, wrong. As therapist, if the client is already feeling and sensing that stuck blank, keep quiet. The step comes from that bodily-felt sense:

(silence) . . . . .

After a minute, she says:

Now, suddenly, it feels like a house on stilts that go into the earth. All of me on top . . . that's a house and it's on stilts. It is lifted off of this sore place. Now the sore place is like a layer, and it can breathe. Do you know those steel posts they put into the ground, to hold up a building? These stilts are like that.

(silence) . . . . . Yea (breath), now there's time for that sore place to breathe.

Later she says:

When I was little I played a lot with stilts. I used to go between the power wires on them. It was dangerous, but it was play! I used to make taller and taller ones, and go on them there. Stilts! I haven't thought of those for years. And play, and danger. How does this process do that? It uses all these things to make something that wasn't there before.

Like every experience, this one includes much from the past. The play in the danger zone and the stilts are from the past. But this step is not a deeper experiencing of the past. This client had experienced the past more deeply many times before. *Here something new came instead,* a new physical way of being, a new internal arrangement that never existed before (Gendlin, 1992, p.199-200).

この心理療法のやりとりの例では、具体的な内容は語られてはいないものの、このクライエントにとって非常に困難さを感じている状況に関して、沈黙(....)を経て、その状況についてのクライエント自身の捉え方が展開していくプロセスが描写されている。特

に、１分ほどの沈黙の後に述べられた「地球へとつながっている竹馬の上の家みたいに感じる(it feels like a house on stilts that go into the earth)」というメタフォリカルな表現が手がかりとなり、クライエントが自身の状況について取り組む新しいステップがもたらされているところは興味深い。

4. Gendlin の言語観における“...”の特徴とその機能

上記の３つの例の中で示されている“...”に関する論述から、Gendlin の“...”という表記から見受けられるその特徴や性質、機能について概観する。Gendlin は一見すると相反するような特徴を“...”の中に見出している。以下にそれらを提示する。

(1) “...”は身体的に感じられる

あることを「思い出せない」例のように、何かを思い出そうとして思い出せないとき、喉元のあたりを押さえながら「ここまで出てきているのに、出てこない」などと身体に感じられるその違和感を表現することがある。英語にも“on the tip of one's tongue”(舌先まで出かかっている)という言い回しがあるように、まだうまく言えないその「何か」が、身体的に確かに感じられるということがある。このような事態を Gendlin は“...”という表記で論じている。また詩人の例では、まだ適切な言葉が出てこなくとも、詩人の手先は宙を描きながら、その“...”を表現しようと試みている。詩人の身体は“...”においてそれを知っている。その人自身がまだ言葉で把握していないものを、身体はどのように知っているのか、Gendlin は以下のように記述する。

> Language is implicit in the body. The body knows language. But language is not a closed system. The body can always give the words more feedback than can possibly be derived just from concepts or forms or distinctions (Gendlin, 1992, p.193).

身体は、すでに把握されているある言葉よりもより多くのものを“...”の中に反映させることで、その人が未だ言葉にできないことをその人に身体感覚的にもたらすことができる。その“...”が言葉になった際にも、身体感覚からの反映が重要な役割を果たす。例えば、「ここまで出てきているのに...」と何かが思い出せないとき、そのことを思い出そうと試みていて、遂にそのことを思い出し、「あっそれだ！」と思い当たったとき、その違和感、つまり“...”を感じていた箇所に「腑に落ちる」と言われるような身体的な開放感がも

たらされることがある。このような感覚は、すでに知っていることを思い出した際だけでなく、詩人の例のように、何か新しいことを思いついたりひらめいたりした際にも伴う。このような何かを思い出したり、ひらめいたりする際の新しいアイデアの到来について Gendlin は以下のように記述する。

> This *coming* is characteristic of the body. What else comes like that? Sleep comes like that, and appetites. If they don't come, you just have to wait. We all know that. Tears come like that, and orgasm (Gendlin, 1992, p.194).

「腑に落ちる」という身体感覚を伴った新しい言葉の到来を、Gendlin は睡眠や食欲、オルガズムのような身体的なプロセスと同様に身体的な特徴から捉えている。そして、フォーカシングにおけるフェルトセンスもまた、このような身体的なプロセスとして生じうるものとして捉えられている。新しい言葉や考えの到来における“...”の身体的な特徴は、Gendlin の言語観の特徴のひとつである。フォーカシング実践に関連して、このような身体的に感じられる変化は「フェルトシフト(felt shift)」と呼ばれ、フォーカシングの実践の中で新たな気づきや理解が生じた際に、たびたび言及されている(Gendlin, 1981)。

(2) “...”は言語的なものである

新しい言葉の到来における“...”の身体的な特徴について言及される一方で、Gendlin は“...”の「言語的」な特徴も同様に強調している。「私たちがあることを言葉にできないように思える時、その沈黙は無言なのではない(the silence isn’t wordless)(Gendlin, 1987, p.7)」という記述から明らかなように、Gendlin にとって“...”は単なる言葉の欠如を示さない。別の箇所で Gendlin はこのように述べる。

> The ..... is very verbal: It knows the language well enough to understand — and reject — all the lines that come. That blank is not a bit pre-verbal; it knows what must be said, and it knows that the lines which came don't say that (Gendlin, 1991, p.47-48).

引用のように、Gendlin はこの“...”を「言語的(verbal)」と形容し、かつ同時に「前言

語的(pre-verbal)」ではないと強調している。この“…”は、この空白の中に入るべき言葉がどのようなものなのかについて、実際に到来する言葉を精査し、適切でないものを却下するように機能するため、言語的なのだという。つまり、やがて言葉にできるかもしれないが「今はまだ言葉にできていない」という意味においてすら「前言語的」とは形容されないのである。すでに「その言葉では語られてない」ということを、その言葉の却下をもって示すという特徴によって、“…”は「言語的」と形容されているのである。

詩作中にブランクとして現れる“…”は、それ自体が「何か」を詩人に示している。例えば Gendlin は「以下に、議論を導いていく(Following this paper I will “lead” a discussion)」という一文を例にとる。この「導く(lead)」という語を「指揮する(conduct) 」「進行する(moderate)」「刺激したい(hope to stimulate)」などと言い換え、さらには「私はこの議論を料理したい(I hope to cook a discussion)」とも表現している。その上で、これらの言い換えが意味を成した後であれば、「私はこの議論を“…”したい(I will try to “…” a discussion)」というようなブランク(“…”)ですら意味を成し、「その箇所が空白のときですら伝えることができる(Gendlin, 1991/1995)」と指摘している。

この“…”は、言葉が欠如しているように見えるときでさえ、言語的に機能しうる。特に、詩人の例のように、その言葉の空白箇所、ブランクが何らかのものを伝えようとしているときには、そのブランクはすでに言語的に機能しているのである。この“…”の機能に関して、Gendlin は以下のように指摘する。

> The blank brings something new. That function is not performed by the linguistic forms alone. Rather, it functions between two sets of linguistic forms. The blank is not just the already written lines, but rather the felt sense from re-reading them, and that performs a function needed to lead to the next lines.
> A second function: If that stuck blank is still there after a line comes, the line is rejected. Thirdly, the blank tells when at last a line does explicate-it releases (Gendlin, 1991/1995).

Gendlin(1991/1995)はここで“…”に関する３つの機能を挙げている。それらは、①“…”がそこに「まだ言い得ていないさらなる言葉」があるということをもたらす機能、②思いついた言葉がそれ(“…”)にそぐわないときに、それを「却下する」機能、③その“…”に

ふさわしい言葉が見つかった際には、その到来を感覚的に(腑に落ちる感覚を伴って)伝える機能である。つまり、Gendlin の“...”は「言語的」に意味を有すると同時に、その意味を「身体的」に伝えるというための諸機能を共に有していることがわかる。

(3) “...”は「曖昧な」性質と「より精密な」性質を併せもつ

ここまで、“...” の有する「身体的」かつ「言語的」な性質について論じてきた。この“...”の性質に関して、Gendlin はさらに以下のように記述している。先にも通して引用箇所であるが、ここで改めて提示しよう。

> The blank is *vague, but it is also more precise* than the poet can as yet say. It cannot be said in common phrases. Poetry creates new phrases to say something new. This ..... demands and implies a new phrase that has not yet come. So the ..... is actually more precise than what has ever been said before in the history of the world(Gendlin, 1991, p.47-48).

詩人が詩作に取り組む際に現れる“...”は、その違和感を身体的に漠然と感じている「曖昧な(vague)」ものであると同時に、「この言葉では語られていない」と明確に指摘しそれを却下できるような「より精密な(more precise)」ものでもある。身体感覚は非常に「精密」に“...”に到来するいくつかの言葉のふさわしさを精査しており、かつ“...”の中にはそのような様々な言葉を呼び込んでいく言語的に「曖昧な」ものでもあるとも言える。さらにこれが「世界の歴史の中でこれまで語られてきたもの」よりも、より精密に何かを語りうる創造性の根源として機能する。

この「曖昧な」性質と「より精密な」性質という、一見すると矛盾するような特徴が、“...”において同時に機能している。この特徴は、これまでの語られてこなかったような、新しいフレーズを作り出すための創造的な機能を支えている。興味深いことに、Gendlin はこのような“...”のその機能自体を“...”の特徴を用いて以下のように説明している。

> When many words come into a slot, each says the slot further and differently. For example, do "vague" and "precise" say the same? No, the precision of the ..... is not its vagueness. Once "vague" has worked, "precise" says something new and more precise. It says the precision of this vagueness (Gendlin, 1991, p.57).

Gendlin はここで「曖昧な」と「より精密な」というそれぞれの言葉が、同じ 1 つの“…”という箇所に関して用いられることによって、それは従来の「曖昧な」だけでも「精密な」だけでも語り得ない、その“…”に独自の「この曖昧さにおける精密さ(the precision of this vagueness)」を語ろうと試みているのである。このように、“…”には「身体的」かつ「言語的」、また「曖昧な」かつ「より精密な」という、それぞれに相反するような両側面の特徴を同時に有している。このような“…”の性質が Gendlin の言語観を特徴づけており、またそれ故に、“…”は新しいものを呼び込む創造性の根源として捉えられている。

4. Gendlin の言語観と“…”の機能

Gendlin は、言葉の欠如として捉えられがちな身体感覚的な“…”に、言語的な有意味性を認め、そこに新しい言葉の到来を呼び込む創造性を見出している。フェルトセンスを「前言語的」と形容してしまうことから連想される「身体的」と「言語的」という対比的な図式は、Gendlin 自身の言語観においては採用されない。“…”という表記においては、「身体的」と「言語的」、あるいは「曖昧な」と「精密な」という一見すると対比的な性質が共存している。Gendlin のこの独自の言語観が、言葉による応答や技法と用いることで、言葉以上の身体感覚との関わりを促すというフォーカシングという実践を支える発想となっているのである。

そのため、フォーカシング指向の実践では、有意味なブランクであるこの“…”をいかに形成するかが重要となってくる。言葉ではうまく言えないフェルトセンス、つまりこの“…”と関わりながら、言葉を尽くし、その“…”に含意されている独特の質感にふさわしい、新しい表現を試みていく。このような言葉の「特殊な使い方」を身につけられるように促すことが、フォーカシングの本質的な特徴だということになる。

Gendlin がフォーカシングの後に考案したもう 1 つの実践である TAE においても、この“…”の機能を利用するという特徴が反映されている。TAE は本来 14 のステップからなる創造的思考法であるが、特にステップ 1～5 が含まれるセクション「フェルトセンスから語る」では、自身で作ったあるセンテンスを読み直しながら、気になる語句に下線を引いていく。そして、その下線部の箇所を「ブランク(blank)」にして、その中に、辞書的な定義とは異なった独自の言葉を見出す、という作業を行う(Gendlin, 2009b, p.155)。

これらの TAE のステップは”…”に含意されている言葉を見出そうと試みる創造的な

言語運用のプロセスを、意図的に行えるように技法化されている。このように、TAE には先に指摘したような Gendlin の言語観の特徴が、顕著に見受けられるのである。

第 3 節 フォーカシング実践における言語の機能と Gendlin の交差概念

1. フォーカシング実践における言語の機能

先に紹介したように、TAE という実践では、実際に言葉の「ブランク」を意図的に作り出すことで、Gendlin の“…”という表記に特徴的な Gendlin の言語観の特徴が実現されるようになっている。では、通常のフォーカシングやフォーカシング指向心理療法においては、以上に見てきたような Gendlin の言語観の特徴はどのように反映されているのだろうか。

村里(2005)は、「TAE はフォーカシングより、はるかに言語を重んじる(p.39)」と指摘している。フォーカシングにおいても、実際にはシンボルとしての言語は機能しているが、実際に紙とペン、ワープロを使う TAE と比較した場合、形式的にも内的な作業においても両者は重なる点は多いものの、「フォーカシングは用語を見つけたり、文書を作ったりする必要はない。TAE はまさにそれを実践するのである」(村里, 2005, p.39)と、村里は TAE における言語使用の役割をより強調している。

先に確認した通り、“…”という表記は、Gendlin の文献においてもフォーカシング(Gendlin, 1981)がすでに考案された以降 1980 年代後半から 90 年代以降において、頻繁に用いられるようになった。“…”という表記が身体的だけでなくむしろその言語的な性質を強調するものである。また、2000 年代に入り TAE が開発された経緯から考えて、フォーカシング考案以降の Gendlin の言語観にもとづく実践は、より言語の役割に重きが置かれてきたという見方も想定できよう。むしろ、かつて「前概念的(preconceptual)」(Gendlin, 1964)という言い回しを用いていた Gendlin 自身が、後に「前言語的(pre-verbal)」という表現を退けていることからも、この論点は支持されるだろう。

2. 体験過程スケールと言語使用への注目

しかし実際のところ、フォーカシング実践においては、“…”の特徴が示すように、身体感覚の機能を重視するために言語の機能は重要な要因となっている。村里(2005)も指摘したように、実際にフォーカシングのプロセスには、シンボルとしての言語の機能(Gendlin, 1962/1997)に支えられている。Gendlin(1962/1997)にとっては、身体感覚に注意を向けることも 1 つのシンボル化であり、シンボルはそのような身体感覚と相互作

用するあらゆるものを指す。イメージやジェスチャー、身ぶりやアート表現など、あらゆるものがシンボルであり、言語もまたシンボルとして扱われる。つまり Gendlin にとっては、通常は「非言語的」と表現される身ぶりやアートなどの象徴と言語が、同じ「シンボル」として、シームレスに繋がっているということになる。むしろ、言語/非言語の対比よりも、そのようなシンボルと、身体的に感じられる意味との機能的関係に着目するのが、Gendlin の哲学の大きな特徴である(Gendlin, 1962/1997)。

Gendlin の理論的な観点で言えば、非言語的な側面と言語的な側面は確かにシームレスに繋がってはいるが、一方で実際の言語の役割というものも欠かすことはできない。例えば、フォーカシングの考案の経緯となった「体験過程スケール(Klein, et al. 1970)」は、クライエントや話し手が体験過程に触れている度合い(体験過程の様式)を評定するものである。この評定の対象は、録音記録から書き起こされた逐語記録のセグメントである。また、体験過程スケールでは、話し手が「何を話しているか」ではなく、「どのように話しているか」に着目しているが、セグメントに沈黙など非言語的な情報が含まれていることはあるにせよ、実際にはセグメントによる言語表出の仕方から、体験過程の様式を推定しているのである。フォーカシング考案の契機となった心理療法の効果研究(Klein, et al., 1970)は、体験過程の様式をターゲットとした心理療法プロセスにおける言語使用の仕方についての知見だったのである。

フォーカシング実践において、フェルトセンスの「前言語的」側面が強調されてきた一方で、言語の機能や役割という観点は、フォーカシングの考案には欠かせないものである。実際のところ、ペアワークあるいは独りでフォーカシングを行なったとしても、果たしてまったく「言語」を用いることなくフォーカシングを実践することは可能であろうか。言葉にせずに感じてみる、ということをしたとしても、実際にはリスナーに伝えるために言葉にしようと試み、それがさらにフェルトセンスへと照合させる契機となっている。またそのようなプロセスを「内言」として黙々と行っていたとしても、そこには言葉がない、と言えるのだろうか。フォーカシング実践は、実際には「前言語的」な要素が重要なのではなく、広義のシンボルを含む「言語的」な相互作用のもたらすプロセスだと記述したほうが、その実際にふさわしいと考えられるのである。

3. Gendlin 哲学からフォーカシング実践を再検討する

Gendlin の哲学やその言語観からフォーカシング実践を再検討することは、フォーカシング実践のさらなる理解や発展につながると考えられる。それだけではなく、例えば

Gendlin の“…”の表記に見られるような言語観の変化がフォーカシングだけでなく TAE という実践を生み出す土壌となったように、Gendlin 哲学からフォーカシング実践を考えることは、Gendlin の哲学の特徴をさらに反映させた実践のさらなる展開を引き起こすことにつながるとも考えられる。

池見(1999)は、フォーカシングという実践についての「一番具体的で、マニュアル的な側面が世の中に広まっていく一方で、ジェンドリンの哲学的・理論的なその陰に埋もれていく」という印象があるとかつて記述していた。しかし現状としては、河﨑(2014)の指摘のように、2010 年代に入り日本国内でも Gendlin 哲学や体験過程理論への理解が深まるにつれ、フォーカシングの理論的側面に関する哲学的研究が報告され続けている(例えば三村,2015; 田中, 2015)。目下のところ、このような理論研究の蓄積を土壌として、新たな実践展開を理論的に検討し、また理論からさらに新しい実践を生み出していくという、往復的な研究がいっそう求められている。

ある論文で Gendlin(2004)は、フォーカシングについて「この実践について理解するのに、哲学を理解する必要はない」と記述した。また『夢とフォーカシング』という邦題で知られる著作の理論に関する付録の冒頭の一節では、理論について「この理論が好きでなければ、理論が本書で述べたような体験的なステップの邪魔にならないようにしましょう。体験的な理論をもとにして作られたものではありません。これらのステップに、理論は必要ありません。理論がここでは付録になっているのはそのためです(Gendlin, 1986, p.141)」と記述している。哲学者である Gendlin 自身は、自身の紹介する実践が自身の理論にもとづいているという理解を退けるために、あくまで理論展開については慎重であった。一方で、この付録の最後の頁において、Gendlin は以下のように記述する。

> Theory does not represent what “is.” Theory makes sense, but sense-making is itself a kind of step which expands what “was.” That opens to even more further steps, and these need not stay consistent with the theory (Gendlin, 1986, p.162).

Gendlin にとって理論とは、すでに存在する知見を写し取ったものという位置づけではなく、意味を作り出し、従来の知見をさらに押し広げてさらなる知見を拡張させるた

めに活用されるものである。つまり Gendlin の哲学や理論的展開自体も、このようにフォーカシング実践に関する知見をさらに押し拡げるために活用することが可能であろう。特に、フォーカシングの開発経緯やその実践に不可欠な要素である「言語」をめぐる理論的な知見は、フォーカシングの実践の理解を深め、さらなる実践の展開可能性へと拡張する上で重要なテーマであると考えられる。

4. Gendlin の「交差」概念

Gendlin の“…”という表記に見受けられる彼の言語観の特徴と同様に、フォーカシングが考案された 1980 年代以降に展開されている Gendlin の理論的な記述から、再度フォーカシング実践を検討することは、フォーカシング実践のさらなる理解や展開を考える上で意義がある。特に、Gendlin が自身の哲学において独自の用語として、この時期に展開させている概念に「交差(crossing)」がある。交差は、後に見ていくように、Gendlin の言語に関する哲学的な用語において重要な位置を締めながら、TAE など実践的なワークにおいても方法的に取り入れられており、Gendlin の理論的な知見と実践的な知見の架け橋となる概念である。

(1) 交差概念の概要

Gendlin は多くの論文や著作において、交差について論じている(Gendlin, 1986, 1987, 1991, 1991/1995, 1996, 1997a, 1997b,1997c, 1997d, 1999, 2002, 2004, 2009a, 2009b)。確認できる限り、出版年順のみを考慮すると、初めて交差概念が用いられたのは、Gendlin(1986)の著作 *Let your body interpret your dreams* における巻末の付録 A においてである。また、交差がタイトルに含まれる論文“Crossing and Dipping”(Gendlin, 1991/1995)をはじめとして、1990 年代に入り交差について言及された論文が多く発表され、近年まで未刊行扱いであった著作 *A Process Model* (Gendlin, 1997a)においても、交差について言及されている。なお、Gendlin(1997a)など、先の Gendlin(1991/1995)がレファレンスとして提示されている論文が非常に多く、“Crossing and Dipping”(Gendlin, 1991/1995)交差概念に関する代表的な論文として Gendlin に位置づけられていると考えられる。

末武(2009)の言及のように、実際には *A process model* の草稿がはじめて発表されたのは 1981 年であり、これは *Focusing* の第 2 版(Gendlin, 1981)が発表された年と重なる。*A Process model* に代表される Gendlin の後期の思想は、1980 年代に入るまでの実践的な活動がその土壌となっていることは明らかであるが、本研究で注目する「交差」の概

念が実際に公刊され活発に論じられるようになったのは、1980 年代後半であり、特に 90 年代以降の論述によってさらに展開されている。

(2) 状況と言葉の使用群の交差

Gendlin(1991/1995)において交差は、さまざまな状況で用いられる言葉の使用群(use-family)と実際にその言葉が使用される「状況(situation)」とのあいだの機能的な相互作用について論じる際に用いられる用語である。Gendlin(1991/1995)は、Wittgenstein 後期言語哲学における言葉の意味を「言葉の使用(word's use)」と捉える議論に着目し、言葉の使用の「家族的類似性(family resemblance)」(Wittgenstein, 1953/2009)を参照しながら、さらにそのような言語使用をめぐる「秩序(order)」に言及する。その中で、さまざまな状況において使用される言葉のその使用のそのバリエーションの一群について、「言葉の使用群(word's use-family)」という独自の言い回しで表現し、多くの使用群を有するある言葉が、実際にある特定の状況で用いられることで、言葉と状況が「交差する(crossing)」ことで、言葉は意味を成す、と捉えている。

なお、この「交差(crossing)」という用語の語源や、着想のもととなった知見については、Gendlin(1991/1995)を含め、具体的に文献上では、明記はされていない。しかし、Wittgenstein(1953/2009)において、先の「家族的類似性」や「言語ゲーム」に関する記述の中で、"crossing"という言い回しに類する表現が見受けられられる。数多あるゲームというものの類似性についての分析に関して、Wittgenstein は以下のように記述する。

> And the upshot of these considerations: we see complicated network of similarities overlapping and criss-crossing: similarities in the large and in the small (Wittgenstein, 1953/2009. p.36[e]).

> I can think of no better expression to characterize these similarities than "family resemblances"; for the various resemblances between members of a family –build, features, color of eyes, gait, temperament, and so on and so forth–overlap and criss-cross in the same way. –And I shall say: 'games' form a family. (Wittgenstein, 1953/2009. p.36[e])

Wittgenstein が「家族的類似性」という用語で論じるその類似性の特徴を形容する表現

として、この英訳版では“overlapping and criss-crossing”という言い回しが用いられているが、この“cross-crossing” あるいは“criss-cross”はドイツ語の原文では“kreuzen”という語が用いられている(Wittgenstein, 1953/2009. p.36)。“Kreuzen”という動詞は英単語“cross”と多くの意味を重ねる語で、道が「交差する」や足を「交差させる(組む)」などの意味や、人と人とが「出会う(交わる)」のほか、「交雑させる」「交配させる」という意味を含む単語である(この点については第 8 章も参照)。Wittgenstein が用いている“Kreuzen”という語は、Gendlin が「交差(crossing)」という語で意味するものと類似している。しかし、 Gendlin(1991/1995)においてこれに関連する記述は見当たらず、また Gendlin(1997b)では Wittgenstein(Wittgenstein, 1953/2009)からの引用はあるものの、上の引用箇所についての言及はなされていない。

このように交差概念の由来についての直接的な言及はないものの、Gendlin が Wittgenstein の後期言語哲学における言語使用への着目を参照しながら、独自の仕方で「交差」概念について展開していることは確認できる。それは交差に関する以下のような記述に反映されている。

> We can look more closely at this intricacy of a use family: The many uses are not just separate, as if next to each other. A use-family consists of actual uses, each of which has already crossed with the whole family. A use-family, our knowing-how-to-use a word-is a crossing, and any actual use must be a fresh crossing, else we would not know what the word says here (Gendlin, 1991/1995).

> So we see that these many different situations are all crossed in our felt sense of familiarity with a word. This crossing of these many situations is a linguistic function performed by our felt sense of knowing-how-to-use the word (Gendlin, 1991/1995).

このように、ある状況におけるある言葉の使い方を知っているということ自体がひとつの交差であり、それはまた実際には、その状況でのその都度の使用において、新たな交差である。そして、そのようなある状況での言語使用である交差は、その言葉を知っているということに関する私たちのフェルトセンスによって遂行される。Wittgenstein

の言語哲学を援用しながら、Gendlin の交差概念では、こういったある状況における言語使用を導く身体感覚、フェルトセンスの機能をさらに重視していることがわかる。

Gendlin (1991/1995)は、言語使用についてのこのような側面を参照している先行研究は、「メタファー(metaphor)」に関する研究領域のみであると指摘し、Lakoff & Johnson(1980)などのメタファー研究を参照しながら、心理療法における言語使用の例などを踏まえ、Gendlin 自身のメタファー論を展開している。

(3) *A Process Model* における 2 種類の交差

また、*A Process Model*(Gendlin, 1997a)では、“交差”という概念は言語運用の起源を説明する概念としても展開されている。Gendlin(1997a)では、第Ⅶ—B 章の言語の起源に関する議論において、言語使用をめぐる従来の発想では、言語化に伴って状況についての詳細な状態は欠落(drop out)し、そのような言わば抽象化によって、言語使用は可能となると捉えられてきた。しかし Gendlin はこの発想は重大な間違いであり、「交差においては、詳細は欠落しない(In crossing, the detail don't drop out)(Gendlin, 1997a, p.184)」と指摘し、交差概念から言語使用について論じていく。その際、2 種類の交差について提案されている。1 つは「側面的交差(lateral crossing)」であり、もう 1 つは「収集的交差(collective crossing)」である。

Gendlin(1997a)の例を手がかりとして、この 2 つの交差の機能と関係について概観する。例えば、ある状況において動物が「走る(running)」という行動を取ったとする。この「走る」というひとまとまりの行動を 1 つのパターンであるとすると、他の行動パターンとは差異が生じる。例えば、走りながら川の水を飲むということはできないし、飲みながら走ることもできない (Gendlin, 1997a, p.185)。同様の意味で、走りながら眠ることはできないし、逆も然りである。このように「走る」という行動パターンは、ある状況において可能となる他の多くの行動とのあいだに相互に暗在的な関連を有する。このような関連を Gendlin(1997a)は「側面的交差(lateral crossing)」と呼ぶ。

側面的交差とは、身体がどのような行動パターンのただ中にあるのかに関連する特定の状況に由来する交差であり、あるパターンに側面的に関連を有する他のパターンとの関係によって、そのパターンの有する機能がさらに際立つことになる。例えば、ある動物が群れで川の水を飲んでいる際、群れの他の動物が急に移動して走り出したとしよう。その場合、「飲む」という行動パターンから「走る」という行動パターンへと変容をもたらした当該の状況自体に何らかの変化が生じた可能性が生じる(例えば、外敵が襲ってき

たというような)。側面的交差は、ある状況内におけるパターンの意味について言及する際の用語であり、上の例のように、言語を有さない動物の行動パターンなどにも見受けられうるものである。

一方で「走る」という行動パターンが、「水を飲む」「眠る」「泳ぐ」などのそれ以外の行動パターンとの対比ではなく、当の「走る」という行動パターンそれ自体によって際立つという場合がある。厳密に言えば、先の例で、ある動物が群れの他の個体が「走る」ことで危険を察知する例で言えば、その動物自体が走ることと、群の他の個体が走ることは、違う事態である。しかし、違う個体であっても、同じ「走る」という行動パターンによって、この場合の共通点を見出すことが可能となっている。さらには、「走る」というパターンは、この動物と姿形や大きさの全く似ていない動物や、直立歩行する人間にも適用することが可能であるように、「走るということ(a kind of running)」、つまり「走る」という行動の「カテゴリー」を生み出す。このような、ある状況において動物が走るという具体的な行動から「走る」というカテゴリーが生成されることを、Gendlin(1997a)は「収集的交差(collective crossing)」と呼ぶ。収集的交差では、「走る」こと一般に対して関連しうるさまざまな他の文脈と交差することで、「走るということ」というカテゴリーを生成する機能を有するのである。

いったん「走る」というカテゴリーが生成されると、例えば、特定の動物が四肢を用いて早く移動するという特定の状況において用いられていた当初の「走る」とは全く似ても似つかない文脈においても、「走る」というそのパターンを適応させることすら可能となる。例えば、「自動車が走る」や「プログラムが走る」あるいは「悪寒が走る」など、「走る」というパターンが新しい文脈と交差し、さらなる関連を生み出す。そしてそのような「走る」というパターンとその新しい文脈や状況とのあいだにはまた側面的交差が生じ、「走る」というパターンはその新しい文脈においても他のパターンと対比されさらに際立つことになる。

Gendlin(1997a)はこのように、特定の状況からパターンが生成されるという「側面的交差」と、そのパターンそれ自体がカテゴリーを作り出し、さらなる文脈へと適用されていく際の「収集的交差」という２つの機能の交差から、言語の起源について説明する。言語使用は、Gendlin(1997a)の２つの機能の交差から言えば、「収集的交差」によって支えられている。なぜなら、ある状況である言葉を用いる場合、その言葉はその状況下においてその都度一からパターン化(側面的交差)されているわけではなく、既存の言語パタ

ーンを、現在の状況において転用し意味を成している(収集的交差)からである。

このように、“A Process Model”では、交差という用語を用いて、我々の言語がどのように成立したかという問題について論じている。まず、側面的交差によって、行動パターンやオノマトペなど、その状況や文脈におけるパターンによってシンボルとしての言葉が形成される。そのような仕方で言語形成が成された後においては、ある状況において用いられる新しい言語の使用は、元々の言語の創造(側面的交差)においては存在しない「組み合わせやメタファーによって形成される(formed by combination or metaphor)」(Gendlin, 1997a,p.187)。先に挙げた「走る」という例において、当初の「走る」という行動パターンにおける意味からメタフォリカルに「車が走る」「プログラムが走る」「悪寒が走る」などと言語使用が展開されたように、収集的交差によるあらゆる言語使用は、ある言葉をそれが生み出された文脈とは別の文脈において転用されるというメタフォリカルな機能によって成り立っているのである。Gendlin 哲学における言語観の特徴である「新しい状況における全ての言語使用はメタフォリカルである(all word-use is metaphorical in a new situation.)(Gendlin, 2009b, p.150)」という主張は、このような交差の機能に支えられているのである。

(4) 理解としての交差

交差という用語は、先述のように言語使用を支える機能についての哲学的な考察における概念としても用いられている用語であるが、そのような言語使用を伴うことで生じうる言語や状況、体験の理解についても用いられている。Gendlin (1997d)は“Understanding anything exactly is a crossing. For example, a new statement must cross implicitly with a great many other things we know. (Gendlin, 1997d, p.397)”と論じているように、ある文章を理解するためには、既知のさまざまな知見を総動員する必要があることの例として、ある理解を支える交差の機能について論じている。また、このような交差による理解は、単に既知の知識を現在の体験や状況に当てはめるだけではなく、新たな気づきを伴って到来する発見的な理解についても論じられている。例えば Gendlin(1997b)は以下のように記述する。

> Crossing is an understanding, a sense of many implications at once. The crossing is what makes us say “Aha, that’s how it goes.” The concept of “crossing” explains this kind of explaining (Gendlin, 1997b, p.29).

引用のように、交差とは多くの含意が同時に伴うひとつの感覚を伴った理解に関しても関連する概念であり、思わず「そう、それだ！」と言わしめる発見的な理解をもたらすように作用すると指摘している。また同論文で Gendlin(1997b)は、“In principle any human expression is understandable,” Dilthey said, and I add: the more unique it is, the more significant it will be to us when it implicitly crosses with ours. (Gendlin, 1997b, p.41)”と哲学者の Wilhelm Dilthey の「原理的にはいかなる人間の表現も理解可能である」という言葉を引き合いに出しながら、さらにその表現がユニークであればあるほど、その表現は我々に暗在的に交差する際に大きな影響を与えるものとなる、ということを強調している。

ある理解は、すでに我々において既知的なさまざまな知見との交差によって支えられており、また交差によって、さらに新たな気づきを伴いうる理解がもたらされることになる。また、ある表現が独自のニュアンスを有しうるユニークなものであるほどに、その表現により多くのものが交差することで、さらにその表現は重要な意味を有するようになるのである。これは先の Gendlin(1997a)の「側面的交差」と「収集的交差」という２つの交差の機能によって論じられていたように、ある特有の意味を有するユニークなものであっても、我々個別の他の体験や状況と交差する際に、さらなる重要な意味を有しうるのである。理解の可能性は、その表現の普遍性のみならず、個別性においても支えられているというのが、交差の概念から捉えられる Gendlin の言語論の特徴である。

(5) 方法としての交差

ここまで見てきたように、交差という概念は、Gendlin においてあらゆる言語使用や、その言語使用による状況や体験の理解の仕組みを説明するための哲学的な用語として位置づけられている。しかし、交差は単に言語機能や理解の仕組みを説明だけでなく、そのような言語の機能を引き出すための「方法(method)」や、ある種の「手続き(procedure)」としても、「交差」という用語は用いられている。

Gendlin(1986)では、理論的な概念の交差が有する特徴である「どのような２つの事物であっても交差させることができる(Any two things can be further ‘crossed’. (Gendlin, 1986, p.150))」という点の例示として、以下のような問いかけを挙げている。

For example, how is your anger like a chair? (It just sit? It might get thrown at

someone?) If you try it with *your* anger, what comes may be new. How does that work? You let *all about chair* interact with *all about your anger* land –something comes. Then you say it "was" always true of you. But actually it was made by crossing them just now (Gendlin, 1986, p.150).

Gendlin は、「あなたの怒りは、イスとどのように似ているだろう？」という問いかけを例に、交差という発想の実際について記述している。ある人が実際に怒りを感じている中で、そのイスと怒りのあいだの似通った点、共通点に考えを巡らせてみると、例えば「居座っている」や「誰かに投げつけたい」などの共通点を思いつくかもしれない。このとき、イスがもつあらゆる特徴と、怒りのあらゆる特徴が交差することで、確かこういった共通点が「あった("was")」とその人は言うかもしれない。しかし、前もってこのような共通点が存在していたのではなく、実際には、このようなイスと怒りを交差させると言うプロセスによって、このような共通点は新たに見出されたのである。実際に、誰かにこの怒りとイスの共通点を問われる以前に、「居座っている」や「誰かに投げつけたい」などの怒りの特徴が潜在的に存在していることはない。交差というプロセスによって、怒りについての新たな理解が創造されたのである。

このように、何かと別の何かを「交差させる」という手続きは、フォーカシングを理論構築や創造的思考法へと応用した TAE(Thinking at the Edge)においても言及されている。TAE は 14 のステップによって構成されているが(Gendlin, 2009)、ステップ 8「諸側面と交差させる(Crossing the facets)」は、それまでのステップを経てフェルトセンスから形成された概念の諸側面を相互に交差させるという手続きである。

具体的には、「2 番目の側面を最初の側面において見えみると、最初の側面の内側においては見えないどのようなものが見えるだろう？(Gendlin, 2009, p.157)」という問いかけが挙げられており、ここで狙いとされているが交差である。Gendlin(2009)はこのステップの活用する補足として「『交差』は、ある側面のポイントが他の側面にも起因するということを意味する("Crossing" means attributing the point of one facet to the other.)」と指摘している。このように諸側面を相互に関連させることによって、当該の概念についての新たな理解を促すことを目的としている。この点から、TAE のステップも先に怒りとイスの共通点を探すという交差の問いかけの例と同様の意図を有している手続きであることがわかる。

(6) 対人的な相互作用における交差

交差の概念を用いて論じられるその他の対象として、対人的な相互作用における他者の体験の理解をめぐる論述が挙げられる(Gendlin, 1991/1995)。Gendlin(1991/1995)は、他者の体験を理解する際に、お互いに体験したことのない事柄や、異なった文化背景のある体験であっても、正確に理解しようとする中で、他者の反応を手がかりにさらに精密に理解していこうと試みるプロセスを交差という用語で論じている(第 5 章も参照)。

その際、「交差は、他者のなかに、彼らや私たちにとって新しい何かを創造する(Crossing creates something in the others that is new to them and to us)(Gendlin, 1991/1995)」と記述しており、対人的な相互作用によって、お互いにとって新たな理解をもたらす創造的な機能に注目している。このような相互に精密な理解を生み出す対人的な交差のプロセスに対して Gendlin (1991/1995)は、アメリカの心理学者・倫理学者である Carol Gilligan らの「共に感じること(co-feeling)」という概念を援用して論じている。

他者の異なる体験との相互作用から新しい側面を創造するという機能は、これまで概観してきたような、言語と状況のあいだの相互作用であるあらゆる言語使用の基盤となる交差の機能や、ある対象と別の対象のあいだの共通点を探し出すように試みる方法としての交差と共通している。

Gendlin においては交差とは、ある状況と言語の使用群との創造的な相互作用を指す哲学的な用語でありながら、他者との異なる体験を含む 2 つの対象のあいだの共通点を見出すような創造的な手続きに関しても用いられている。あらゆるもののあいだで交差による相互作用が生じうるが、その機能として、新しい何かが創造されるという点では共通している。交差とは、新しい理解やアイデアなど、何かを生み出す創造的な相互作用を指し示す非常に射程の広い概念であることが確認できる。

3. 先行研究における「交差」概念の展開

ここまで、Gendlin 自身による交差概念に関する論述を確認してきた。次に、Gendlin の交差概念が、先行研究においてフォーカシングの研究者や実践家にどのように取り上げられているかについて外観する。

(1)方法としての交差に関して

まずは、方法としての交差に関する言及である。池見(1991)の論文「超個,失個,交差と意味形成」は、同『人間性心理学研究』の第 9 号に掲載されている白岩・春日・井上(1991)

の論文への理論的な批判が展開される。白岩・春日・井上(1991)はフォーカシングのセッションのボディワークを組み合わせた独自のワークの事例について、Wilber をはじめとするトランスパーソナル心理学の枠組みから論じているが、池見(1991)はこれらの事例を Gendlin の理論から整理することを試みている。その中で、Gendlin (1986)における「交差」を Gendlin による「新たな現象学的な概念」として紹介している。池見は以下のように解説している。

> その概念は、気持が他の事象とオーバーラップしうるという意識作用を表現したものである。例えば、私の悲しみはどのように、このタバコの吸い殻のようなのかと「交差」してみることができる。半分燃えつきている。筆者の人生も半分は終わっているだろう。押し曲げられている。筆者の悲しみも概括によって押しまげられている等々、この哀れな吸い殻ひとつをとっても、そこから豊かな意味形成が可能なのである(池見, 1991. p.86)。

この「悲しみ」と「タバコ」の交差の例は、Gendlin(1986)の「怒り」と「イス」の交差の例を参照しながら考案されている。なお、Gendlin(1986)の邦訳『夢とフォーカシング』(村山正治訳)が出版されたのは 1998 年で、筆者が確認した限り、交差(crossing)の概念が本邦において最初に紹介されたのは池見(1991)の論述だと推察される。

また Purton(2004)は、Gendlin の理論にもとづく心理療法論において、先に言及した心理療法の事例に見出される身体的な「感情過程(feeling-process)を示す(...)を表現する意義に関して交差の概念を用ながら論じている。身体的な感覚を伴いうるという意味合いで、「それぞれ(...)を持っている２つの語はどんな語でも、ジェンドリンの用語をつけば交差することができ、そこから新しい側面が生まれる(Purton, 2004, p.178)」と記述し、その例として「イソギンチャク」と「時計」の交差や[1]、「自分のパートナー」と「いわしの缶詰」の交差など、独自の例によって交差について説明されている。

また Purton(2004)は、「辞書から無作為に選び出した２つの語の感覚を交差させることもできるが、自分の中から２つの単語が「ただ出てきた」場合には、その２つの語の間にはすでに相互関係がある(p.179)」と記述し、交差による新しい意味の創造が、単なる言葉の羅列による偶然の面白さではなく、すでに多くのものに関連している身体感覚の重要性について指摘している。

その上でさらに、「もし私が無作為に辞書から取り出した２つの語を交差させたとしても、それらをどう交差させるかは、間違いなく、交差を行う人に由来している(p.179)」と強調し、交差によって生み出される新たな共通点や理解が、交差を行う人の身体感覚に由来すると論じている。また Purton(2004)は続けて、このような交差による創造的な過程が、メタファーの使用、特に心理療法において見られるメタファーを用いた意味の展開において顕著であり、そして「これこそ、フォーカシングで起こることである(p.180)」と結んでいる。

このような、フェルトセンスを手がかりとした交差の実践的な応用として、森川(2010)による、痛みや痒みなどの身体症状に対するフォーカシング的取り組みが挙げられる。森川(2010)は、Gendlin(1986)や池見(1991)における交差の例を参照しながら、Gendlin の哲学おける交差を「作業概念」(森川, 2010)として位置づけ、交差を「通常の想定を超えて何かと何かをオーバーラップさせ、意味を見出す過程」であり、さらに「交差にはフェルトセンスに触れる作業が介在する」と強調する。その上で、Purton(2004)による「怒りやこりなどの身体感覚(略)や情動は状況のフェルトセンスではない」という記述などを批判的に参照しながら、フェルトセンスを手がかりとした身体症状と特定の人間関係などの交差が見受けられる複数の事例を提示している(森川, 2010)。

Ikemi A., Yano, K., Miyake, M., Matsuoka, S. (2007)は、コラージュ作品を作成し、そのコラージュをもとにペアでリスニング・セッションを行うフォーカシング指向のアートワークである「体験過程流コラージュワーク(Experiential Collage Work: ECW)」を考案しているが、事例から ECW のプロセスの特徴を考察するにあたり、コラージュ作成者(話し手) の体験と、コラージュに貼られた切り抜きや、台紙、書き加えられたドローイング、あるいはコラージュ全体など、さまざまなアイテムが交差することでコラージュの意味が創造されると論じている。このように ECW では、交差を含む Gendlin の理論を参照しながら、聴き手やセラピストなどによるコラージュの解釈以上に、コラージュ作成者自身がコラージュの意味を探求する意義について強調している。

(2) 対人的な相互作用としての交差に関して

一方で、Ikemi, et al(2007)はコラージュと作者の体験のあいだの交差だけでなく、リスニング・セッションにおける聴き手である他者と、コラージュ作成者自身の対人的な「交差」に関しても、話し手の体験をより豊かにする重要な契機として取り上げている。

また Ikemi (2013)では、Rogers のプレゼンス(presence)についての著者自身の体験を

もとに、他者のプレゼンスや言葉、相互作用全体が反省以前的(pre-reflexive)にも我々に影響を与えていると論じられており、このような暗在的な他者との相互作用について、Gendlin (1997b) による交差概念を取り上げて次のように指摘している。

> In therapy, therapists can reflect on the felt meanings they are experiencing. get a felt sense of their clients and explicate the meanings implied. Then, although these are explications of the therapists' felt senses, they do, in fact, explicate clients' experiencing, since therapists have already crossed into clients (Ikemi, 2013).

Ikemi(2013)は、このようなセラピストとクライエントの交差について、Rogers(1989)の面接記録において、Rogers が彼のクライエントである Jan の体験している他者の世界を、非意識的に感受しているという記述を手がかりに、ここで「カール・ロジャーズがジャンに交差している(Carl Rogers is crossing into Jan)」と指摘している。

Cooper(2008)が心理療法の効果研究を通じて論じているように、心理療法における関係性は、心理療法の効果に影響を与えることが示唆されている。たとえ、関係性に重きを置いていない種類のセラピーにおいても、関係性は心理療法のプロセスに影響を与えることが知られている。Gendlin(1996)もまた、「セラピーにおいて関係性(そこにいる人)が第一に重要である(Gendlin, 1996, p.297)」と強調しているように、クライエントとセラピストとのあいだの相互作用は心理療法において最も重要な要因である。

Ikemi(2013)はこのようなセラピーにおける関係性について、Gendlin における「交差」という概念を用いてその相互作用の特徴を論じている。一方で、Gendlin (1997b)を含む Gendlin の交差概念においては、他を体験の中にすでに交差しているという記述(Gendlin, 1997b)や、2 人の人間が相互作用する中に交差が含まれる(Gendlin, 1991/1995)という記述は見られるが、Ikemi(2013)が強調しているような、例えば「私があなたと交差する(I cross you)」のような人と人との関わりに“cross”という語を用いる記述は見受けられない(第 5 章参照)。Ikemi (2013)による対人的な関わりとしての交差は、先のような心理療法における関係性の問題について、Ikemi が Gendlin の交差概念を援用している例であると言えるだろう。

また Ikemi(2017)は、交差の概念をその心理療法論における意義から 2 つのタイプに

分類しており、１つは Gendlin(1986)の「怒り」と「イス」の交差に由来する、２つの言葉の組み合わせやメタファーの理解などに見受けられる、言語使用における言葉と状況の交差であり、もう一方は、Ikemi (2013)でも指摘されていた、対人的な相互作用における他者の理解としての交差である。Ikemi (2017)はこの他者の体験の理解としての交差を、Gendlin が Dilthey (1910/2002)による「追体験(英:Re-experiencing, 独:Nacherleben)」を解釈したものであると捉え、「Gendlin のいう交差という用語とは追体験のことである(...which Gendlin use the term is Re-experiencing)(Ikemi, 2017)」と指摘している。また Ikemi(2017)は、一般に「共感(empathy)」と呼ばれているプロセスよりも、追体験の方がより基本的で、容易に理解しやすいものであり、あるいは Rogers が「共感」という言葉で言い表そうとした内実こそ、むしろ追体験としての交差に類似すると Ikemi は指摘している。

このように Ikemi(2017)は交差の概念を、言語運用やメタファーによる状況の理解としての交差と、他者の体験の追体験としての交差の２種類に分類しており、心理療法のプロセスを個人の体験内(intra-personal)と対人的(inter-personal)という２つの側面を捉えるために、Gendlin による交差の概念を援用していることがわかる。一方で、Gendlin は交差の機能を、このような個人内と対人間での区分としては捉えておらず(Gendlin における２種類の交差という分類は、前出のように言語の起源における「側面的交差」と「収集的交差」の対比(Gendlin, 1997a)である)、また Ikemi(2017)においても指摘されるように、言語運用としての交差と追体験としての交差という「２種類の交差はシームレスに生起」するものである。この区分は、交差概念を Ikemi (2017)が心理療法論の有益性の観点から分類したものであることがわかる。

また、Gendlin 自身は追体験という用語を修士論文以来用いておらず、また三村(2015)が指摘しているように、Gendlin 自身の修士論文における追体験の用い方としては、理解を「自分自身の体験について考えることにすでに含まれている再構成・追体験プロセス」とする記述や、「体験の理解とは、その体験を追体験することである」記述から明らかなように、追体験という用語を自分自身の体験の理解に関する用語として展開している。以上の観点から、他者の体験を追体験するという捉え方や、追体験としての交差という発想は、Gendlin 哲学に由来するというよりも、Ikemi(2017)による臨床的意義の検討において Gendlin の交差概念を他者の体験の理解に対して援用したものだと指摘できる。つまり、池見(2016b,2017)にもあるような、クライエントの体験をセラピストが「追

体験」し、その追体験がまたクライエントの体験と「交差する」という体験間の交差という着想は、臨床実践における理論的な要請による、Ikemi(2017)の交差概念を援用した新たな展開であると言えるだろう。

このようにIkemi(2017)は、Gendlinの交差概念を心理療法論のための概念として独自に展開しており、この他者を理解する追体験としての交差というIkemiのこの着想を参照しながら、平野(2016)はセラピスト・フォーカシングにおける追体験としての交差の意義について、筒井(2016)は夢フォーカシングのグループワーク(夢PCAGIP)について検討している。

第4節 本研究の目的と構成

1. 本研究の目的

(1) Gendlinの交差概念から見た心理療法やフォーカシング指向の実践の検討

ここまで、フェルトセンスや“…”という表記に見られる、フォーカシングにおける言語の役割や、Gendlinの哲学的な議論における言語機能を支える交差概念について概観した。交差概念は、Gendlinにおいて言語が意味を成す機能や、言語形成の起源、そして体験や状況の理解など、哲学的な概念であるだけでなく、2つの対象を重ねることで新しい理解を生み出す方法としての機能や、心理療法実践のプロセスに関する用語として、実践的な意義をもつ用語でもある。

すでに確認した通り、交差概念は、フォーカシング(Gendlin, 1981)が考案されて以降、特に1980年代後半からGendlin自身によって頻繁に用いられ、展開された概念である。この交差概念から、フォーカシング指向の実践の意義を捉えることは、Gendlinの考案した実践と、その哲学の関係を捉え直す上で重要であると思われる。

特に、交差は言語の創造的な機能について論じる際に重要な意味をもつ概念であるが、フォーカシングにおいて、フェルトセンスという身体的に感じられる意味感覚について検討する際、従来は「前言語的」と形容されがちなこのフェルトセンスへの取り組みに対して、交差による言語の機能から検討することで、フォーカシング実践についての新たな知見へと迫る余地があると推察される。よって本研究では、心理療法やフォーカシング実践について、Gendlinの交差概念から検討する。

(2) メタファーと言語の創造的な機能としての交差への着目

Gendlin の交差概念について検討するにあたり、本研究ではメタファーを主題的に取り上げることとする。Gendlin は公刊された文献において初めて交差について論じる際に、すでにメタファー表現における「交差」の機能に着目している。また、Gendlin (1991/1995)では、言語と身体性に着目する論考のなかでも、このテーマについて扱ってきた例外的な研究領域としてメタファーを研究する領域であると主張し、Lakoff & Johnson(1980)の認知意味論や Wittgenstein(1953/2009)の言語哲学を参照しながら、従来のメタファー論が有する特徴を批判的に検討し、Gendlin 自身の交差による言語観を展開している。すでに見たように、このような Gendlin の言語観では「新しい状況における全ての言語使用はメタフォリカルである(all word-use is metaphorical in a new situation.)(Gendlin, 2009b, p.150)」と主張されるように、メタファーにおいて顕著な交差の機能から日常的な場面においても見受けられる言語使用一般を考察していることからも、Gendlin にとってメタファーは理論的に重要なテーマである。

また一方で、メタファーは心理療法など実践的な場面においても重要な意味をもっている。後に概観するように、メタファーは心理療法のプロセスにおいて頻繁に見られるもので、さまざまな理論的な背景から検討された心理療法に関する知見において、それぞれに重要な位置づけがなされている。フォーカシング実践においても同様であり、メタファーはフォーカシングのプロセスやその技法において重要な意義をもっている。

交差という概念が Gendlin の哲学における理論的な側面と、実践に関わる方法的な側面の双方に関わるのと同様に、メタファーもまた、フォーカシングや心理療法における理論的な側面と実践的な側面の双方を架橋するテーマである。また、異なる理論的背景から論じられる心理療法の理論と実践について、メタファーというテーマを通じて、Gendlin の交差概念から検討することは、心理療法論におけるフォーカシング指向心理療法の位置づけを考察することにも寄与すると考えられる。

(3) 方法としての交差の実践応用への意義の検討、及びその方法の考案

また、Gendlin は心理療法の効果研究と自身の哲学的な関心を背景として、セルフヘルプ技法や広く一般へ向けた心理的な支援法としてのフォーカシング(Gendlin, 1981)を考案し、さらにそのフォーカシングの知見を、理論構築や創造的に思考へと応用させた TAE (Gendlin, 2004, 2009b)を開発した。Gendlin の実践の特徴のひとつとして、自身の哲学を実践するための方法を通じて、誰しもがそれに取り組めるような技法を考案し続けてきたという点が挙げられる。

よって本研究では、Gendlin の言語観やメタファー観に見られる交差の特徴から、その機能を活かすためのさらなるフォーカシング的な実践方法の考案に取り組む。理論的な考察と、そこから考案された新たな実践に対するさらなる検討を通じて、フォーカシングにおける理論的側面と、実践的側面の双方のさらなる進展を図ることを試みる。

2.本研究の構成

本研究は、第Ⅰ部(本章)から第Ⅳ部まで、全体で 4 部構成によって進行する。

第Ⅱ部(第 2 ～5 章)では理論的な検討として、メタファーを手がかりとして Gendlin の交差概念について論じる。第 2 章では、心理療法論一般や、理論的背景の異なる心理療法に関するそれぞれの観点において、メタファーがどのように捉えられているかを概観する。次に第 3 章では、Gendlin におけるメタファー観の推移について論じる。特に、Gendlin (1962/1997)から Gendlin(1986)、Gendlin(1991/1995)と発表された時期の異なる文献におけるそれぞれのメタファー観の特徴や、Gendlin 自身のメタファー観の進展がもたらす臨床的な意義について取り上げる。第 4 章では、フォーカシング実践におけるメタファーの機能について、体験過程レベル(Hendricks, 1986)やフォーカシング簡便法における「ハンドル表現」や「アスキング」のステップを機能など、フォーカシング実践に関する諸研究を参照しながら考察する。第 5 章では、Gendlin(1991/1995)において記述される対人関係的な相互作用における交差の特徴について、「共に感じること(co-feeling)」という概念をめぐって文献的に検討する。Gendlin が参照した Gilligan らの発達心理学的な「共感(empathy)」に対する批判をもとに、心理療法における「共感」概念を交差とメタファーの機能から再考する。

第Ⅲ部(第 6～9 章)では実践的な検討として、第Ⅰ部において検討された交差を特徴づける機能を有する言葉遊びの「なぞかけ」を主題として、なぞかけと、創造的な言語使用や思考方法との関係の精査から、「なぞかけフォーカシング」という新たな方法の考案し、実際のセッションをもとに、このワークのフォーカシング的な特徴や、人間性心理学分野への貢献、教育的意義について検討していく。

第 6 章では、フォーカシングのプロセスと「なぞかけ」との共通点について明らかにし、さらにメタファーやアナロジー、アブダクションなど、交差を特徴づける創造的な思考方法となぞかけの共通点について触れ、メタファーやアナロジーにおける「対応づけ(mapping)」の概念と、Gendlin の交差概念の比較検討を行う。第 7 章では、前章で明らかとなった交差の特徴を活かしたフォーカシング・ワークである「なぞかけフォーカ

シング」のステップを考案し、実際のセッション概略を通して、このワークのフォーカシング的な特徴について考察する。第 8 章では、交差によるフォーカシングの特徴をさらに実践的・理論的に検討するため、なぞかけフォーカシングのセッション記録を例として、人間性心理学を特徴づける創造性という主題について考察する。特に Maslow や Rogers による創造性に関する論述を参照しながら、Gendlin の交差概念の創造的な特徴と、その具体的な方法である「なぞかけフォーカシング」をセッション記録の概略をもとに検討する。第 9 章では、なぞかけ(riddle)のような言葉遊び(wordplay)が元来有している創造的な特徴について、文化論的、民俗学的な知見を参照しながら考察する。メタファーとなぞかけの特徴や、寓話『不思議の国のアリス』に登場するなぞなぞをめぐる歴史的事例や、ホイジンガ(1973)による「言葉遊び」の文化論的な知見を参照し、言葉遊びやなぞかけの性質を活かしたフォーカシング的な取り組みが「わからないこと」に興味をもち、そこから創造性を育むという教育的な意義を有することについて論じる。

第Ⅳ部(第 10 章)では、前章までで明らかとなった知見を踏まえて、総合的に考察し、本研究の総括を行い、課題と今後の展望について記述する。

註

1) 原著(Purton, 2004)では、ここでの例としてクラゲ(jelly fish)が挙げられているが、「岩にへばりついたまま塩の満ち引きの中にいる」という特徴が時計の示す「時間の周期性や循環性」という共通点となると説明されていることから、著者にイメージされているのはイソギンチャクであると推測される。この指摘は邦訳(日笠摩子訳,2006)にすでに反映されており、これを採用した。

第Ⅱ部　理論編：

心理療法におけるメタファーと交差概念

第 2 章　メタファーと心理療法

第 1 節 導入

“Talking Cure(お話し療法)”という表現は、著作 *Studies on Hysteria* において Breuer の患者であった Anna, O.が自身の受けていた催眠療法を形容した表現である(Breuer & Freud, 1893/1955, p.30)。心理療法的な営みは、その草創期から「語る」という行為、「言葉を用いる」という側面をその大きな契機としている。もちろん、非言語的な側面や、(後に Anna, O.の事例において示されたように)セラピストとクライエントとの関係性が心理療法のプロセスに影響を与えうるが、言葉によるセラピストとクライエントのやりとり、あるいはクライエントの言葉の使い方という観点は、その後の心理療法研究においても重要なテーマでとあり続けている。

特に “Talking Cure”と名づけられたこの手続きに対して、Anna, O.自身がさらに “Chimney-sweeping (煙突掃除)”という「メタファー(metaphor)」を用いて表現していることは興味深い(Breuer & Freud, 1893/1955, p.30)。Anna, O.はまた、深い催眠下にある自分の意識状態に「雲(clouds)」というメタファーを用いてもいる(Breuer & Freud, 1893/1955, p.28)。

松石(2001)がまとめているように、メタファー表現は心理療法のプロセスにおいて頻繁に見られるものであり、先行研究において心理療法におけるメタファーの使用がセラピーの結果に影響を与えることが知られている。McMullen(1989)は、治療がうまく行ったと判断できる面接では、うまく行かなかった場合と比較してクライエントのメタファー表現の使用頻度が多いと指摘しており、またセラピスト側の心理療法におけるメタファーの使用に関しても、メタファーを用いた面接の方が、そうでない面接よりもクライエントの面接に関する印象の評定の結果において面接が有益だと感じやすいと報告されている(Martin et al, 1992)。

一方で、濱野(1990)が「メタファーをどのように考えるかということは、心理療法を実践するものにとって、おそらくもっとも根本的で、重要な問題の１つであり、もっとも難しい問題の１つであろう」と記述しているように、メタファーの効果的な使用が心理療法のプロセスに影響を与えるとして、セラピストがどのようにメタファーを使用するか、あるいはクライエント側にメタファーの使用を促すか、ということが重要な課題となってくる。

かつてギリシャの哲学者アリストテレスは、『詩学』においてメタファーを作り出す才能を「他者から学ぶことができないもの」(1997, p.87)と位置づけ、生来の能力により左右されるとした。一方で、心理療法をめぐる研究ではこれまで、さまざまな理論的な観点を導入しながら、心理療法においてクライエントとセラピストがともにメタファーをどのように使用し、また利用していくことができるのかについて、知見を集積してきた。本章では、心理療法におけるメタファーの使用をめぐる先行研究と、諸学派の理論背景によるメタファーの捉え方の特徴を概観し、“Talking Cure”の系譜にある心理療法という営みにおいてメタファーがいかに有効に用いられているのかについて論じる。まずはそもそも「メタファー」とはどのようなことを指すのかという言語学的な言及や、そのような言語学的なメタファーの理論による心理療法研究について概説する。

第 2 節 修辞学や言語学における定義から見たメタファーの心理療法的意義

1．メタファー、シミリー、メトニミー

広義のメタファーとは、ある対象を別の対象に喩えて説明するという修辞表現を指すが、伝統的な修辞学や比喩の表現形式の区分における狭義のメタファー(metaphor:隠喩、暗喩)とは、シミリー(simile: 直喩、明喩)と対比的に説明される (佐藤,1992)。例えば、シミリーでは「君の瞳は宝石のようだ」というように「君の瞳(趣意:tenor)」と「宝石(媒体:vehicle)」の関係性をつなぐ「～のような(like ～)という表現が見られるのに対し、メタファーはそのような表現が見られない「君の瞳は宝石だ」という形式の表現を指す(Richards, 1935/1964)。ただし、メタファーとシミリーには、「君の瞳(tenor:趣意)」と「宝石(vehicle:媒体)」、そして明示化されてはいないが、この 2 つの類似性である「輝いていて価値がある(ground:根拠)」という 3 つの関係性を含むという点で共通する。

メタファーをメトニミー(metonymy:換喩)との対比する区分もある。先の「君の瞳は宝石だ」のように、メタファーが主題と喩辞のあいだの類似性に基づく比喩であるのに対して、メトニミーは「フロイトを読む」のように、フロイトの著作を表すために作者であるフロイトの名前を代用するという、隣接性に基づく比喩である(佐藤, 1992)。なお、Jacobson によるメタファーとメトニミーという言語学的な分類を、精神分析医である Lacan が「圧縮」と「置換」という精神分析 2 つの防衛機制とメタファーとメトニミーの区別の対応づけ、表現形式の区別と病態水準と関連づけ、鑑別診断における指標としたたことが知られている(松本, 2015)。三好(2004)は、この点について、「クライエント

の発することばに換喩が多い時、彼が詩人である場合を除いて、その病態は深いと考えなくてはなるまい。隠喩が多い時は、換喩に比べて病態は軽いが、しかし一定していない」(三好, 2004, p.149)と記述している。

2. 認知意味論におけるメタファーと Tay によるメタファー使用の分類

さらに、認知言語学領域では、メタファーは単なる言葉の綾ではなく、認知作用の基盤として重要視されている。特に認知意味論(Lakoff & Johnson,1980)では、我々の認知や理解が「議論は戦争である(ARGUMENT IS WAR)」や「アイデアは植物だ(IDEAS IS PLANTS)」などのような経験的基盤に由来するある種の概念化によって支えられているという「概念メタファー(conceptual metaphor)」という観点をもつ。松石(2011)は、この認知意味論の発想をもとに心理療法に関して考察するなかで、「クライエントがどのようなメタファーに支配されているのかという視点からクライエントの言葉を聴くことが、彼らが支配されている指向や行動パターンを理解することにつながる」(p.411)と指摘している。

認知言語学では、このような意味の理解を動機づける経験の身体的な基盤に基づいており、メタファーの使用やその意味の理解における「身体性(embodiment)」を重視している(鍋島, 2017)。また認知意味論では、このような身体的な経験基盤によって得られた知識体型の枠組みであるフレームを、別の対象に転用することで理解する仕組みを「対応づけ(mapping)」(Lakoff, 1993)と呼んでいる。この対応づけは、メタファーだけでなく、アナロジーによる推論などの認知プロセスにおいても用いられる説明概念である(第6章も参照)。

メタファーの理解もまた、2つの知識領域を対応づけることで成立すると捉えられ、例えば「怒りは火である(ANGER IS FIRE)」という概念メタファーによる理解は、感情である怒りに関する知識領域(target:ターゲット)のために、物理現象である火に関する知識領域(source: ソース)を利用して対応づけることで、例えば「彼が私に火をつけた」や「これ以上彼を焚きつけるな」などのメタファーの使用や意味の展開が可能となる。またこの「怒りは火である」という概念メタファーは、怒りによる生理的な体温の上昇という身体性に支えられていると捉えられている(Lakoff, 1987)。メタファーの理解の説明では、目標となるターゲットに、ソースとなる別の領域の知見を関連づける「対応づけ」の概念を用いて捉えることができる。

Tay (2013)は、認知言語学の観点から心理療法のセッション記録を対象としたディス

コース(discourse:談話)分析を行うなかで、対応づけにおけるターゲットとソースの区別から、心理療法におけるメタファーの用いられ方をカテゴリーに分類し、それぞれの特徴について論述している。Tay(2013)は心理療法におけるメタファー使用に関して、ターゲットとソースの対応関係の「一貫性(consistency)」と「可変性(variability)」によってその特徴を区別し、さらに「可変性」を３つのサブカテゴリーに分類した(Tay, 2013, p.105-121)。

Tay (2013)のメタファーのカテゴリーによる分類とその談話の特徴、さらにその心理療法的な機能について(p.108)、具体的な例を想定しながら紹介する。まず、談話中のメタファーの使用にターゲットとソースの「一貫性」が見受けられる場合である。例えば心理療法の喩えられる主題でありクライエントの取り組む主訴であるターゲット(例えば「就職活動がうまく行かない」)を、喩える別の知見であるソース(例えば「サッカー」)を用いて、一貫して談話が展開される場合である(昨日の「面接」では「攻め込みすぎて、守備がおろそかだった」など)。この場合、談話中のメタファーの使用によって、ターゲット(就職活動)をめぐる推論が、クライエントとセラピストとのあいだで共同的な推論の精緻化が生じやすく、ソース(「サッカー」)によって意味の喚起や理解の共有を促進する働きがある。

次に、談話中においてターゲットとソースとのあいだに「可変性」が見受けられる３つの分類である。最初のサブカテゴリーでは、同じソースが異なるターゲットへと適用される場合である。この場合は、これまで用いられていたソースによって明らかになった知見が、別の新しいターゲットへと適用される(「サッカー」はそのままに、ターゲットである話のテーマが、「就職活動」から「対人関係」へとシフトし、「いつも頻繁に関わりすぎて、いい関係が続かない」と異なる話題との関連が見出される)。このような変化は異なるターゲット間の関連を作り出し、かつ主題の関連の移行を最低限に抑えることができる(主題が変わっても、話話に連続性が担保される)。

一方で、同じターゲットに異なるソースが適用される場合もある(例えば、「就職活動」を「サッカー」に喩えていたところに、新たに「料理」に喩えて語られる場合)。この場合は、主題であるターゲットに対して、代替的あるいは補完的な概念化によって、さらにターゲットの理解が豊かになる働きがあり、かつこれまでに示されていた要点を修正し整理するという機能を有する(例えば「サッカーも準備が大事だけど、料理も結局、下

ごしらえが大事。就職面接って、やっぱりどれだけ準備をするかで変わってくるかなぁ」というような談話など)。

最後のサブカテゴリーは、ソースとターゲットがともに入れ替わっていくような展開である。談話のなかで、異なるソースとターゲットが続けて導入されていく場合である(例えば「面接を申し込んだんだけど、自分にとってはただの予選というか、なんか生煮えっていう感じでいつもダメで。いつもこうだからモテなくって大学に入ってからも…」などというような、まとまりのない喩え)。特にクライエントにおいてこのような語りがなされる場合は、Tay (2013)はそのクライエントにおいて表現することを困難にするなんらかの要因が存在することが語りに判例されており、セラピストにおいて、このような語りに戦略的に介入し整理する必要があると主張している。Tay (2013)は、以上のようなメタファー使用のカテゴリーに反映される規範的な特徴を、心理療法のプロセスにおいて生じている相互作用を反映し、セラピストの理解を助ける理解の枠組みとして提示している。

第 3 節 心理療法におけるメタファーの機能

心理療法におけるメタファーの機能は、先行研究においてさまざまな理論的観点から取り上げられている。濱野(1990)は心理療法における現実性の問題について、Freud の心的現実やその事後性という特徴を参照しながら、Romanyshyn (1982)の「隠喩的現実」の観点から捉え、多元的な現実に関する「わかる」というプロセスをめぐって、メタファーの役割について言及している。

また松石(2011)は、認知言語学における「概念メタファー」や北山(1993)による精神分析的な観点からのメタファー論、Barker(1985)の家族療法の理論を背景とする心理療法におけるメタファーの使用に関する議論を参照しながら、箱庭を介した心理療法面接の事例をもとに、アートによるメタファーと、言語によるメタファーの双方の観点から論じている。松石(2011)は事例を通して、アートによるメタファーによって「言語化の促進」が生じ、また言葉によるメタファーの使用により、「心理的負担の軽減」やクライエント自身の「心理的問題についての捉え方の変化」が生じると指摘している。

メタファーは心理療法のプロセスのさまざまな場面で用いられている。Barker(1985)は心理療法に見られるメタファーの作用について、先の松井(2011)の指摘する箱庭のようなアートなど非言語的な物を含む、次の 7 つに分類している(Barker, 1985, p.44-45)。

(1) 複雑な臨床状況を包括的に扱うことを目的に作られた本格的な物語

(2) 特定の限定された目標を達成することを狙いとする逸話や短い物語、談話など

(3)特定の事項を説明したり、強調したりするためのアナロジー、シミリー、短いメタファーとしての言葉

(4)関係性のメタファー(ある人間関係を、医者−患者関係など別の関係に見立てて理解する)

(5)メタファーとしての意味をもつ課題(食事前に着替える、夫婦で旅行へ行くなどの儀式や課題を導入すること)

(6)メタファーとしてのオブジェ(遊戯療法で用いられるぬいぐるみや、箱庭のなかのアイテムなど)

(7)アートによるメタファー(絵画や粘土、レゴなどの構築物)

Barker (1985)の観点では、クライエントが語る物語やセラピストが導入する逸話だけでなく、何らかの行為やオブジェ、アートなどもメタファー的な機能を果たす対象として捉えられている。一方で、渡辺(1992)は言語使用を重視した観点から、心理療法における広義のメタファーを含む比喩表現の使用の機能について、以下に挙げる 10 項目について概略している。渡辺(1992)による記述や例示をなぞりながら、いかに各項目について概略する。

(1) 明確化:メタファーは、感情などのような具体性に乏しく本質的に曖昧な概念に構造を与える機能を有しており、これを明確化機能と呼ぶ。例えば、言いたいことが言えない状況を「言葉の便秘」と表現する場合がこれにあたる。

(2) ネーミング(キーワード):明確化の際立った機能として、既存の名称を使用してまだ名付けられていないものを名づけ、キーワードを発見することでその状況を象徴的に捉える働きである。例えば、自分ではどうしようもできない脅迫的な観念や感情を「思い通りにならない君」と名づけて、「言葉の便秘」というメタファーに対して、言葉の「下剤」という新しいキーワードを用いて理解を展開する場合などである。

(3) リフレーミング:意味や理解を理解するために、その人間が有している理解の枠組みを変える取り組み。例えば、自我の病的な側面を「ゴキブリ!」と捉えることで、それを「駆除」して「締め出す」ことが可能な対象として捉え直すような機能である。

(4) 婉曲表現：メタファーのもつ間接的でありながら、さまざまな連想を引き出す働きによって、クライエントにその理解を受け取るか拒絶するかという二者択一を迫らずに済むという機能。また比喩表現を利用した解釈は、クライエントの抵抗をすり抜けて作用することになり、セラピストへの抵抗を弱める機能を有する。

(5) 曖昧(両義的・多義的)表現：メタファーの両義的かつ多義的な表現は「割り切る」ことの対極にあり、どのようなことも知的に割り切らないと気が済まないクライエントやその強迫的な傾向に対して、曖昧さへの耐性を獲得させる役割を果たす。

(6) 逆説：逆説を孕んだメタファーの仕様は、矛盾を解消することなく、かつ葛藤を軽減するかたちで矛盾状態を引き起こすことになる。例えば、「逃げるが勝ち」という比喩的な表現は、葛藤をうむ状況を避けることが逃げることにはならないという行為的なメッセージを伝える役割を果たす。

(7) ジョーク：Freud の冗談(joke)についての研究が明らかにしているように、無意識と意識を通じさせるという特徴において、メタファーと冗談は共通の構造を有していると言える。メタファー表現と冗談はともに、それに気が利いていればいるほど、複雑な事態を単純で明瞭なかたちで示すことにつながる。また自分の悩みを比喩的なジョークで笑い飛ばすことができれば、悩みはなくなったも同然であると言えるという。

(8) 遊び：心理療法という営みは、成田(1987)の指摘のように、クライエントとセラピストが「共同で１つの文を完成させるような感じ」が大切となり、そこでともにメタファー表現を用いれば、なぞなぞ遊びやしりとり遊びといった言葉遊びさながらに、治療的面接の場が遊びの場に転じる。メタファーを据えることで、遊べない人を取り扱う心理療法面接の場に遊びの雰囲気が生まれる。また、クライエント側の用いるメタファーをともに展開させることがより重要となるのは、面接場面がクライエントやセラピストの「独り遊び」になる危険を回避するためである。

(9) 創造的表現：治療の場においてなされる様々な情緒や意味の不断の産出過程は、Winnicott(1958)のいう「乳児と乳房の出会い」や「乳児による乳房の創造」に匹敵するものであり、クライエントによる新たなメタファーの創造もこれと同様である。面接において使用されるメタファーはすべて、このようなクライエントの創造したものと捉えることができる。

(10) 転移、退行：メタファーの使用はそれ自体が退行促進的であり、子どもに寓話が好まれることがその証左となる。小学校の中頃より子どもの絵画が写実的になることが

知られているが、この時期にはまた比喩表現の減少が見られ、また曖昧さが排除された論理的な言葉への傾性が強まる。また、セラピスト側の転移解釈が比喩的な表現の形式を取りやすいのは、転移そのものが比喩的な性質をもっているからだと言えるという。

以上、渡辺(1992)の指摘するメタファーの機能について概観したが、これらは相互に重なり合ってはいるものの、面接における多様な場面でメタファーが有効に用いられていることが見受けられる。

第 4 節　結語

本章では、メタファーと心理療法の関係について概観した。クライエントとセラピストの相互作用において、言語的な側面、特にメタファーの使用は、心理療法のプロセスに影響を与える景気となっていることがわかる。一方で、渡辺(1992)によるメタファーの機能の分類において、明確化や転移、抵抗や退行などの精神分析的な観点や、リフレーミングなど家族療法やブリーフセラピーなどの発想が反映されていることからわかるように、心理療法におけるメタファーの機能の捉え方への言及自体に、すでに心理療法の概念をその理解の背景として記述されている場合がある。つまり、それぞれの心理療法論におけるメタファーの機能の捉え方には、その背景に心理療法を特徴づける理論的な枠組みが反映されているのである。

では、本研究の関心であるフォーカシングのプロセスにおいて、メタファーの使用はどのような理論的な背景の反映から捉えられるのだろうか。この論点を明らかにするためには、フォーカシングの考案者である Gendlin の理論展開におけるメタファーの捉え方を参照する必要がある。

第 3 章　Gendlin におけるメタファー観の進展 1)

第 1 節 導入

前章(第 2 章)でも確認したように、Breuer and Freud(1893/1955)の催眠による療法など、心理療法の草創期以来、心理療法におけるメタファーの機能は現在も重要なトピックである。また、精神分析に限らず、家族療法(Barker, 1985)や認知行動療法(Stoot, Manesell, Salkovskis et al., 2010)などの心理療法の諸学派の立場をはじめ、統合的なアプローチ(吉本・中野, 2011)まで、心理療法におけるメタファーの研究や実践展開は数多く報告されている。

同様に、パーソンセンタード・アプローチや体験的心理療法を含む、人間性心理学の分野においても、メタファーに関して度々言及されている(例えば Rennie, 1998; Worsley, 2012)。フォーカシングの考案者である Gendlin もまた、メタファーについてたびたび取り上げている。Gendlin のメタファー論は、自身の専門である哲学分野での論文から、心理療法やフォーカシングの実戦に関する著作に至る広範囲に渡っているという点でも、人間性心理学領域において際立っている。まだ書かれた年代に関しても、1960 年代当初から、フォーカシングが技法として考案された後の 1980 年代以降、近年に至るまで、たびたび取り上げられてきた。

Ikemi (2005)が指摘しているように、Freud や Rogers など、ある理論家について論じる際の難しさとして、その理論家の思考が年代を経ていくごとに「発展し続けていく」という点を考慮しなければならない。これは Gendlin のメタファー論にも当てはまるだろう。特に著作 *Focusing*(Gendlin, 1981)に代表される、Gendlin 自身の実践活動の展開時期を契機として、Gendlin のメタファーに関する捉え方に何らかの変化が見受けられるかを検討することは、フォーカシングやその心理療法的展開におけるメタファーの機能を考察する上で重要である。

よって本章では、*Experiencing and the Creation of the Meaning (ECM)*(Gendlin, 1962/1997)、*Let Your Body Interpret Your Dreams (LBD)*(Gendlin, 1986) 、“Crossing and Dipping (CD)(Gendlin, 1991/1995)”という 3 つの論述を取り上げ、その中のメタファーに関する記述を示し、そこに見られる Gendlin のメタファー観の推移について概観することで、Gendlin のメタファー観に反映されているメタファーの機能の特徴について論じる。以下に、3 つの論述の概略やその成立経緯や周辺情報を挙げ、そのメタファ

一観を概略する。

第 2 節　Gendlin におけるメタファー観の推移

1. ECM のメタファー観

(1) 概略・成立経緯

ECM は 1962 年に初版が刊行されたが、これは 1958 年に Gendlin がシカゴ大学の哲学部に提出した博士論文を改定・改題した上で出版したものである。田中(2005)によれば、Gendlin は田中自身が「第一次シカゴ時代」と区分するこの 1950 年から 1958 年までの期間に Rogers と出会い、シカゴ大学のカウンセリングセンターで臨床実践に従事していた。ECM はフォーカシングの実践が考案される以前に成立した著作であり、一部には心理療法に関する記述が見受けられるが、主題としては、理論的な論述がその大部分を占めている。

(2)ECM におけるメタファー

ECM においてメタファーという語は、感じられた意味(felt meaning)とシンボル(symbol)のあいだの 7 つの機能的関係のうちの１つとして挙げられている。これらは、感じられた意味とシンボルとのあいだに一対一対応のある平行的な機能的関係としての「直接照合(direct reference)」、「再認(recognition)」、「展開(explication)」の３つと、非平行的で創造的な機能的関係である「メタファー(metaphor)」、「把握(comprehension)」、「関連(relevance)」、そして「言い回し(circumlocution)」の４つという、２つの区分に大別される。

ただし、非平行的な機能的関係としての「メタファー」は、平行的な機能的関係の「直接照合」や「再認」を含む「高次の秩序」をもたらすものであり(Gendlin, 1962/1997, p.115)、7 つある機能的関係はすべて同格のものとして位置づけられるものではない。また Gendlin 自身(1962/1997)や三村(2011)も指摘するように、非平行的な機能的関係のなかでも中心的なものは「メタファー」と「把握」であり、残り２つのうち「関連」は「把握」の機能を、「言い回し」は「メタファー」の機能を補完するようなはたらきを有する(Gendlin, 1962/1997, p.137)。このようにこれらの機能的関係は、相補的な仕方で区分されているものである。

ECM における「メタファー」の機能は、以下のように説明されている。

A metaphor, then, contains two relationships between an “old” and a “new”: (1) some old (past) experience is affected so that a new felt meaning emerges from it, and (2) old symbols and their meanings are employed in a new way to conceptualize the new meaning (Gendlin 1962/1997, p.113).

引用のように、「メタファー」という機能的関係は、「古いもの」と「新しいもの」のあいだの２つの関係を含んでいるとされる。「メタファー」という機能的関係によって、古い体験が影響を受け、その結果として新しい感じられた意味が生じる。古いシンボルとそれらの意味は、新しい意味を概念化するような仕方で利用される。ECM における「メタファー」は、新しい感じられた意味を創造する機能的関係として位置づけられている。

対照的に、まだシンボル化されていない感じられた意味をさらにシンボル化する機能的関係が「把握」である。三村 (2011)によれば、「メタファー」における新しい感じられた意味の創造は、「比喩表現を読んだり聞いたりしたときに限られる。しかしメタファーを用いる詩人などは、独特の仕方で感じられている felt meaning を表現するために、独自のメタファーを作り上げる。この関係を Gendlin は把握と呼ぶ」(三村,2011)と指摘している。

つまり、ECM における機能的関係としての「メタファー」は、あるメタファーを見聞きした際、例えば Gendlin の挙げる「私の恋人は赤いバラだ(My love’s like a red, red rose.)」(Gendlin, 1962/1997)というメタファーを読んだときに、メタファーの主題である「私の恋人」に含まれる古い意味と、喩辞である「赤いバラ」に含まれる古い意味が互いに影響を受け、新たなシンボル化のために用いられることによって、感じられる意味が創造されるという事態を指している [2)]。

それに対して、詩人(でなくても誰も)が感じている、ある独特のニュアンスを何かに喩えようとして、例えば「私の恋人は赤いバラだ」というメタファーで表現した場合には、「メタファー」ではなく「把握」という機能的関係が適用される。つまり、メタファー表現を創造することは、ECM では「メタファー」とは捉えられないのである。

「把握(comprehension)」という語は「理解」とも訳出できるが、例えば「私の恋人は赤いバラだ」というメタファー表現を読んだ際の機能的関係は「メタファー」であり、この「私の恋人は赤いバラだ」というメタファー表現の意味を理解しようとして、その意味を例えば「美しいが棘がある」などというように言葉で捉えようとする際の機能的

関係は「把握」となる。「メタファー」という機能的関係は、「把握」と対として相補的に機能する、感じられた意味を創造し、その感じられた意味をさらにシンボル化するプロセスとして捉えられている。

2. LBD のメタファー観

(1)概略・成立経緯

LBD はフォーカシング考案後の 1986 年に出版されたもので、邦訳のタイトルは『夢とフォーカシング』であるが、原題を直訳すると「あなたの身体にあなたの夢を解釈させよう」となる。LDB には巻末に 2 つの付録(appendix)、A「生きている身体と夢についての理論」と B「それぞれの質問の用い方」が収録されている。本節では付録 A について取り上げるが、この付録 A に関して末武(2009)は、「『体験過程と意味の創造』と『プロセスモデル』(その草稿はすでに 1981 年には書き上げられていたが)をつなぐ重要な概念や理論的モチーフによって展開されている注目すべき論考」としているが、ECM や次に取り上げる CD は異なり、LBD は Gendlin(1997a)の *A Process Model* において Gendlin 自身による略称が提示されていない。そのため本章で用いる LBD という略称は、筆者によるものである。

LBD の付録 A は 35 の節から成り立っており、前半(1～14)には「生きている身体(living body)」、後半(15～35)には「夢(dreams)」というサブタイトルがつけられ区分されている。前半部分と後半部分は議論としては連続しており、一貫して身体の機能の観点から言語や夢という主題について論じられている。本章にて取り上げるメタファーに関する議論は、後半部分の夢に関する節で登場する。また、筆者が調べた限り、この LBD の付録 A は、後で挙げる Gendlin のメタファー論を特徴づける「交差(crossing)」という用語について言及された最初期の刊行物である。

(2)LBD のメタファー観

LBD では、夢の暗号的なはたらきを捉えるために、言葉のはたらきを捉え直すことから始める。夢は我々に対してメタファー的に語りかけるが、日常的な言葉も本来的にはメタファーとして機能する。Gendlin はメタファー(metaphor)の語源が「進展(carrying further)」という自身の用語に通じるということに触れ、「メタファー的な進展とは、言葉のはたらき方のことである。古い言葉は、いかなる時も新たに用いられるようになる(Gendlin, 1986, p.150)」と指摘する[3)]。

また LBD では、メタファーの機能の観点から言葉と「状況(situation)」とのあいだの

関係性に言及される。「メタファーとは“単に”言語的なものではない。言葉は状況を変化させる。新しいメタファーは、状況を新しい仕方で変化させる(Gendlin, 1986, p.150)」のである。メタファーによる状況を進展させる機能に着目することで、Gendlin はここで、夢のメッセージが有する状況を進展させる力について迫ろうと試みているのである。

メタファーが状況を進展させる仕方について、Gendlin は以下のように記述する。

> A metaphor brings the word's old situations into a new situation. The two contexts "cross" and form something new. Any two things can be further "crossed" (Gendlin, 1986, p.150).

引用のように、LBD でメタファーは、ある言葉の古い状況を新しい状況へともたらすように機能する、と説明される。古い状況と、新しい状況の２つが“交差”することで、そこに新しい何かが形成される。これが、LBD において想定されている、メタファーによる状況を進展させる機能の仕方である。

また Gendlin は引用にあるように、いかなるものでも“交差”させることができると主張しており、その例として「あなたの怒りはどのようにイスと似ているだろう？(how is your anger like the chair?)」という問いかけを挙げている。実際に怒りを感じながら、その怒りとイスとのあいだの関連に思いを巡らせると、両者のあいだに何らかの類似性を発見できるかも知れない(例えば「重く居座っている」「誰かに投げつけたくなる」「私をしっかりと支えてくれる」など)。この怒りとイスの類似性は、まるでそう関連づけられる以前からどこかに「存在していた」と思われがちであるが、「実際にはたった今、それらを交差させることによって生み出された(Gendlin, 1986, p.150)」ものである。

LBD では、「交差(crossing)」の概念をこのようなメタファーをめぐる「精巧に関連している有機体的なプロセス(Gendlin, 1986, p.150)」を捉えるために用いている。日常の体験においてイスはあくまでイスであり、怒りも怒り以上のものではない。しかし、古い状況を新しい状況へと関連づける交差のはたらきによって、イスの特徴は怒りに対して精巧に提要され、イスと怒りのあいだには新たに精巧な関連が創造されるのである。そして、夢に現れるさまざまなシンボルもまた、このような仕方による交差のはたらきによって、意味の創造につながると Gendlin は考えているのである。

3. CD のメタファー観

(1)概略・成立過程

CD は、まず 1991 年に *Subjectivity and the Debate over Computational Cognitive Science* にて掲載された後、1995 年に *Minds and Machines* 誌に再収録されたという経緯をもつ。そのため、Gendlin(1991)の論文“Thinking Beyond Patterns”など 1990 年代初頭の Gendlin の他の論文においても度々「印刷中(in press)」などとして Gendlin 自身がたびび引用している。

CD では、Wittgenstein の後期哲学や、Lakoff や Johnson らの認知意味論におけるメタファー論を参照しながら、Gendlin 自身のメタファー論が展開されている。2015 年 1 月の時点で、The Focusing Institute サイト内の“Gendlin Online Library”における哲学トピックのページ“All word use is metaphor: Theory of Metaphor”に挙げられているのは、この CD のみである。また例えば先の“A Process Model”(Gendlin, 1997a)を含め、CD 以降に書かれた論文でも、メタファーについて言及される際にはレファレンスとして CD が頻繁に挙げられていることからも、Gendlin のメタファー論における CD の位置づけの重要さがうかがえる。

(2) CD のメタファー観

CD ではメタファーを、言葉のさまざまな使い方のまとまりを指す「言葉の使用群(word’s use-family)」と、その言葉が実際に使われる際の現在の「状況(situation)」とのあいだに生じる、「交差(crossing)」という関係の観点から捉えられている。ここで Gendlin の挙げる「言葉の使用群」は、Wittgenstein による「家族的類似性(family resemblance)」をモチーフにされたものであり、さまざまな状況における言葉の使用によってもたられる意味の類似性のことである(Gendlin 1991/1995)。また、ある状況が有する独特の複雑さは、その状況と相互作用するその身体の感覚として直接的に感じられる。この状況についての意味感覚が、フォーカシングの基本用語ともなっている「フェルトセンス」と呼ばれるものである(Gendlin,1991/1995)。

CD における交差とは、あらゆる言葉の使用において生じうる、状況と言葉のあいだの創造的な関係性を指す概念である。交差によって、現在の状況とある言葉がもつその使用群が相互作用することで、言葉やその状況に伴うフェルトセンスを手がかりとして、言葉の意味が理解される。Gendlin(1991/1995)によれば、このような言語の創造的な側面に着目した研究領域は、従来はメタファーという特殊な例に関する研究のみであった。そのため、CD では言語の創造的な機能の実例として、メタファーについて取り上げて

いる。

この交差の概念から、Gendlin は従来のメタファー論に関する 4 つの修正点を挙げている(Gendlin, 1991/1995)。そのなかでも本章では、以下に引用する第 1 の修正点に注目する。

> Classically, metaphor was said to be a crossing between two single situations. My first modification of the theory is to argue that there is only one single situation, the new one. The so-called old situation is not actually a single situation, but rather the whole use-family. The word brings all of its many, many old uses into this new situation. What crosses are not two situations, but a use-family and a situation (Gendlin 1991/1995).

引用のように、Gendlin は従来の古典的なメタファー理論が、メタファーを 2 つの状況のあいだの交差として捉えているのに対して、実際には、状況は 1 つしかないという点を強調して指摘している。これまで「古い状況」と呼ばれてきたものは、実際には状況ではなく、「言葉の使用群全体」を指すという。つまり Gendlin は、ある言葉がこれまでに有してきた非常に多くの言葉の使用の群を、現在の新しい状況へともたらすことで、メタファーは意味を成すと捉えているのである。

CD において例示されている「あの娘はバラだ(She is a rose.) (Gendlin, 1991/1995)」というメタファーを例に説明しよう。「あの娘はバラだ」というメタファーの意味を、従来のメタファー論においては、“あの娘”という言葉が指し示す当該の状況と、“バラ”という言葉が指し示す状況という 2 つの状況のあいだの交差として捉えられていた。この場合、メタファーの主題となっている“あの娘”が新しい状況であり、喩辞である“バラ”が古い状況ということになる。

一方、Gendlin が提示する CD におけるメタファー観では、メタファーとはある状況と言葉(の使用群)とのあいだの交差であり、従来のメタファー論における喩辞に対応する古い状況が、「言葉の使用群」として捉え直されている。「あの娘はバラだ」という例でいえば、主題である“あの娘”となっている当該の状況において、“バラ”という多くの使用群を含む言葉が、実際に喩辞として使用されることで、現在の状況と言葉の使用群が交差し、「あの娘はバラだ」というメタファーは独自の意味を成す。

ECMにおける「私の恋人は赤いバラのようだ」の例を用いて、このCDのメタファー観から説明することができる。“私の恋人”が主題となっているある状況について、“赤いバラ”という言葉が実際に用いられ、その言葉の使用群がその状況にもたらされることによって、「美しいが棘がある」という“私の恋人”についての新たな理解、意味の創造が成されるのである。

では試しに、主題と喩辞にあたる部分を入れ替えてみて、「赤いバラは私の恋人のようだ(A rose's like my love.)」としてみるとどうなるだろうか。この場合、“赤いバラ”が主題となっているある状況において、“私の恋人”という言葉の使用群がもたらされることになる。これによって、“赤いバラ”に対して、例えば「ひとときも離れたくないほど愛おしい」というような新たな理解が可能となる。

この「私の恋人は赤いバラのようだ」と「赤いバラは私の恋人のようだ」という2つのメタファーの意味が異なってくるのは、それぞれ主題となる状況が異なるからである(ある詩人が恋人への想いを喩える場面か、あるいはある園芸愛好家がバラへの想いを喩える場面か、を想定してみよう)。CD のメタファー観にもとづいて、このように主題と喩辞が入れ替えられない理由を、メタファーが主題と喩辞という2つの状況の交差ではなく、状況は主題が指し示す1つのみだと捉えることでより顕著に説明することができる。

CDにおける「あの娘はバラのようだ(She is a rose.)」のように、メタファーは主題が“あの娘(she)”という代名詞などのようなある状況を指し示すものであれば成立する。たとえ、ここで“あの娘”として指し示しているある女性のことを知らなくても、“バラ”というその喩辞がもたらす言葉の使用群によって、その女性が“バラのような”女性であることを示すことができる。ただし、その女性がどのように“バラのよう”であるのかを、そのメタファー表現の聞き手が理解するのは、“あの娘”がどのような女性であるのか、というその状況が聞き手と話し手のあいだで共有している必要がある。

一方で、再び主題と喩辞を入れ替えて「バラはあの娘だ(A rose is she.)」というメタファーを作ったとしても、喩辞となっている“あの娘(she)”という言葉の使用群が、主題に対して何かをもたらさない限り、このメタファーは何らかの意味を成さない。用いられる意図がわからない言葉を喩辞にしてメタファーを作ることは不可能である。なぜなら、それでは喩辞となる言葉の使い方(使用群)から主題である状況に対して、何らもたらされるものがないからである。

ある言葉を、その言葉の有するそれまでの使用群に含まれる以外の状況で用いることで(「あの娘」や「私の恋人」などに対して、字義通りの意味とは異なる「バラ」という植物を喩辞に用いて喩えることで)、言葉の新たな使い方、つまり新しい意味が創造される(Gendlin, 1991/1995)。どんな言葉も、メタファーの場合と同様に、別の状況で使用される可能性を含んでいる。よって、あらゆる言語は、メタファー的に機能する可能性を有しているのである。

第 3 節 考察

1. Gendlin におけるメタファー観の進展

以下に、ECM、LBD、そして CD という 3 つの論述をめぐるメタファー観の推移について考察していく。

(1) ECM から LBD へ

ECM では、メタファーは機能的関係の 1 つとして区分され、あるメタファーを見聞きした際に言葉の古い意味から新しい意味が創造される仕方として言及されていた。一方、LBD ではメタファーは古い状況と新しい状況という 2 つの状況のあいだの交差であり、古い状況が新しい状況へともたらされ、新しい何かを形成するように機能すると捉えられていた。ECM と LBD のメタファー観を比較すると、その共通点としてどちらも、メタファーの有する創造性に言及している。また、どちらも古いものと新しいものとの関係性に注目しており、ECM では古い意味と新しい意味の影響関係から、LBD では古い状況と新しい状況の交差からメタファーの機能を説明している。

LBD のメタファー観ではこのように、メタファーの機能を説明するために、「状況」という用語が導入されている。末武(2009)は、LBD に関して「『体験過程と意味の創造』においては、まだそれほど詳細に論じられていなかった身体の機能－特に夢をはじめとしたその隠喩的なはたらき－について、1970 年以降、Gendlin の考察がより深められていく(末武, 2009, p.108)」と指摘しているが、本章では特にこの「状況」という用語の使用に着目したい。

ECM から LBD への推移としてもう 1 つ挙げられるのは、ECM のメタファー観では、メタファーを見聞きする過程と、メタファーを作り出す過程が区別されているという点である。ECM において、詩人が「私の恋人は赤いバラのようだ」というメタファーを作り出す過程には、「メタファー」ではなく「把握」という機能的関係が対応している。一

方で、LBD では例えば「私の怒りがどのようにこのイスと似ているか」というような、怒りに対する新たな喩えによって、怒りの特徴を理解しようと試みる一連の過程を「交差」という用語で捉えようと試みられている。このような点で、LBD のメタファー観では、ECM とは異なった観点で、メタファーを捉えていることがわかる。

(2) LBD から CD へ

LBD でのメタファーの捉え方では、先の末武(2009)の指摘のように、Gendlin(1997a)など後の Gendlin の哲学とも共通する、身体の機能から言語を捉えるという特徴がすでに見受けられ、また「交差」概念の導入や言語の使用への注目など、CD とも共通の枠組みがある。しかし、LBD と CD という両者のメタファーの捉え方を比較した場合にも、そこには推移が見受けられる。それは先述した「状況」という用語の用いられ方である。

LBD のメタファー観では、古い状況と新しい状況という「２つの状況の交差」という仕方でメタファーの創造的な機能を説明していた。しかし、CD において、従来のメタファー理論に対する第一の修正点として挙げられていたのが、まさにこの「２つの状況の交差」という観点なのである。CD のメタファー観では、メタファーは２つの状況の交差としてではなく、現在の「状況」と、(LBD では古い状況と捉えられていた)「言葉の使用群」との交差として捉え直されることになる。

実際のところは CD では、文中で LBD がその修正対象として挙げられているわけではないが、CD において修正を要すると指摘される従来のメタファー論には、「２つの状況の交差という仕方でメタファーの創造性を説明している、Gendlin 自身の LBD におけるメタファー観も含まれることになる。

(3)Gendlin におけるメタファー観の進展

以上のような、ECM から LBD をへて CD へと至る Gendlin のメタファー観の推移から、Gendlin 自身のメタファーの機能についての理解が、時代を経て「進展」していることが見て取れる。ECM から LBD への推移において、メタファーは「状況」と関連づけられて論じられるようになった。さらに LBD から CD への推移においては、古い状況と捉えられていたものを「言葉の使用群」と捉え直すことで、言葉が用いられるある状況における具体的な言語使用としての交差という観点から、メタファーの機能を論じている。この「状況」という用語のより厳密な使用によって、Gendlin は自身のメタファー観を進展させ、メタファーの創造的な機能に関する新たな捉え方を展開させてきたのである。

後に Gendlin はある論文において「辞書は私の状況を知らない(The dictionary doesn't know my situation.)(Gendlin, 2012, p.151)」と記述している。辞書とは、ある言葉についてのこれまでの用いられ方が網羅され記載されている言葉の使用群の集積である。しかし、どれだけ詳細にそのような言葉の使用群を記載しても、それだけでは言葉は意味を成さない。そうではなく、言葉は具体的な状況において実際に使用され、状況と交差することによってはじめて意味を成すのである。

CD のメタファー観では、「状況」という用語のより厳密かつ実際的な仕様によって、それ以降の Gendlin の言語についての捉え方として引き継がれ続ける「状況と言葉の使用群の交差」という観点を提供するに至った。CD のメタファー観とは言わば、Gendlin のメタファー論のレイテスト・バージョンだと表現することができよう。

2. 臨床的なメタファー観への進展

末武(2009)は、「ジェンドリンにとっては、心理療法の実践、殊にフォーカシングの提案と展開の中で、人間の体験過程や身体のもつ複雑で精緻な機能がよりいっそう重要なものとして認識させていったことは間違いないだろう(末武, 2009, p.107)」と記述している。Gendlin はフォーカシングを考案する以前もすでに臨床実践に取り組んではいたが、確かにその後 1980 年代に、特に夢という Freud 以来の伝統的な臨床素材に対してフォーカシングを応用するという取り組みが、Gendlin のメタファー観に関して何らかの影響を与えたのではないか、と推察することもできる。

一方で、Gendlin のメタファー論のレイテスト・バージョンと言える CD のメタファー観は、Freud より続く従来の心理臨床において伝統的なメタファー観がもたらす臨床観とは異なる視点を、我々に与えてくれる。Freud に端を開く心理臨床において伝統的なメタファー観では、クライエントの表現や夢の象徴は、クライエントの心的現実や無意識の欲望が、防衛機制や検閲によって歪曲されて表象されている象徴と捉えられ(Freud, 1900)、そこでその不完全な象徴としてのメタファーを手がかりとして、無意識に潜在する本来の意味を解釈しようと試みる必要が生じる。

それに対して、Gendlin の CD におけるメタファー観では、メタファーは「状況と言葉の使用群の交差」から捉えられ、ある状況においてある言葉が用いられることで、その言葉は、その状況において特有の意味を成す。つまり CD のメタファー観では、クライエントの表現を、伝統的な精神分析的な発想におけるメタファー観のように、心的現実に対応する何らかの表象としては捉えず、クライエントにとっての実際に感じられて

いるその状況についてのメタファーとして捉えるのである。

夢の象徴に関しても、ある特徴の意味はその象徴のこれまでの使用群(例えば「蜘蛛は不安を象徴する」というような民族的・神話的なモチーフとの対応)からのみ決定されるわけではない。CD のメタファー観から導き出されるように、夢の象徴のその使用群が、実際の状況と交差することによって、その象徴は独自の意味を成すと説明できる。

なお、精神分析における夢とメタファーの関連は、Freud 自身によって言及されたというよりは、後に Lacan によって夢の作業に典型的な圧縮と置換という２つの防衛機制を、言語学的な区分である隠喩(metaphor)と換喩(metonymy)の区分に対応づけて論じたことに由来する(Fink,1995)。なお、Freud 自身によるメタファーへの言及としては、*The Interpretation of Dream* の後に発表された著作 *Jokes and the Relation to the Unconscious* (Freud, 1905)において見受けられる。このなかで Freud は、冗談や言葉遊びにおいて見られる治療的な言語機能を考察するにあたって、メタファーの機能について取り上げている。

精神分析におけるメタファーの捉え方では、隠喩や換喩など、象徴の表現形式の相違を防衛機制と対応づけ、その対応を象徴解釈に援用することを試みる。その一方で、CD における Gendlin のメタファー観ではクライエントの状況と、その言葉との交差という観点から、状況の中で実際に用いられている、その言葉の意味を、クライエント自身がより精密に理解できるように促そうとする。また精神分析のメタファー観では、隠喩と換喩という表現形式に反映される防衛機制を、クライエントの生育史や情緒的な発達過程に関連づけながら理解するのに対し、Gendlin のメタファー観では、メタファーによって創造される、クライエントにとってのその状況についての理解の「新しさ(novelty)」に注目する。Gendlin は、ECM から CD まで一貫してメタファーのもつ創造的な機能へと着目している。Gendlin のメタファー観はこのように、伝統的な精神分析のメタファー観と対比的な発想をもち、これに基づく臨床実践においても異なる特徴が際立ってくるのである。

例えば、隠喩と換喩という２つの表現形式の区別を、病態水準やその鑑別診断との関連から捉える立場がある。『心理臨床大辞典』(培風館)では、「クライエントの発することばに換喩が多い時、彼が詩人である場合を除いて、その病態は深いと考えなくてはなるまい。隠喩が多い時は、換喩に比べて病態は軽いが、しかし一定していない(三好, 2004, p.149)」と記述されている。

Gendlin のメタファー論は一貫して、まさに先の引用で除かれている、詩人の詩作に見受けられるようなメタファーの創造性に着目してきた。ある言葉がその状況と交差することで、その状況の理解を進展させる CD のメタファー観は、「人が自身の状況について語り、その状況をより精密に理解しようと試みる場」としての心理臨床の実践の場に関して、多くの理論的な示唆を与えるだろう。

本章では、Gendlin 自身のメタファー観の進展について概観した。特に、そのレイテスト・バージョンである CD のメタファー観は、メタファーのもつ創造的な機能について、状況についての理解を交差によって進展させるという独自の着目の仕方によって、従来の臨床観とは別の特徴を含んでいると指摘できる。

第 4 節 結語

岡村(2013)は Gendlin が夢という臨床素材に取り組む過程で着想を得て、後にさらに発展させた交差の機能について、日本独自の言葉遊びである「なぞかけ」に同じ構造を見出し、これをもとにした「なぞかけフォーカシング」という方法を考案した(第 7 章参照)。夢や言葉遊び、そしてこの両者を特徴づけるメタファーの機能は、Freud を発端とする臨床実践において伝統的な研究テーマの 1 つである。精神分析がその臨床的な発想の枠組みを、夢や言葉遊びなどに見出されるメタファーの研究を通して構築していったように、異なるメタファー観の発展は、異なる臨床観を、そして異なる臨床実践を生み出す源泉となるであろう。

本章では、Gendlin のメタファー観の進展を明らかにし、そこからもたらされる臨床的 な特徴について言及した。今後の課題として、Gendlin における「状況と言葉の使用群の交差」というメタファー観がもたらすその臨床観、またそのような臨床観を踏まえた具体的な臨床実践の在り方について、さらに明らかにしていく必要があるだろう。

註

1) 本章は、岡村心平(2015). ジェンドリンにおけるメタファー観の進展 *サイコロジスト: 関西大学臨床心理専門職大学院紀要 5*,9-18 に加筆修正したものである。

2) 感じられた意味とシンボルの機能を重視する ECM のメタファー観に始まる Gendlin のメタファーの捉え方では、「～のようだ」という表現を含むシミリー (simile: 直喩)と、

そのような表現を含まないメタファー(metaphor: 隠喩)を区別せず、両者は同様の機能をもつと捉えられる(Gendlin 1962/1997, p. 114)。そのため、“My love’s is like a red, red rose”という直喩表現も、メタファーとして捉えられている。

3) 夢もまたメタファー的に生み出されるものであり、Gendlin は夢のメタファー的な機能に着目する。 ここで「進展」と訳出したのは “carrying further” という用語だが、CD やそれ以降の Gendlin の論文では主に“carrying forward” と言い回しが用いられ、これに「推進」や「進展」の訳語 が充てられている。本章では特に“further”と“forward”を区別しないが、このような用語の言い回しの変化が Gendlin の理論展開を把握するために示唆を与える可能性があることを補足しておく。

第４章 フォーカシングにおけるメタファーの機能

第１節　導入

本章では、フォーカシング(Gendlin, 1981)におけるメタファーの機能について、その考案者である Gendlin のメタファー観の特徴(第 3 章も参照)や、その他のフォーカシング指向の臨床実践に関するメタファーへの言及を参照しながら考察することを試みる。Gendlin は心理療法家でありながらメインのキャリアとしては哲学者でもあり、自身の哲学的な業績ではたびたびメタファーについて言及している。岡村(2015)は Gendlin のメタファー観について論じているが(第３章)、Gendlin のメタファー論に依拠したかたちで、フォーカシングのプロセスに(Gendlin, 1981)について取り上げている文献は見当たらない[1)]。

またフォーカシングという技法は、Gendlin (1981)が心理療法の効果研究を踏まえ、セルフ・ヘルプ技法として考案された後に、そのエッセンスを心理療法へと還元することで、フォーカシング指向心理療法という心理療法実践の枠組みが提案されたという経緯をもつ(Gendlin, 1996)。Gendlin のメタファー観からフォーカシングやその臨床実践を捉え、整理することは、フォーカシング指向心理療法やその他の心理療法との共通点を明らかにすることに繋がると考えられる。

本章では以下に、まず Gendlin のメタファー観のもつ特徴について概観する。次にフォーカシング指向の臨床実践研究において、特に Hendricks(1986)と Cornell(2013)、Purton (2004)を参照し、クライエント(以下, Cl)あるいはフォーカサー(以下、Fo)である話し手側の用いるメタファーの機能について記述する[2)]。さらに、フォーカシングを促進する６つのステップ(Gendlin, 1981)を参照しながら、フォーカシングにおけるメタファーの機能における２つの重要な契機について論じる。最後に、フォーカシングにおけるメタファーの機能がもたらすメタファー観について、その臨床実践への応用について検討したい。

第２節 Gendlin のメタファー観とフォーカシング実践

1. メタファーの機能と創造性

前章(第 3 章)で確認したように Gendlin (1962/1997, 1986, 1991/1995)は、フォーカシングを考案する以前の著作から、それ以後の近年の論文に至るまで、一貫して、メタフ

ァーに関する考察を展開しており、特にメタファーがもつ意味の創造性に着目している(岡村, 2015)(第 3 章も参照)。Gendlin (1991/1995)は、言語の理解やその意味の創造性に着目し、認知意味論(Lakoff & Johnson, 1980)などの言語理論を参照しながら、それら従来のメタファー論を修正するかたちで、独自のメタファー観の提示を試みている。また Gendlin は、狭義のメタファーとシミリーを区別せずに扱っている(Gendlin, 1962/1997, p.114)。これは Gendlin がメタファーを表現形式としてではなく、新しい意味を生み出す「機能(function)」の観点から捉えているためである。

Gendlin にとってのメタファーの機能とは、「類似性(likeness)」(Gendlin, 1962/1997)や「共通性(commonality)」(Gendlin, 1991/1995)を創造することにある。先の「君の瞳は宝石だ」という Richards(1936/1964)を用いると、従来のメタファーの捉え方では、「君の瞳」と「宝石」のあいだに、何らかの類似性、つまりこのメタファーの根拠となる「輝いていて価値がある」という共通性がすでに前もって認められているため、それに基づいて「君の瞳は宝石のようだ」というメタファー表現が成立すると考えられる。しかし Gendlin は、メタファーの類似性をメタファー表現が成されることで初めて創造されると捉える。三村(2015)が指摘しているように、Gendlin のメタファー観では、メタファーの意味は類似性に基づいているのではなく、「類似性がメタファーにもとづいている(三村,2015, p.183)」。そのため、メタファーは類似性を生み出す創造的な機能を有しているのである。

例えば、ある臨床場面で Cl が自分自身について「僕はラクダだ」と言ったとしよう。通常のメタファー観であれば、このように発言した Cl にはそのメタファー表現の「根拠」となる意味、つまり自分とラクダの共通点を有していると捉え、時にセラピスト(以下、Th)はその意味や意図を詮索し、解釈を試みる場合もあるだろう(例えば容易には「砂漠のような過酷な状況にいる、ということだろうか」というように)。実際に、Cl がそのような意図を Th に伝えるために、話の例えとしてメタファーを用いることもあるだろう。

一方で、Gendlin のメタファー観では、「僕はラクダだ」というメタファーによって、その 2 つのあいだの類似性が新たに創造されると捉える。また、この類似性はある 1 つのパターンとして事前に存在するわけではないため、Cl 自身が、そのメタファーの意味を意味として次々と、共通点を際限なく創造していくことができる(Gendlin, 1991/1995)。そこには確かに、「砂漠のような今置かれている状況の過酷さ」があるかもしれないが、それだけではなく、その過酷さを「生き抜くタフさ」や「汗もかかず過ごす気長さ」な

どを含みうる。「僕はラクダだ」というメタファーに関して、すでに理解している意味よりもそれ以上の新しい何かを、さらに続けて見出していくことが可能である。それはこのメタファーを口にした当の Cl にとっても意外に思えるような、「新奇性(novelty)」を伴った新しい意味をも創造することなのである。

2. メタファーと交差

Gendlin (1991/1995)はこのようなメタファーの創造的な機能について、後に「交差(crossing)」という概念を用いて論じている(第 3 章参照)。交差とは、様々に用いられうる「言葉」と、その言葉が実際に使われる現在の「状況」のあいだの関係性を指し、両者のあいだの共通性が新たに創造されることである[3)]。

フェルトセンスは、漠然とは身体的に感じられるが、うまく言葉にならない言語以前の内的な感覚と捉えられている。これに関して Purton(2004)は「フォーカシングは『気持ち(feeling)』という主観的な世界に引きこもって安らぐことではない。そのように見なされるべきではない。そうではなく、自分の状況を感知するという実践である(Purton, 2004, p.95)」としている。ある状況(趣意)を、言葉(媒体)を用いて喩えることで、新たな意味を創造し、その状況についての新たな理解をもたらすメタファーの機能は、この状況と言葉の交差という機能に特徴づけられる。すでに十分理解したと思えることについてであっても、交差というプロセスを通して、そこから新たな理解が生み出されるのは、「決定要因がより交差するほど、新奇性(novelty)はより可能となる」(Gendlin, 1991/1995)ためである。交差とはこのように状況についての理解の新奇性を生み出す機能を有しており、これが Gendlin のメタファー観から見たフォーカシングにおけるメタファーがもつ独自の機能である(第 3 章)。

Gendlin は Lacan が採用したようなメタファーとメトニミーの区分については言及してはいない。しかし、メタファーのこの創造的な機能をより広汎に捉え、状況と言葉の交差がメタファーのような特定の比喩表現に限らず、他のあらゆる言語使用においても見受けられると指摘する (Gendlin, 1991/1995)。あらゆる言葉はメタファーが使用させる際と同様に、その言葉がこれまで使われてきたのとは別の状況において使用される可能性がある。交差という状況との関わりの中で、すべての言語はメタファー的に機能する。このように、Gendlin による交差という創造的なプロセスによる観点から、Cl の用いる状況についての表現を「状況についてのメタファー」(岡村, 2013, 2015)として捉えることができ、Cl の状況についての質感を捉えるための手がかりとなる(第 3 章も参照)。

以上で確認したように、Gendlin の理論的な文献においては、メタファーという用語は、意味の創造における重要な機能をもつことがたびたび言及されている。一方で、実践に関する著作、すなわちフォーカシングに関する著作では、Gendlin はメタファーという用語を使用してはいない(Gendlin,1981)。またフォーカシング指向心理療法に関する著作(Gendlin, 1996)においても、夢に関する実践への言及でメタファーへの記述が見られる程度で、例えば「…夢が以前から知っていたことのメタファーであることがわかっただけでは、その夢はまだ夢本来の本質的な貢献はなされていない」(p.204)、あるいは「夢がそれを見た人の問題についての正確なメタファー(an accurate metaphor)となるだけでは、十分ではない」(p.205)というように、消極的な側面に言及されているのみである。つまり、Gendlin が自身の理論的な捉え方において強調している、メタファーの創造的な機能を実践においてより積極的に用いていくためには、その新奇性や創造性へとさらに注目し使用する枠組みを Gendlin の論述とは別の論述も参照することが必要となる。

第 3 節 クライエントによるメタファー表現

1. 心理療法の治療変数としての体験過程レベルとメタファー

フォーカシング指向の実践におけるメタファーの使用、特に話し手側のメタファーの使用に関しては、Hendricks(1986)による重要な指摘がある。Hendricks(1986)は、心理療法における治療変数(therapeutic valuables)として「体験過程レベル(Experiencing level)」について論じている(Hendricks,1986)。Gendlin が提唱した体験過程(Experiencing)の概念は、体験の内容ではなく体験と関わる様式(manner)やそのプロセスに注目したものであり、「体験過程スケール(Experiencing Scale)」(Klein et al. 1970)の開発やこの尺度を用いたカウンセリングの効果研究は、フォーカシングの開発経緯にも影響を与えている(田中, 2004; 田中・池見, 2016)。Hendricks (1986)は、体験過程の様式の変化の表れとして「言語と沈黙の特殊な使用(the particular uses of language and silence)」(p.143)に注目し、セッションの逐語記録をもとに低・中・高の 3 つの体験過程レベルを治療変数として提案している。ここでは高体験過程レベルの特徴を取り上げる。

高体験過程レベルでは、事実や出来事への言及が曖昧になり、聴き手が出来事の推測することも難しくなるが、話し手自身が「内的な意味」を感じ、より「自己関与的」な

話し方が特徴的となる。話し手は「すぐそこにはっきりと触れられる感覚をもっているのだが、それが何であるのか認知的にはまだ『知らない』」(Hendricks, 1986, p.149)という状態にある。Hendricks は、高体験過程レベルの特徴を示すある女性 Cl の逐語について言及しながら、以下のように記述する。

> She has to grope for words that will "fit" the sense just right. This body sensing is individually specific. Clichés and ordinary uses of language have little power. She creates metaphors to get at the exact specific quality of the experience. Metaphors are a use of language marked by "it's like. . ." (Your eyes are like stars). She is using language this way when she says, "it kind of feels like . . . (pause as she gropes for words and lets them come) sitting here looking through a picture album." (Hendricks,1986, p.149)

話し手が自身の体験や身体感覚に独自の質感をより正確に捉えるためには、使い古された決まり文句では不十分であり、その感覚を捉えるために、質感を吟味しながらメタファー表現を作り出す必要がある。Hendricks はここで「～のような(like)」という言い回しを示しているが、Gendlin のメタファー観と同様に、通常はシミリーと考えられているこの「～のような」という表現が、その独自の質感を示すための機能の観点からメタファーとして捉えられていることがわかる。

このように Hendricks(1986)は、治療変数として重要な高体験過程レベルの発話の特徴として、メタファーに注目する。状況についての感じられた意味感覚であるフェルトセンスと関わるなかで、Gendlin もたびたび(...)という表記で示す「沈黙(pause)」を挟み、言葉を吟味しながら、Cl はその状況の質感を言い表そうと試みる。このときに用いられるメタファーは、その状況に前概念的に含意されている、暗在的(implicit)な独自の意味を Cl 自身が理解するための手がかりとなる。高体験過程レベルでは「メタフォリカルに言葉を用いる」(Hendricks, 1986, p.150)ということ、そして「暗在を指し示すために言語を用いる」(Hendricks,1986, p.150)ということが特徴となる。メタファーはこの暗在(...)を言い表すために、重要な機能を果たしているのである。

2. クライエントの用いるメタファー表現

フォーカシング指向心理療法家の Purton(2004)は Gendlin の交差の概念を参照しなが

ら、心理療法におけるメタファーの役割に対して、体験過程という観点から以下のように述べている。

> Metaphor has a widely acknowledged place in psychotherapy, but without the concept of felt experiencing, of (...), metaphor is unintelligible. For metaphor to be possible old words have to work in new ways. One has to let go (a bit) of the familiar ways in which the words work and dip down into the (...) out of which they emerge. This is what happens in focusing (Purton, 2004, p.179-180).

Purton(2004)は Hendricks(1986)による指摘と同様に、状況についての暗在的な、つまり(...)という仕方で示されるような質感を、メタファーで言い表すことこそが、フォーカシングのプロセスで起こることだと強調する。また Purton(2004)はメタファーを可能にするものを「古い語が新しいやり方で機能する」ことと記述しており、このようなメタファーの捉え方は Gendlin(1991/1995)の交差の概念の顕著な特徴であった。

また、フォーカシングの実践家である Cornell (2013)は、フェルトセンスを記述するために「しばしば新鮮な、メタファーの言葉づかいを必要とする(Often needing fresh, metaphorical language)」 (p.43)と記述し、例えば「内側にある壁のような」「『いやいや』って言っているこどもみたい」や「巨大なイカのような」というようなメタファー表現の例を挙げている。また Cornell (2013)は同書で「新鮮なメタファー(fresh metaphor)」「生き生きとしたメタファー(vivid metaphor)」や「豊かなメタファー(rich metaphor)」という言い回しをたびたび用いている。「新鮮な」や「生き生きした」というようなメタファーの形容の仕方から明らかなように、フォーカシングのプロセスにおいてフェルトセンスを言い表すために用いられるメタファーは、そのとき感じられる独自の質感に適合するように、その都度新たに言葉を用いる必要がある。この点は、あらゆる言語使用がメタファーと同様に創造的だと捉える Gendlin のメタファー観とも共通している。

ところで、上記で指摘した「生き生き」としたメタファーの使い方とは対照的に、言語学においては「死んだメタファー(dead metaphor)」という呼び方がある(Gibbs, 1994)。これは例えば「机の脚」や「ストレスが溜まっている」というように、実際にはメタファー表現でありながら、慣用句やすでに使い古された言葉として、そのメタファー的な

特徴が欠如したものを指す。Hendricks(1986)の「決まり文句や通常の言語の用法は、ほとんど力にならない」(p.149)という指摘の通り、話し手がフェルトセンスを表現するためには、Cornell (2013)が形容するような「新鮮な」「生き生きとした」使い方による表現が必要となる。

その一方で、例えば「ストレスが溜まっている」という発言についての暗在的な質感、つまり「溜まっている」という言葉で言い表されている質感を、「新鮮に」感じられるように促すことができれば、「ストレスが溜まる」という発言は、たとえ慣用句のような表現であっても、状況についてのメタファーとして「息を吹き返す」ことに繋がる場合が想定できる。質感を言い表すために状況と言葉が交差するとき、言葉はメタファー的に機能する。その際、話し手はそのフェルトセンスをより言い表すために、「溜まる」という言葉を「こびりついている」という表現へと変えるかもしれない。Purton(2004)の指摘のように、ストレスについての「溜まる」という表現が生まれるもとになった、生き生きとしたその質感(...)へと立ち戻り、新鮮にその表現を使用することが、フォーカシングにおけるメタファー使用の最も重要な機能だと指摘できる。

第4節　フォーカシングにおけるメタファーの機能

1. フォーカシングの教示・応答におけるメタファーの機能

先述のように、Hendricks(1986)は心理療法の治療変数としての体験過程において、Clが状況についての独自の質感を指し示すための機能を担うメタファーに着目した。このような状況についての質感を言い表す表現は、話し手以外の「他の誰にも(中略)提供できない(Hendricks, 1986, p.154)」ため、聴き手は話し手がこのような表現を見出していけるように関わることが求められる。また聴き手が何か言葉やイメージを提案する際にも「セラピストの言葉も暗在を指し示すために、メタファー的に使用されなければならない」(Hendricks,1986, p.154)。心理療法において「クライエントもセラピストも言葉を指し示すもの(pointers)として使用する必要がある」(Hendricks, 1986, 154)のである。

では実際のところ、聴き手側はどのようにフォーカシングのプロセスを促すことができるのだろうか。ここで注目したいのは、フォーカシング的な応答、ならびにフォーカシング簡便法(1981)の教示の中には、それ自体にメタファーが豊富に含まれており、かつ教示が話し手のメタファー表現を促すように機能しているという点である。

以下に、フォーカシングにおいて用いられる教示や応答におけるメタファー表現を概

観する。特に、Gendlin(1981)のフォーカシング簡便法における６つのステップの中から、「ハンドルを見つける」と「アスキング」の２つに注目する[4)]。

2. ハンドル表現とメタファー：状況についてのフォルトセンスを「喩える」

フォーカシングのステップ３「ハンドルを見つける(Finding a handle)」では、フォーカサーはフェルトセンスを言い表すのに「適合する(fit)」表現を見つけようと試みる(Gendlin,1981,p.64)。このような表現は、状況についてのフェルトセンスと関わるために、その独自の質感を把握し捉えるための「取っ手(handle)」、ハンドル表現となる。このような「ハンドル(取っ手)を見つける」という表現自体がまたメタファーであることも興味深いが、Hendricks(1986)が指摘する治療変数を特徴づけるメタファー表現は、このハンドル表現と同義である。つまり、ハンドル表現を見つけるように「喩えること」を促すということ自体が、状況についての暗在的な質感を指し示すメタファーの機能を促進させるようにはたらいていることがわかる。

岡村(2013, 2015)が指摘するように、ハンドル表現はフォーカサーの「状況についてのメタファー」として機能している。「ねばねばする(sticky)」「行き詰まった(stuck)」あるいは「重い(heavy)」(Gendlin, 1981, p.51)というようなオノマトペやイメージ、ジェスチャーなどの豊かなメタファーによって言い表されるハンドル表現は、話し手の状況についての暗在的な質感を指し示すためのメタファーとして機能する。また、ステップ４の「共鳴させる(resonating)」(Gendlin, 1981)は、これらのメタファー表現がフェルトセンスを言い表すのにふさわしいかどうかを“響かせる”ことによって確かめる補完的な機能を有していると捉えられる。

フォーカサーが適切なハンドル表現を見つけることを促すための応答例は数多くある。例えば、先に挙げたように、生き生きとした質感を言い表す表現形態の１つにオノマトペがある。オノマトペとは、ある事態を音のパターンで表現する方法であり、擬音語(ポチャンヤン)，擬態語(ズキズキ)、擬情語(そわそわ)などいくつかに分類される。これらの言語表現は「事態全体を生き生きと想起させる言語表現(深田・仲本，2008)」である。また日本語にはオノマトペ表現が多く、日本語母語話者に「事態の中に身を置き，事態全体を自分の身体で感じながら直接的に把握していく傾向が強い(深田・仲本， 2008)」と指摘されている。フォーカシングのプロセスでも、話し手がオノマトペを用いることは頻繁にある。話し手が「もやもやした感じ」というオノマトペを用いたとしよう。当然ながらこれは、実際に身体の内側に「もや」がかかっているわけはなく、メタファー表現である。な

お、ここで「もやもや」というオノマトペ「もじもじ」と、少し言い換えてみるだけでも、その質感はまったく異なってくる。オノマトペもまた，慣用句的にではなく、その質感を言い表す際の手がかりとして機能するとき，体験を言い表すためのメタファー的な役割を果たしている。オノマトペという言葉の使い方は，フェルトセンスの質感を生き生きと扱うのに非常 に優れていると言える。

また、例えば Cl が「ずっしりした感じがする」と表現したとしても，実際には体内に何らかの重さの変化があったわけではない。「ずっしり」というオノマトペで表現されたものは，まさに身体的に感じられているにもかかわらず、身体の内側を指しているのではない。Cl にまさに「ずっしり」と感じられているのは，つまり「ずっしり」という媒体が喩えている趣意は、身体的に相互作用しながら Cl がまさにそのように生きている Cl 自身の「状況」ある。

「心の天気」(土江, 2005)というワークでは、自身の今の気持ちや状況を「天気」というメタファーで言い表すことを促している。土江(2005)は天気という話題の導入のしやすさや、「天気用語は非常に豊富であり、それが微妙な表現を可能にしてくれる(p.63)」という特徴について記しており、岡村(2013)が「『梅雨明け』という気象用語を、実際の天候ではなく、自分自身の状況を例えるために使用(岡村, 2013)することができると指摘するように、状況についての暗在的な側面を天気で言い表すことのふさわしさを示している。

また中田・村山(1994)の Handle-Giving 法は、フェルトセンスの質感を捉えることが難しいフォーカサーや、フォーカシングの初心者のために考案されたもので、聴き手が「それは～な感じですか？」とハンドル表現を提案する方法である。Hendricks による「セラピストの言葉も暗在を指し示すために、メタファー的に使用されなければならない」(Hendricks, 1986, p.154)という指摘の通り、この Handle-Giving 法では、聴き手から提案されたハンドル表現と自身のフェルトセンスを「共鳴させる」ことでフォーカサーがフェルトセンスの質感を確かめることを促すことができる。フォーカシングのプロセスにおいて聴き手側は、フォーカサーが常にフェルトセンスに対してその質感と関わり、言い表すことができるような豊かなメタファーの使用に開かれた応答が求められる。

このように、フェルトセンスを言い表すのにふさわしいハンドル表現を見つけるということをめぐって、フォーカシング指向の実践では、実際にフェルトセンスをメタファー表現で言い表すということのみならず、フォーカサーが言葉をメタファー的に用いる

こと、あるいはリスナーがそれを支援するという契機を豊富に含んでいることがわかる。

3.アスキングにおけるメタファーの機能：フェルトセンスの意味の探求と「尋ねる」

フェルトセンスの質感を言い表す適切なハンドル表現が見つかった後で、フォーカシングでは、そのようなハンドル表現として言い表されたフェルトセンスに問いかけ、尋ねる「アスキング(asking)」というステップを実施する (Gendlin,1981, p.68)。Gendlin(1981)は、フェルトシフトと呼ばれる、すでにそのフェルトセンスについての新たな理解や身体感覚の変化をともなった気づきが生じている場合には、ステップ5は省略し、その新たな理解を吟味するためのステップ6へと進むよう指摘している(Gendlin, 1981, p.66)。つまりアスキングは、Hendricks(1986)の指摘する「すぐそこにはっきりと触れられる感覚をもっているのだが、それが何であるのか認知的にはまだ『知らない』」(p.149)というような、新たな理解が生じない場合のためのステップである。アスキングは、このような確かに感じられているが、まだ何であるかはわからない、状況についてのフェルトセンスの意味を探求することを目的している。

Gendlin(1981)は、アスキングについて説明する中で「この問題にとって意味があって、何かははっきりしないけれどもまさにそこにあり、しかもそれがあなたにはまだ何であるかわからないものを感じてみるのに時間を使えば、あなたはフォーカシングをしている」(Gendlin, 1981, p.68)と記述している。類似した表現はフォーカシング指向心理療法に関する著作(Gendlin, 1996)にも見受けられるが(第7章参照)、この「何かははっきりしないけれどもまさにそこにあり、しかもそれがあなたにはまだ何であるかわからないもの」を言い表すために、メタファーが重要な機能を果たしている。なぜなら、Hendricks(1986)が指摘するように、使い古された言葉では記述できないフェルトセンスの質感を言い表すことを可能にする表現こそが、メタファーだからである。

アスキングでは、ハンドル表現という「状況についてのメタファー」を手がかりとして、フェルトセンスに問いかけ、「尋ねる」ことで、意味の探求を行う。この問いかけの言い回しにもいくつかのヴァージョンがあり、たとえば「このことに関して、何がそんなに困るのだろうか」や「フェルトセンスは何を必要としているのだろうか」というようなものが挙げられる。特に Gendlin(1981)が強調するのは、アスキングにおいてはその感じと「一緒に過ごし」「それに質問をし」、「そこで答えを待つ」ということ、フェルトセンスに「答えてもらう」ということである。アスキングでは、この「問いかける」というメタファー表現が、たびたびフェルトセンスを「擬人化」し「友好的」と形容さ

れるようなフェルトセンスとの様式の変化を促し、有益な関わりを持続させることに貢献している。

また岡村(2013)は、「そのハンドル表現は何を伝えているんだろう？」というアスキングは、「『その状況についてそのような表現が使用されるのはなぜか』という状況の中の言語使用に対する問い、あるいは『そのような状況のどこがそのように“重たい雲のよう”なのだろう』というメタフォリカルな理解の促進」(岡村,2013)として捉えられ、これらは「フォーカサーに感じられる状況と、その状況についての表現を交差させることで、状況についての新たな理解を促進」(岡村, 2013, p.4)させると指摘している。Gendlin のメタファー観の特徴は、類似性や共通性を新たに創造することであった。アスキングという応答は、「問いかける」ことによって状況と言葉の「交差」を促し、ハンドル表現とフォーカサーの状況のあいだの類似性を創造することを促進するように機能しているのである。

フォーカシングのプロセスでは「状況についてのメタファー」であるハンドル表現を促すステップと、そのハンドル表現の意味を探求するアスキングという、２つの特徴的なステップによって、言葉と状況を交差させ、そのあいだの類似性を新たに創造するというメタファーの機能を活かし、そのプロセスを促進していることがわかる。確かにそのように感じられながらも、その意味が未だわからないというフェルトセンスの特徴をより活かすために、使い古された言い回しではない「新鮮なメタファー」を用い、探求することが、フォーカシングのプロセスを進展させるための原動力となっているということが、Gendlin のメタファー論から捉えることができるのである。

第５節　考察

前節で論じたように、Gendlin のメタファー論から言えば、フォーカシングのプロセスは、状況についてのフェルトセンスを手がかりとして、その独自の質感にふさわしいハンドル表現を見つけようとする「喩える」という契機と、そのようにして言い表された表現の意味をさらに探求していく「尋ねる」という契機に特徴づけられている、ということができる。フォーカシングのプロセスは、そこに含まれる豊かなメタファーの機能を通して、使い古された言葉では言い表せない、状況の暗在的な側面への注目を促す。Hendricks(1986)による「セラピストの言葉も暗在を指し示すために、メタファー的に使用されなければならない」という指摘の通り、フォーカシングの教示や応答も、話し手

の状況についての暗在的な側面を指し示すためにメタファー的に機能している。話し手側がそのフェルトセンスを言い表すためにメタファー表現を用いるように、聴き手側もまた、応答や教示として豊かなメタファー表現を用いることが必要となる。

ただし、応答や教示もフェルトセンスを指し示すためにではなく、紋切り型の慣用句のように用いてしまっては、フォーカシング的応答はメタファーとしての機能を失ってしまいかねない。聴き手が話し手とともに、話し手自身の状況についての質感を確かめながら、メタファーの機能を活かして言葉と状況を交差させていくことが重要である[5)]。本章では、心理療法においてメタファーという表現形式を強調するのではなく、Cl にとって新奇性を伴った状況の理解を促す際のメタファーの機能に着目した。

臨床実践では、問題の明確化やその解決、症状の軽減や生活面における様々なスキルの習得など、様々な目的設定がなされるが、Cl の状況についての新しい側面を理解していくというプロセスもまた、臨床的な営みの一部である。そのようなメタファーのもつ創造性は重要な機能を果たしている(第 2 章参照)。Fo の言葉を「状況についてのメタファー」と捉えるという本研究での強調点は、濱野(1990)の「クライエントの話すできごとをメタファーとして聴いていく姿勢」(p.186)のもつことの重要性の指摘との共通点があり、Barker(1985)の挙げる「メタファーによる状況のリフレーミング」とも類似した特徴が認められよう。

また妙木(2005)は心理療法におけるメタファーの機能を整理する中で、精神分析におけるメタファーを「意味を有機的に織り込む行為」として捉え、重要な治療的体験を伴うようなメタファーを「発見的メタファー(heuristic metaphor)」と呼んでいる。そこで妙木は、このようなメタファーに伴う感覚体験の「生々しさ」や「実感」に注目し、「そのためメタファーの発見と使用には、実際にどのような感覚体験をし、いまどのように(非言語的に)振る舞っているのか、が重要な判断基準となり、この点がそれを「有機的」と呼んだ理由」(妙木, 2005, p.116)と記述している。メタファーを「新しい意味を生む働き」(妙木, 2005, p.118)と捉えるこの精神分析のメタファー観は、Gendlin のメタファー観とのあいだで、創造性の強調だけでなく感覚的なものへの注目においても共通の特徴をもっていると指摘できる。

第 6 節　結語

以上のように、メタファーという、様々な心理療法実践において共通して論じられて

いる主題をさらに考察していくことを通して、異なった発想に基づく心理療法のそれぞれの特徴をより明確にすることができるだろう。また今後必要となるさらなる課題としては、フォーカシング指向の観点からメタファーの機能を活かすための方法の開発や、メタファーに含まれる様々な臨床的意義の検討、各心理療法の特徴の相違について、メタファーの機能の分析から捉えることなどが挙げられよう。

註

1) 村上(2010)は、メタファーの治療的意義とフォーカシングやフェルトセンスの機能に着目しているが、村上自身が言及しているように(p.244)、そこでは Gendlin による身体論をベースにした言語論とは別の角度から論じられている。

2) ペアになってフォーカシングを行う場合、フォーカシングに取り組む話し手を「フォーカサー」と呼ぶことがある(池見, 2010)。本研究では、臨床実践とそうではないフォーカシングプロセスどちらも扱うため、文脈に応じて話し手側を「クライエント(Cl)」「フォーカサー(Fo)」、聴き手側を「セラピスト(Th)」「リスナー(Li)」などと適宜表記する。

3) 厳密には、ある言葉がすでに多くの使用群(use-family)を有しており、状況も多くのものを暗在的に含んでいるため、言葉における「交差」と、状況における「交差」、そしてこの２つの区分のあいだの「交差」という３つを強調できる(Gendlin, 1991/1995, p.558)(第１章を参照)。本研究では言葉と状況という「これら２つの区分が実際の言語使用において機能する仕方」(Gendlin, 1991/1995)に言及するため、該当する３番目の区分の交差を主として取り上げている)。また、ある状況が有する複雑さは、その状況と相互作用する身体の感覚として、漠然とではあるが直接的に感じられる。この身体感覚が、フォーカシングにおいて重要な用語であるフェルトセンス(felt sense)と呼ばれるものである(Gendlin, 1991/1995)。

4) この２つのステップからフォーカシングのプロセスについて中心的に捉えることによって、状況についてのフェルトセンスをメタファーとして言い表し、そこに暗在的に含まれる状況について新たな理解を探求する、という Gendlin のメタファー論から見たフォーカシングのプロセスの特徴をより際立たせて論じることが可能となる。なお、Gendlin(1981)によるフォーカシング簡便法は、「空間を作る(Clearing a Space, Felt sense),「ハンドルを見つける(Finding a Handle)」「共鳴させる(Resonating)」「尋ねる

(Asking)」「受け取る(Receiving)」という６つのステップからなるが、Gendlin のメタファー観における創造的な機能という観点から、本論では２つのステップを主として論じている。また、フォーカシングセッションの準備作業であり、最初のステップである「空間を作る」に関しては、メタファーの機能の観点から考察する意義は認められるが、このステップ自体を単独で用いることもあり(池見, 2010)、考察は別稿に譲ることとする。

[5] 三村(2015)が指摘する通り、本研究で注目する創造的なプロセスは、必ずしもメタファー表現を介在しなくとも起こりうるだろう。一方で、「比喩表現を積み重ねて、感じられた意味を理解しようとする。それによって感じられた意味がより豊かになり、体験全体が進んでいく（セラピーの成功が導かれる)。この見解自体は体験過程理論の根幹を形成する考え方として、本書も積極的に容認する」(三村,2015,p.157)と三村が記述しているように、心理療法について考察する上では、メタファーは注目に値すると考えられる。

第 5 章　対人的な相互作用における交差の機能と「共に感じること」[1)]

第 1 節　導入

私たちが時として、誰かに話を聴いてもらうということを切望するのはなぜだろう。このような問いは、カウンセリングという行為やその制度の根本的な存在理由にも関わりうるものである。Gendlin は、論文“Crossing and Dipping”(Gendlin, 1991/1995)の最後のパラグラフにおいて、この問いについて以下のように論じている。少し長くなるが、引用しよう。

> We can understand each other across different experiences and different cultures, because by crossing create in each other what neither of us was before. Communication and making sense does not rest on pre-existing commonalities, as if we can understand only what we already know. Nor is it misunderstanding and distortion. Rather, when we are precisely and exactly understood, that is when we are most eager to hear how it has crossed in the other person. Crossing creates something in the other that is new to them and to us. That is why we like to hear their reactions (Gendlin, 1991/1995).

必要に応じて訳出しながら引用箇所を解説していこう。「私たちは、お互いに異なった体験、異なった文化を超えて理解し合うことができる」という一説に続き、Gendlin は「むしろ、私たちが精密に、そして正確に理解されるときというのは、そのことがどのように他者に交差された、それを聴くことを最も切望するときである」と記述している。誰かに何かを伝え、その反応を聴くことで、私たちはより精密に、かつより正確に、自分自身の体験を理解することができる。このような相互作用に対して、Gendlin はここで「交差」(crossing)という用語を用いている。

引用最後の「交差は、他の者たちの中に、彼らや私たちにとって初めてとなる何かを作り出す。これが、私たちが彼らの反応を聴くのを好む理由である。」という一節で、この論文(Gendlin, 1991/1995)は結ばれている。ここでいう誰かに何かを伝え、その反応を聴くことは、いわゆる「伝言ゲーム」の答え合わせのように、自分の言ったことが他者に正確に伝わっているかを確認する作業ではない。それは自らだけでなく、その話を聞

いた誰かにとっても新しい「何か」を作り出す事であり、だからこそ、私たちは誰かに反応、リアクションをもらうのを好むのだ、と Gendlin は記述する。

実は、この最後の“That is why we like to hear their reactions”という一文には、脚註(原註 4)がつけられている。「私たちが誰かに話をすることを好む理由」。本章は、Gendlin がこの一文につけた脚註をたどることから、議論を始めることにする。

第 2 節　対人的な相互作用における交差：「共に感じること」

1. 「共に感じること」と「交差」

まずは Gendlin(1991/1995)の原註 4 を引用しよう。以下がその全文である。

> Gilligan argues against Hoffman's assertion (the usual one) that "one can feel another's feelings only to the extent that the other's feelings are similar to one's own." Gilligan says that "Considered on a theoretical level, co-feeling, however morally desirable, would seem to be psychologically impossible." Then she cites many findings that "co-feeling implies that one can experience feelings that are different from one's own." We see here the grand error of most Western theories –the assumption that all cognition must consist of *pre-existing* patterns or units. All about us we see novelty instead. That certainly includes the *crossing* when two people interact (Gendlin, 1991/1995).

まずは概略を確認する。ここでは、Hoffman によるよく知られた「人間は他者の感じに関して、その人自身の感じと類似する範囲でのみ、他者の感じていることを感じられる」という仮説に対する、Gilligan による反論が引用されている。Gilligan は「理論的なレベルで考えると、共に感じること(co-feeling)は間違いなく望ましいことであるにも関わらず、心理学的には不可能であると思われる」と指摘する一方で、「共に感じることは、自分自身の体験とは異なる感じを体験できるということを含む」ということに関する数多くの研究結果を提示していると Gendlin は記述する。Hoffman が前提としている「あらゆる認知は、前もって存在する(pre-existing)パターンやユニットから成り立たなければならない」という西洋の理論仮説の多くに当てはまる発想を、Gendlin は重大な謝りだと指摘している。その代わりに Gendlin は「新奇性(novelty)」という特徴を

Gilligan の主張に見出しており、この新奇性は「2 人の人間が交流する際の交差(the *crossing* when two people interact)」に含まれているという。

まとめると、この脚註の前半部分は Gilligan による Hoffman への反論の紹介であり、ある人が、別の誰かが感じていることを感じようとする際に、自分自身の感じと類似していること、その類似性が「前もって存在する」ことに基づき、その類似性のみに他者の感じていることを捉えるという発想への批判である。後半は、Gendlin が「共に感じること(co-feeling)は、自分自身の体験とは異なる感じを体験することを含む」という Gilligan の主張に賛同しながら、対人的な相互作用における新奇性の動因として「２人の人間の交流における交差(crossing)」を取り上げている。では、ここで用いられている「共に感じること(co-feeling)」とは、どのような意味を含んでいるのだろうか。次に、Gilligan や Hoffman の主張を、その引用元の論文を追いながら、さらに確認していこう。

2. 「共に感じること」と「共感」

Gendlin(1991/1995)で Gilligan の論述として引用されている論文は、実際には Gilligan & Wiggins (1987) の共著論文 "The Origins of Morality in Early Childhood Relationships"である [2)]。この論文は、倫理観の発達における「正義感指向(justice orientation)」と「ケア指向(care orientation)」という２つの視点についての実証研究を幅広く参照しながら論じられている。幼児の共感応力に関する多くの実証研究を紹介するなかで、Gilligan と Wiggins は Hoffman の論文を取り上げ、"Hoffman (1976) suggests that one can feel another's feelings only to the extent that the other's feeling are similar to one's own (Gilligan and Wiggins, 1987, p.289)."と論じ、この箇所が Gendlin(1991/1995)で紹介されている部分であった。

Gilligan と Wiggins が批判しているのは Hoffman(1976)の"Empathy, Role Taking, Guilt, and Development of Altruistic Motives"という論文であり、このなかで Hoffman は古典的な共感の捉え方から、共感的な苦痛(empathic distress)を特徴づける２つの具体的な例を挙げる。１つは、養育者の緊張が子どもに対して身体的に転移される例、そしてより一般的な例としてもう１つ挙げられている。該当する箇所をそのまま引用しよう。

> A second, more general, paradigm holds that unpleasant affect accompanying one's own painful past experiences is evoked by another person's distress cues

which resemble the stimuli associated with the observer's own experiences. A simple example is the child who cut himself, feels the pain, and cries. Later on, he sees another child cut himself and cry the sight of the blood, the sound of the cry, or any other distress cue form the other child associated with the observer's own prior experience of pain can now elicit the unpleasant affect that was initially a part of that experience (Hoffman, 1976, p.126).

Hoffman の挙げているもう１つの例は、引用のように自分自身の過去の苦痛を伴った体験と類似する(resemble)他者からの刺激に誘発されて、不快な感情が呼び起こされるというものである。具体的には、怪我をして痛い思いをした経験のある子どもが、他の子どもが怪我をして泣き叫んでいるのをみて、同じように不快な感情を呼び起こすという例が挙げられている。このような共感についての捉え方に対して、Gilligan & Wiggins (1987)は、「共に感じること(co-feeling)」という語を用いて以下のように反論する。

Our interest in co-feeling lies in the implication that such feeling develop through the experience of relationships which render other's feeling accessible. The distinction between co-feeling and empathy is that empathy implies an identity of feeling–that self and other feel the same, while co-feeling implies that one can experience feelings that are different from one's own (Gilligan & Wiggins, 1987, p.289).

引用のように、Gilligan と Wiggins はここで「共感(empathy)」と「共に感じること(co-feeling)」という２つの語を対比的に用いている。「共感」は自己と他者が同じ感じ(feeling)を共有するものであり、「感じの同一性(an identity of feeling)」を含んでいる。それに対して、「共に感じること」という語では、自身の感情とは異なる感じを体験できる、ということを示唆している。「共に感じること」という語は、ここでは自身の体験と類似する他者の体験を共有するという意味での「共感」とは異なる意味で用いられており、つまり「共に感じていること」が従来の古典的な発達心理学で言われていた「共感」とは異なることがわかる。ただ、この「共に感じること(co-feeling)」という言い回し自体は、この論文で Gilligan ら自らが考案したものではない。先の引用箇所の手前で、あ

る小説の一節が引用されており、実はその小説の中で、“co-feeling”という言い回しが登場する。Gilligan らもまた、これを援用しているのである。

3.「共に感じること」と「同情」

Gilligan と Wiggins は、先に引用した引用箇所の前頁において、倫理観の発達に関する諸問題を整理したのち、“these problem of interpretation are illustrated clearly by the discussion of the ‘compassion’ in Milan Kundera’s novel, *the Unbearable Lightness of Being* (1984)”と記述している。このチェコスロバキア出身の作家 Milan Kundera による小説“*the Unbearable Lightness of Being*”(邦題『存在の耐えられない軽さ』)は Kundera の代表作の 1 つであり、映画化もされているという。この小説は、時に哲学的な断章を交えながら、物語が展開して行く。Gilligan らが引用しているのは、英訳版の第 1 部、主人公の医師トマーシュが、行きずりの関係となったテレザに対して抱いたある種の同情(compassion)について、その語源について語り手が注釈しながらもの思いにふけている場面である。

注釈は以下のようなものである。ラテン語から派生した言語においては、“compassion”は“com-(共に)”という接頭語と“passio(苦しみ; suffer)”という語根から成り立つ。このような諸言語では「同情という言葉は、人は他者の苦しみを冷静な心でみていることはできない、言い換えると、人は苦しんでいる者に共感をもつ(Kundera, 1984)」という意味となり、同情によって誰かを愛することなど、本当の愛ではないということになる。しかし“compassion”を意味する言葉として、その語根に“passio”ではなく、例えばフランス語の“sentiment”(英語では feeling)から成り立っているような諸言語では、同情という語はより広い意味を有することになる。Kundera はこの小説において、以下のように書いている。この箇所は Gilligan と Wiggins の論文でも同様に引用されている部分である。

> The secret strength of its etymology flood the word with another light and gives it a broader meaning: to have compassion (co-feeling) means not only to be able to live with the other’s misfortune but also to feel with him any emotion – Joy, anxiety, happiness, pain (Kundera, 1984, p.20).

引用のように、ここでは「同情(compassion)」のパラフレーズとして「共に感じること(co-feeling)」という言い回しが用いられる(元々の原文である仏語版では、

“compassion(co-sentiment)”と表記されている)。ここでは、「共に感じること」が、他者の不幸(misfortune)と共に生きるということだけでなく、その人のあらゆる感情、喜びや不安、幸福や苦痛など、あらゆる感情を共に感じるということを意味している。Kundera のいう「共に感じること」とは、他者と共に、苦痛のみならず、あらゆる感情を共に生きることを指す概念であることがわかる。

4. 本節のまとめ

Gilligan & Wiggins (1987)では、Kundera のこの「共に感じること」という発想を援用しながら、“Yet the idea of co-feeling goes against prevailing assumptions about the nature of the self and its relation to others, since co-feeling implies neither clear self-other boundaries nor a merging or fusion between self and other, so that one or the other disappears(さらに、共に感じることという着想は、自己と他者への関係の本質に関する支配的な仮説への対抗である。なぜなら、共に感じることは、自己と他者の明確な境界も、また自己と他者の融合や一体化によってどちらか一方が消失することも、どちらも含んでいないからである)(Gilligan & Wiggins, 1987, p.288-289)”と論じている。

この「共に感じること」という発想が、本節の最初に引用した Gendlin(1991/1995)の論文における「すべての認知が前もって存在するパターンやユニットから成り立つと想定される西洋の理論」とは異なった発想をもつ、対人的な交流における交差の概念の特徴と、その論旨が共通していることが見受けられる。さらに Kundera が提案した「共に感じること」という発想に関して、Gilligan と Wiggins は自身らの論点から以下の引用のように捉えている。

> Through co-feeling, self and other, whether equal or unequal, become connected or interdependent. (...) Conversely, co-feeling does not imply an absence of difference or an identity of feeling or failure to distinguish between self and other. Instead, co-feeling implies an awareness of oneself as capable of knowing and living the feelings of others, as able to affect others and to be affected by them (Gilligan and Wiggins, 1987, p.290).

Gilligan と Wiggins は引用のように、「共に感じること」というこの発想を、「人々が

より繋がり、相互依存的になる(become connected or interdependent)」ということに貢献するものとして捉え、またさらに「他者の感覚を共に知り、共に生きていくという能力、そして他者に対して影響を与え、他者から影響を与えられうる存在としての自身の認識」を含んでいると捉えている。

これまでの流れを整理しよう。元々、Kundera によって「同情(compassion)」のパラフレーズとして用いられたこの「共に感じること(co-feeling)」という言い回しは、Gilligan と Wiggins によって「共感(empathy)」という用語と対比的に用いられ、上記のように他者との相互影響的な関わり関する発想を提供する重要な用語として位置付けられた。さらに Gendlin はこの「共に感じること」に関する議論を自身の論文にて脚註で引用し、「新奇性」を生み出す対人的な相互作用における「交差」の特徴を提示するために援用したのだった。

ただし、Gilligan と Wiggins が「共に感じること」と対比させた「共感(empathy)」は、あくまで道徳性の発達に関する心理学における概念であった。では、心理療法領域において使用さている「共感」概念と、Gendlin が強調する対人的な相互作用における交差や「共に感じること」という発想のあいだには、どのような関係を見出せるのだろうか。

第 3 節　「交差」概念から見た「共感」概念

1. Rogers による理解としての「共感」と“as if quality”

Carl Rogers による「共感的理解(empathic understanding)」という用語は、“empathy”の形容詞“empathic”と動名詞“understanding”という語を組み合わせたものであるが、「共感的」よりも「理解」の方に重きを置く捉え方がある。例えば、岡村(2010)は共感的理解について、「理解の様式が、共感」(岡村, 2010, p.17)と強調し、共感的理解を「『内側からの』理解、『相手の立場にたった』『相手の眼差しに立った』理解」(岡村, 2010, p.17)と形容しており、小林(2010)も同様に「『共感的理解』という理解のあり方」あるいは「理解の仕方」という言い回しを用いている。この「理解の様式」や「理解のあり方、仕方」を形容する「共感的」という性質に関連しているのが、Rogers による“as if quality”という用語であろう。Rogers(1959)は、共感(empathy)を説明するなかで、以下のように論じている。

Thus it means to sense the hurt or the pleasure of another as he senses it, and to perceive the causes thereof as he perceive them, but without ever losing the recognition that it is *as if* I were hurt or pleased, etc. If this "as if" quality is lost, then the state is one of identification (Rogers, 1959, p.211).

Rogers のいう共感は「他者の苦しみや喜びをその人が感じているように感じ、その原因もその人が知覚しているように知覚すること」であり、この時点で Rogers のいう共感的理解は、先に挙げた Kundera のいう「同情」や「共に感じること」とも特徴を共有している。また、Rogers の共感的理解で重要なのは、"as if"という性質を失わないことであり、「もしこの"あたかもかのように"という性質がなくなるならば、それは同一化の状態である」と指摘されている。この一文からも、Rogers の共感的理解は、Hoffman(1976)が提示し、また Gilligan & Wiggins (1987)が"empathy implies an identity of feeling(p.289)"と批判的に指摘した、同一化に基づく共感とは異なる特徴をもっていることがわかる。"as if"という性質を伴うことで、Rogers のいう共感的理解は、同一化に基づく他者の体験の理解とは異なった特徴を有する理解であることが強調されている。

2. Freud による「共感」についての記述と「同一化」

次に取り上げるのは、Sigmund Freud による共感(empathy)についての言及である。Freud(1921/1955)は他者との同一化(identification)に関して、特に集団の指導者との同一化について論じるなかで、共感について触れている(言及は 2 箇所あり、うち 2 つは原註)。

Freud は"…we are faced by the process which psychology calls 'empathy［*Einfühlung*］' and which plays the largest part in our understanding of what is inherently foreign to our ego in other people. (私たちは心理学が「共感」と呼ぶプロセスに直面しているのであり、それは他者側にある、私たちの自我にとって本質的に馴染まないものを理解する上で最大の役割を果たす)(Freud, 1921/1955, p.108) "と論じている。またある脚註においては、"A path leads form identification by way of imitation to empathy, that is, to comprehension of the mechanism by means of which we are enabled to take up any attitude at all towards another mental life. (同一化から模倣を経て共感へと至る一本の道筋が通じている、つまりこれは、他の人の心の生活に対してあらゆる態度を取ることを可能にしているその機制についての把握のことであ

る)(p.110)”と記述している。Freud は、他者が有している、自我にとって馴染まない側面の理解(understanding)に関して「共感」という用語を取り上げるが、ここでは共感を、防衛機制における「同一化」と関連付けて論じている。これは、後に共感的理解と同一化を明確に区別する Rogers の共感的理解の発想とは対比的である。

一方で、また小林(2010)は、Rogers の共感的理解と力動的精神療法における共感の相違点の１つとして、力動的精神療法における共感には「治療者自身に共感の対象となっているクライエントの体験と、似たような体験が存在していることが必要(小林, 2010, p.88)」とされている場合があると指摘する。小林は成田(2003)の記述を例に挙げ、「つまり私にとっての共感は『あーそうだったのか』という発見があって初めて可能になるものであった。(中略)『そういう経験をしてきたのならそう感じても不思議はない』と私が感じられるには、私の中に患者と同様の、あるいは必ずしも同じでなくとも相似の(isomorphic)経験がないと、『それなら不思議はない』とは思いにくい。患者の経験と同系の(isomorphic)経験を自分の中に見出したとき、はじめて患者の気持ちがわかったと感じられる(成田, 2003, p.80-81)」という記述を、力動的精神療法における共感を特徴づけるものとして例に挙げている。

この力動的的精神療法における共感の捉え方は、前節で取り上げた Hoffman(1976)が提示していた類似の経験に基づいて可能となる他者の経験の成立という特徴と共通していることは明確である。つまり、Hoffman の「共感」と Gilligan らによる「共に感じること」という対比の図式は、Freud のいう「共感」と Rogers の「共感的理解」という対比においても、どちらも「同一化」への批判という点で、同様の図式となっているのである。それでは、この他者の体験の理解における「同一化」をめぐる対比について、Gendlin の「交差」という概念からどのように捉えることができるだろうか。

3. 理解としての「交差」とメタファーの仮想性

Gendlin の「交差(crossing)」という概念もまた、Rogers や Freud の共感をめぐる議論と同様に、「理解(understanding)」という語と関連づけて論じられることがある。例えば、Gendlin(1997b)が“Crossing is an understanding, a sense of many implications at once. (交差とは理解することであり、多くの含意が同時に伴う感覚である)(Gendlin, 1997b, p.29)”と指摘しているように、交差とは何か新たな理解がもたらされる際のその機能のことであり、またそのような言葉が新たに意味を成す際の創造的な言語運用を含むある種の手続きを指している(Gendlin, 1991/1995)。

また、この交差という状況についての創造的な言語運用が顕著に示されている例として、メタファーが挙げられる(Gendlin, 1991/1995)(第 3 章参照)。ここでいうメタファーとは、例えば「タバコは時限爆弾だ(Gendlin, 1991/1995)」というような、ある対象を別の対象に喩えて表現する言語運用のことである。Gendlin は著作*"A Process Model"*において、メタファーについて"A metaphor is eveving, focaling, a crossing(Gendlin, 1997a, p.51)"というように自身の用いる哲学的な概念と関連づけながら説明する中で、以下のように記述している。

> How one devises (and understands) a metaphor can be used here as a metaphor for this point: It was long said that a metaphor is "based on" a pre-existing similarity between two different things. In our model it is the metaphor that creates or specifies the similarity. By speaking of A as if it were B, certain aspects of A are made which were not there before as such (Gendlin, 1997a, p.52-53).

引用のように、Gendlin はメタファーをどのように作り出し、あるいは理解するのかについて、従来のメタファーの捉え方のような「前もって存在する類似性(pre-existing similarity)」に基づくとは捉えてはいない(第 3 章参照)。Gendlin 哲学の発想(プロセスモデル)では、類似性をもとにメタファーを作り出すのではなく、メタファーによって類似性が想像されるのである。続いて、「A についてあたかも B であるかのように話すことで(By speaking of A as if it were B)、それ以前にはそこに存在していなかった、A についてのある側面が作り出される」と指摘する。先の「タバコは時限爆弾だ」というメタファーの例で言えば、メタファーの作り手(または読み手)は、この "as if" という性質を伴ってタバコ(A)を「あたかも時限爆弾(B)のように」見立てることで、交差させることによって、タバコ(A)についてそれまでには理解されていなかった特徴や、時限爆弾との新たな共通点(e.g. 健康被害が出るまで潜伏期間があり、火をつけると徐々に燃えていき短くなっている、さらには吸い続けることで余命も短くなって…などの特徴)が、メタファーを作り出した後に、創造的に理解されることになる。メタファーの創造性は、Gendlin の論じるように、"A as if it were B"という理解の仕方によって、つまり「交差」によって促進されるのである。

この「あたかもかのように(as if)」というメタファーのもつ性質について、メタファーの意味が成立するための条件として、そのようなメタファーによる表現で言い表されている条件が“あくまで”メタファーであるという認識が前提とされなければならない、という指摘がある。例えば鍋島(2016)は、「あの研究者は新しい畑を耕している」という表現を例に挙げてこの問題について論じている。この表現をメタファーとして捉えれば、話題となっているその研究者は新しい研究領域やテーマに取り組んでいる、という意味となるだろうが、「『あの研究者は新しい畑を耕している』と述べた際、家庭菜園が趣味の教授が別の場所に菜園を造ったと考えればメタファーではなくなる(鍋島, 2016, p.97)」指摘されている。

このように、メタファーの理解に伴う「違うと知りつつ、違うことをいったん忘れて」という性質を鍋島はメタファーの「仮想性」と呼び、メタファー的な理解の条件の１つとして提示している(鍋島,2016, p.99)。メタファーによる理解とは、例えばタバコと時限爆弾をまったく「同一視」してしまうことではない。メタファーによって、２つの対象を仮想的に、つまり「あたかもかのように」という仕方で交差させることで、そこに対象についての新しい理解がもたらされるのである。

4. 本節のまとめ

本節では、心理療法をめぐる「共感」という主題について、まず Rogers の「共感的理解」と Freud の「共感」についての言及を対比的に確認した。Rogers のいう「共感」においては、その理解の様式としての「あたかもかのように(as if)」という性質が重視され、この性質が失われると「同一化」に陥ってしまうと指摘されていた。一方で、Freud は「共感」をまさにこの「同一化」という観点から捉えており、自我にとって馴染みのない他者の体験や生活を理解する際の防衛機制として共感というものを取り扱っていた。また、力動的精神療法では、患者の体験を共感するには、治療者側にも似たような体験が必要となると説明されている。Freud の記述から考えると、力動的精神療法における治療者の共感は同一化という防衛機制に支えられて、成立しているのである。

Freud や力動的な発想による共感はこのように、同一化や自他の体験の類似性を前提としており、Hoffman のいう「共感」概念、つまり他者の体験に類似した体験が自身にもある限りにおいて成立するという共通の特徴を有している。一歩で、Rogers の「共感」の捉え方は、あくまで“as if”という性質、つまり自他のあいだで異なった体験や感情を理解しようとするという点で、むしろ Gilligan らが用いる「共に感じること」という他

者の体験の理解の仕方と共通の発想をもっていると言える。

この「共に感じること」という用語を、Gendlin は対人的な相互作用における交差と関連づけて論じ、そこで強調されているのは、２人の人間の交流から新たに創造されるその「新奇性」であった。Gendlin はこの点から、Hoffman の議論に対して「あらゆる認識が前もって存在するパターンやユニットから成り立つ」という西洋的な多くの理論仮説に見受けられる前提を見出し、批判したのだった。

この何らかの先行するパターンに由来して認知が成立するという発想への批判に関しては、Gendlin のメタファー論においても見受けられる特徴である(Gendlin, 1991/1995, 1997a)。Gendlin はメタファー表現を、前もって存在している(pre-existing)その類似性に作られ、その意味が成立するとは捉えない。メタファーとして表現する、そのように発想することによって、新しい意味が創造されるという仕方で捉えられるのである。

メタファー表現とその理解は、A と B という２つの対象のあいだに“as if”という性質を伴うこと、つまり「あたかも A を B であるかのように」という仕方で理解することで、そこに A についての新しい側面が発見されるという創造的なプロセスであると Gendlin は指摘する。このように、「あたかもかのように(as if)」というメタファーを成立させる「仮想性」という性質によって、メタファーはその創造性を有するが、この特徴を Gendlin は「交差」という彼独自の用語でとらえているのである。ということは、“as if”という性質を伴った理解の様式であるという点で、Rogers の「共感的理解」と、Gendlin のいう対人的な相互作用における「交差」という理解の仕方、そしてその際に手がかりとなる「共に感じること」という概念は、共通の特徴を有しているのである。

このように、Gendlin の指摘する対人的な相互作用においても用いられている「交差」の概念は、自分自身とは異なる他者の体験を理解するという心理療法における営みについて考察する上で、重要な示唆を含んでいると考えられる。

第 4 節　結語

私たちが誰かに話をすることを切望するのはなぜなのか。本章の冒頭に示したこの問いについて、Gendlin の記述に依拠して答えるとすれば、「それによって、私もあなたもまだ体験していない、新しい何かがもたらされるかもしれないから」と言えるだろう。このような新しさ、新奇性をもたらす対人的な相互作用を Gendlin は「交差」という自身の独自の概念で捉えようと試みている。その内実は、「共に感じること」、つまり他者

の体験や感情を共に感じながら、さらに Kundera や Gilligan らに即して言えば、共に行きながら、新たな理解をともに創造していくことである。カウンセリングという行為やその制度が発明・開発される以前から、私たちは誰かと言葉を交わし、その誰かの反応を望むこと、そしてそのような時間をとるということを通して、それまでは気づいていなかった、自身の状況を進展させる可能性を含む新たな何かに出会ってきたはずである。

本章では、この対人的な相互作用における交差について、「共に感じること」という用語を手がかりとした理論検討を行った。対人的な相互作用における交差が実際にどのようなプロセスであり、またどのようにそれが促進されるのか、その臨床的な意義をさらに探求する上で今後必要となる実践的研究に対しても、本研究が行った概念や発想の整理は、一定の貢献をもたらすと考えられる。

註

1) 本章は、岡村心平 (2017b). 共に感じること: 対人的な相互作用における交差に関する理論的研究 *サイコロジスト:関西大学臨床心理専門職大学院紀要* 7, 29-38 を加筆修正したものである。

2) Gendlin (1991/1995)の Reference においては、ここで言及の対象となっている Gilligan and Wiggins (1987)の論文は Johnson(1987)の *The Body in the Mind* からの引用として参照されているが、原典を確認する限り、Johnson(1987)には Gilligan and Wiggins(1987)は引用や言及がなされておらず、この文献への言及に関しては、本研究において改めて調査した結果に基づくものである。

第Ⅲ部　実践編：

方法としての交差となぞかけフォーシング

第 6 章　交差概念から見たフォーカシングとなぞかけの共通点 1)

第 1 節 導入

「その“重たい雲のような感じ”は、あなたに何を伝えているだろう？」。これは、フォーカシングのセッションにおいてたびたび用いられる教示「アスキング」の典型的な応答例である。詩的な響きすらもちうるこの特徴な教示は、私たちの体験にどのような作用を及ぼすのだろうか。自分自身のフェルトセンスに問いかけるアスキングは、どのような機能をもっているのだろうか。

フォーカシングの教示や応答は、第 1 章でも記述したように、心理療法の効果研究をもとにセルフヘルプの技法として Gendlin によって考案され(Gendlin, 1981)、この方法が心理療法へと再び還元されたものが、フォーカシング指向心理療法である。また、フォーカシングは夢のワーク(Gendlin, 1986)や、創造的思考法であり質的研究へと応用されている“Thinking at the edge(TAE)”(Gendlin, 2004)、コラージュなどアートを用いたワーク(Ikemi, et al., 2007, Rappaport, 2009)など幅広く応用されており、アスキングもこれらのなかのポイントの重要なポイントの 1 つとして挙げられている(例えば池見、ラパポート、三宅(2012, p.77)など)。

このテーマについて検討する中で、フォーカシングの考案者 Gendlin の哲学や理論的な側面を参照しながら検討することを通して(岡村,2012)、フォーカシングの有するある特徴を説明する方便として、1 つの「喩え(メタファー)」に行き着いた。それは「フォーカシングとは、ある種のなぞかけである」というものである 2)。この喩えに含まれる意味を解く 1 つの鍵は、先ほど取り上げたアスキングがもつその機能にある。その前に、まずはなぞかけとはどのようなものであるかを確認しておこう。

第 2 節 なぞかけとフォーカシングの構造的な共通点

1. なぞかけの特徴：三段なぞの構造

なぞかけは、日本独自の言葉遊びの 1 つである。民俗学者の鈴木棠三によれば、なぞという言葉は、もともと「何ぞ？」という問いかけが名詞化したもので、なぞなぞ遊び時代は平安時代より存在することが知られている(鈴木,1981)。また、現在の私たちにも馴染みのある、例えば「回転寿司と掛けて、悪の支配者と解く、その心は、“裏で握っています”」というような、カケ、トキ、ココロの 3 つの部分から成り立つタイプのなぞか

けは「三段なぞ」と呼ばれ、江戸時代元禄期がその発端と言われている(鈴木, 1981)。

鈴木(1981)によれば、三段なぞは技巧的なものが多く、元禄当時は寄せ芸として一斉を風靡していた。通常は、客席からお題としてカケとなる言葉をあげてもらい、芸人が即興でトキを付け足し、間を置いてそのココロ、つまりおちを提示するというスタイルを取る。ココロがカケとトキから予想がつかないような、意外なものであるほど、そのなぞかけは秀作となる。

また、近年もなぞかけ芸ブームなどによりメディアで脚光を浴びており、なぞかけは心理臨床家のあいだでも、話題として取り上げられている(例えば、前田・北山の対談(2012), p.105)。

2. メタファーとしてのハンドル表現：状況と言葉の交差

筆者がフォーカシングをなぞかけに喩える理由は、フォーカシングのプロセスに見出される特徴的な構造が、「三段なぞ」の構造と比較することによって、より顕著になると考えるからである。ここで取り上げるその特徴的な構造とは、フォーカシングはその方法を通じて①ハンドル表現は、暗在的な意味を作り出すためにメタファー（隠喩)として機能する、②その表現を、アスキングによって創造的に明在化する、という２つの特徴からなる構造である（岡村, 2012)。ここではまず①にあたる「ハンドル表現とメタファーの関係」について取り上げる。

メタファー表現は、ある言葉と別の言葉を組み合わせることにより、新しい言葉を作り出す。例えば Gendlin(1991/1995)が挙げている、「タバコは時限爆弾だ(A cigarette is a time bomb.)(Gendlin, 1991/1995)」というメタファーの例で説明すれば、「タバコ」と「時限爆弾」という２つの言葉を組み合わせて用いることによって、双方の言葉に暗在的に含まれている感じられた意味(felt meaning)から、双方の言葉に共通する意味を巧みに際立たせることができる。メタファー表現を作ることは、そのメタファー表現に独自のニュアンスを作り出すこと、つまり「新たな感じられる意味を創造する」ことである(Gendlin, 1962/1997, p.113)

上の例では、「タバコ」の有するある特徴を「時限爆弾」に喩えているわけであるが、先に筆者が用いた「フォーカシングは、ある種のなぞかけである」という喩えにおいても同様のことが指摘できる。「フォーカシング」と「なぞかけ」という２つの言葉を組み合わせて表現することは、その喩えに独自に含まれる意味を喚起するように促す。何かを別の何かに喩えることは、メタファー表現を作ることと同様の機能をもっている。

さらに言えば、言葉と言葉の組み合わせに限らず、ある言葉をある状況のなかで使用すること自体、言葉がメタフォリカルに機能することなる(Gendlin, 1991/1995)。例えば、「梅雨明け」という気象用語を、実際の天候を指すものとしてではなく、自分自身の状況を喩えるために使用すれば(論文考案のスランプから脱したような状況に対してなど)、それはメタフォリカルな言語使用となるのである。

以上のような、言葉同士、あるいは言葉や状況のあいだの相互作用について、Gendlin は交差(crossing)という用語を用いている(第 1 章および第 3 章も参照)。あらゆる言語使用は言語と状況とのあいだの交差であり、メタフォリカルに機能しうるが、心理療法の場面では特に顕著である(Gendlin, 1991/1995)。

フォーカシングでは、簡便法(Gendlin, 1981)のステップの 3 番目「ハンドルを見つける」や 4 番目「共鳴させる」などで見られるように、状況についてのフェルトセンスに対して、それにふさわしいぴったりな「ハンドル表現」を見つけるように促す。例えば、あるフォーカサーが“重たい雲のような感じ”というハンドル表現をセッションの中で見出しているとき、フォーカサーはフェルトセンスを手がかりとして、自身がまさに生きているその状況を“重たい雲のような”という表現で喩えていると言える。ハンドル表現は、生きている状況についてのメタファーなのである[3)]。

３.アスキングの機能：ハンドル表現の意味を理解する

「タバコは時限爆弾だ」というメタファー表現には豊かな意味が含まれているが、誰かにこのメタファーの意味を尋ねられれば、このメタファー表現がもつ漠然とした意図を説明してくことができる。例えば“悪い結果が起こるまでに潜伏期間がある”という危険性や、あるいは“火をつけると徐々に短くなっていく”などの特徴をあげれば、この喩えに含まれる独自のニュアンスの巧みさはより精密になっていくだろう。

メタファー表現に含まれる、未だはっきりとは理解されていない暗在的な意味を新たに明らかにしていくはたらきを、Gendlin(1962/1997)は「把握（comprehension)」と呼ぶ(Gendlin, 1962/1997,p.117)。“comprehension”という語は「理解」や「把握」と訳すことができるが、Gendlin はこの語によって、先ほどの例示のように、あるメタファー表現に含まれている意味に関して、説明するなど明らかにすることで意味を「把握」し、あるいはその意味を明在的に「理解」するという機能のことを指す。メタファーやある喩えの用いられる意図は、その未だ漠然とした意味や共通性を、言葉にするなど明示的に「把握する」ことのよって、より精密に「理解」されるのである。

フォーカシングでは、そのフェルトセンスにぴったりなハンドル表現を見出したあと、「その“重たい雲のような感じ”はあなたに何を伝えているだろう？」というような問いかけを促すことを行う。このアスキングの応答は、ハンドル表現に対する意味の把握、つまり理解を促すように機能する。未だ漠然としている“重たい雲のような感じ”をより精密に理解するために、新たに言葉によって把握し、明在化することを促進しているのである(第 4 章参照)。

また、アスキングの教示は、フォーカサーの状況と、その状況についてのハンドル表現を意図的に交差させる機能をもっている(第 8 章)。典型的なフォーカシングの教示には、「その感じは何を伝えているだろう？」や「どうしたがっているだろう？」というような、それ自体擬人法的なメタファー利用するものも存在するが、アスキングを機能的な観点から見ると、それらは「その状況について、そのような表現が用いられることが妥当であるのはなぜか？」という、状況についての言語使用の妥当性に対する問い、あるいは「そのような状況のどこが、そのように“重たい雲のよう”なのだろうか？」というメタフォリカルな理解の促進であると捉えることができる。このようなアスキングの応答は、フォーカサーがまさに生きている状況と、その状況についての表現を交差させることで、その状況についての新たな理解を促すことである(第 8 章)。そして、状況を理解することは、その状況自体を進展(carrying forward)(Gendlin, 1991/1995)させるのである。

4. フォーカシングと三段なぞ：自分自身へのなぞかけとしてのフォーカシング

フォーカシングを特徴づける２つの機能的な構造として、前節までに①言語や状況と交差し、新しい意味を作り出すメタファーとしてのハンドル表現の機能と、②そのハンドル表現の意味について把握し、新たに理解するためのアスキングの機能について概観してきた(第 4 章も参照)。これらのフォーカシングを特徴づける２つの機能は、三段なぞと比較することでさらに明確になっていく。

三段なぞの場合では、まずカケとトキの組み合わせ(「回転寿司(カケ)」と掛けて、「影の支配者(トキ)」と解く)が提示される。このカケとトキが同時に提示されることは、修辞学上の表現の形式としてのメタファーとは異なるが、２つの言葉の組み合わせという点で、メタファーと同様の機能を有する。三段なぞの場合、カケとトキのあいだの関連は、その２つだけでは見出されないことが望ましいため、この時点では、寄席の客側にはカケとトキの関連は明らかではなく、暗在的である。観客は２つの言葉のあいだの共

通性をあれこれ連想することとなる。しかし、未だ答えは明示されない。

そのため、「その心は？」という問いかけが要請されることになる。そして、芸人によって「裏で握っている(ココロ)」という、カケとトキのあいだの関連を言葉で提示することでおかしみや納得感、笑いなど、「腑に落ちる」感覚を伴った、なぞかけの意味の「把握」が生じることになる。ココロを問うということは、そのカケとトキのあいだの新しい理解を促進させる機能を有しているのである。

ここで、喩えやなぞかけが実際に作られる過程について注目しておきたい。喩えとは一般的に、何らかの対象について知っている者が、その対象についてよく知らない者に対して、その対象を別の何かに喩えることで、対象の意味や特徴を説明し伝えるために用いられる語法である。タバコの危険性を時限爆弾に喩える者は、そのように喩える意味や意図というのを十分に知っている(よくわからない対象を別の何かに喩えることは不可能である)。同様に、芸としてのなぞかけ遊びについても、芸人はなぞかけのオチ、つまり答えであるココロをすでに思いついており、それをまだそのオチを知らない者(観客)に向けて披露することになる(お題について、まだオチを思いついていないにもかかわらず、手を挙げる芸人はいないであろう。オチがないことそれ自体がオチである場合を除いては)。

また阿刀田(2006)が明らかにしているように、芸人がなぞかけを作る場合、実際にはまずカケとなる対象(例えば「回転寿司」)のある側面(例えば「裏でアルバイトが寿司を握っている」)を先に思い描き、同じ特徴をもつ別の対象を連想する(裏で握る→「裏で権力を握る」→「影の支配者」)ことで、トキにあたる対象を見つけ出すという思考プロセスをたどるという(阿刀田, 2006, p.96)。そのため、なぞかけの作り手と観客とのあいだでは、連想のプロセスに差異があり、作り手自身がココロの斬新さに驚くということはその手順上、起こりにくい。

それに対してフォーカシングでは、フォーカサーは状況についてのハンドル表現の意味ついて、確かにそのように感じられてはいるが、未だはっきりと理解されないなかで取り組んでおり、理解されないが故にその意味をフェルトセンスに対して問いかけることとなる。つまり、通常ならば誰か他の人に対して、ある対象の説明のために用いられるメタファーや喩えの表現を、フォーカサーは自分自身のために用いることになる。そしてその喩えは、アスキングによってさらにフォーカサーの状況と交差していくことで、その意味がより精密になっていくのである。

したがって、フォーカサーがフェルトセンスのそのココロ、つまりその意味を問うことは、寄席芸でなぞかけを披露する芸人側のように即興で答えるようなことではなく、むしろそのなぞかけのココロをあれこれと連想しながら、ひらめくのを待つ観客のように、ただその到来を待つために自分の感覚に向かう時間を大切にする必要がある。Gendlin は、このような仕方でフェルトセンスと関わる時間に「浸り(dipping)」という表現を用いている(Gendlin, 1991/1995)。状況とハンドル表現との手がかりとして、そのフェルトセンスに浸っていくことと、なぞかけのココロに連想を巡らせる観客(聴き手)のプロセスは、わからないことに注意を向けるひとときを大切にするという点で共通している。フォーカシングは自分自身のフェルトセンスに向かって、あたかもなぞかけをしているかのように、その意味を探求するプロセスなのである。

第 3 節 なぞかけと創造的な推論における身体性

ここまで、フォーカシングにおけるメタファーの機能を手がかりに、フォーカシングとなぞかけのプロセスのあいだの創造的とその特徴に関する共通性について概観してきた。フォーカシングとメタファー、そしてなぞかけの関連について、ここからはさらにメタファーに関する研究において、なぞかけや、創造的な思考に関連するアナロジー推論、また推論の形式としてのアブダクションについて概観する。

1. なぞかけとメタファー

まずはなぞかけとメタファーについてである。山梨(2012)は、認知言語学の立場から日常言語の認知プロセスについて論じるなかで、謎解きのような言葉遊びとメタファーとの共通点に注目する。例えば「君の瞳は宝石だ」というメタファー表現を例に Richards(1936/1964)のメタファーを構成する 3 つの要素である「趣意」「媒体」「根拠」の関係から見ると、「君の瞳」が話題のテーマであり喩えられている趣意、「宝石」が喩えたものである「媒体」、そしてこのメタファーの意味となり、通常はほのめかされている「美しく輝いている」が「根拠」に対応する。この構造をそのまま三段なぞに対応させると、「君の瞳(趣意)と掛けて、宝石と解く(媒体)、その心は、美しく輝いています(根拠)」となり（山梨, 2012, p.152)、メタファーとなぞかけは同じストラテジーから認知プロセスを捉えることができる。

また中村(2007)は、比喩表現の「面白さ(interestingness)」を感じるメカニズムを検討する心理学的な実験において、なぞかけへと着目しており、メタファーとなぞかけと

メタファーの構造的な類似性について言及している。中村は「りんごは名医だ」というメタファーを例に挙げ、通常のメタファー表現では、認知操作によって得られるメタファーの「根拠」にあたる部分(この場合は「病気を治す」)が明示されておらず、そのメタファーの面白さが感じられた場合でもその要因が特定しづらいことから、同様の構造をもち、なおかつ２つの対象のあいだの関連の「根拠」が示されているなぞかけの形式に着目し、実験の呈示刺激として用いている。メタファーとなぞかけには、根拠となるココロの位置づけに違いはあるものの、「趣意」「媒体」「根拠」という３つの要素から捉えられるという点で共通していることがわかる。

また、このようなメタファーとなぞかけの関連の応用として、井上(2017)は経営学の分野において両者の関連を指摘している。井上は新しい発想を得るためのヒントとしてメタファーに着目し、メタファーとして何かを別の何かに喩えるというストラテジーをより身近な例として「なぞかけ」を用いて説明している。起業やマーケティング分析においても、喩えを用いた新しい発想を得るためのストラテジーとして、メタファーやなぞかけがもつ認知プロセスの特徴について言及されている。

2. なぞかけとメタファー、アナロジーとの関係

メタファー理解の認知プロセスに関しては、アナロジー(analogy)による推論や思考も取り上げられる。アナロジーによる思考は、ある事柄をそれと類似する何か別の事柄に結びつけて推論する思考のことである(子安,1980)。また、その類似性にもとづいて知識を広げる思考がアナロジーであり、かつ「アナロジーを言語に結びつけるものがメタファー」である(楠見, 2001)。つまり、何らかの対象についての類似性にもとづく認知プロセスの思考面をアナロジー、言語表出面をメタファーなどと区分されることがある。後に詳述するように、アナロジーは問題解決や新しい知識の習得などの場面において顕著であり(Gentner, 1983; Holyoak &Thagard, 1995)、例えば、心臓の機能をポンプに類比させたり、電気について学ぶ際に水流と対応させたりするとき、アナロジーによる知識領域の拡張が行われている。

アナロジーによる推論を支える類似性は、表面的類似性、構造的類似性、関係的類似性などいくつかの推論のタイプによって挙げられている(Holyoak & Thagard, 1995)。例えば心臓とポンプは見かけは全く異なるが、液体を送り出すという機構的な構造としては類似している。このような構造的類似性によって、ある対象に別の対象のもつ特徴を「対応づけ(mapping)」させて、同型的な構造や関係を見いだすことが、アナロジーによ

る推論の特徴である(Gentner, 1983)。このような対応づけによる知識の対応づけは、「君の瞳は宝石だ」というような、メタファーの理解における認知プロセスにおいても、同様に「対応づけ(mapping)」として指摘されている(Lakoff, 1993)。

一方で、アナロジーによる推論とメタファーの理解における相違も指摘されている。例えば、羽野(2007)の指摘のように、メタファー表現はその言語構造上、喩えられる「趣意」(君の瞳)と喩えたものである「媒体」(宝石)は、入れ替えると意味が異なってしまう(第 4 章も参照)。(「宝石は君の瞳だ」というメタファー表現の根拠は不明瞭となる)。一方でアナロジーでは、例えば「心臓」と「ポンプ」のあいだの類似性は明確であるが、喩える対象と喩えられる対象の関係は流動的であり、あるいは人間の脳をコンピューターのアナロジーで捉えてきた認知科学領域において、コンピューターを脳に見立てるということも可能となる。このような喩えられるものと喩えるものの流動性の違いは、メタファーとアナロジーの相違の 1 つである。

このようにメタファーとなぞかけにはアナロジーには差異が認められるものの、先の井上(2011)の経営学におけるメタファーやなぞかけの着想への注目のように、問題解決や新たな知識領域の拡張をもたらす推論形式としてのアナロジーもまた、新しい発想や問題解決のためのストラテジーをもたらす思考方法として知られている。細谷(2011)は企画構想やビジネス場面での応用ためにアナロジーにもとづく思考方法を検討するなかで、「なぞかけ」の思考様式に着目し、なぞかけを「『簡単に気づかない共通点を探す』という点においてアナロジー思考の一種(細谷, 2011, p.109)」と捉えている。また、なぞかけの認知プロセスをアナロジーの視点から分析し、なぞかけ遊びを高度なアナロジー思考のための基礎トレーニングとして応用している (細谷, 2011)。

メタファーとアナロジー、なぞかけを比較した場合、メタファーとなぞかけには、類似性の「根拠」の明示をめぐる相違があり、メタファーとアナロジーに関しては、先のように喩えるものと喩えられるものの流動性という意味での相違がある。

また、アナロジーとなぞかけの関連については、そのなぞかけのココロに当たる部分、類似性が何に由来するのかによって関連の仕方が異なってくる。多くのなぞかけ芸では、例えば「野球初心者と掛けて、色鉛筆と解く、そのココロは“からふる(空振る/colorful)”でしょう」というように、音の類似性、つまり「駄洒落」によってカケとトキの関連を示すものであり、これはアナロジーとは異なる。一方で、細谷(2011)の指摘するように、なぞかけの表現形式に則ったかたちで、実際にアナロジーによる知識領域の対応づけが

行われるためには、駄洒落ではなく「構造的類似性」にもとづく必要がある(細谷, 2011, p.111)。２つの対象における表面的ではなく、構造的な特徴を捉えない限り、アナロジーによる推論という創造的な特徴をもつなぞかけとはならないのである。

3. なぞかけとアブダクションとの関係

メタファーやアナロジー、そしてなぞかけのような、新しい発想をもたらす認知プロセスに関連する思考方法として、「アブダクション(abduction)」が挙げられる。アブダクションはアメリカの論理学者で科学者の Charles Sanders Peirce によって提唱されたもので、「仮設形成法」「仮説的推論」「発想法」などの訳語もあり、仮説を形成する創造的な思考方法を指す。一般に、論理形式には「演繹(deduction)」と「帰納(induction)」が知られているが、三段論法に代表される普遍的な原理から個別的な事実を導き出す分析的推論である「演繹」と、個々の事例からそれらに共通する普遍的な原理や法則を導き出す拡張的推論である「帰納」という２種類の推論方法に加えて、Peirce はこのアブダクションという、発見的で創造的推測の飛躍を含む推論方法を加えているという(米盛, 2007)。

アブダクションによる推論形式について、米盛(2007)は Pierce による図式「驚くべき事実 C が観察される、しかしもし H が真であれば、C は当然の事柄であろう、よって H が真実と考えるべき理由がある」という推論過程を紹介し、Pierce 自身の例をいくつか挙げている(米盛, 2007, p.54)。例えばその１つは「化石が発見される。それはたとえば魚の化石のようなもので、しかも陸地のずっと内側で見つかったとしよう。この現象を説明するために、我々はこの地帯の陸地はかつて海だったに違いないと考える。これも一つの仮説である」というものである。つまり、「魚の化石が内陸で発見される」という驚くべき事実 C について、その事実を説明するために提案された「かつてここは海だったが地殻変動で隆起し陸となった」という説明仮説 H によって、納得のいく説明または理由がもたらされる。

このようなアブダクティヴな推論が採択される基準の１つとして、Pierce は「もっともらしさ(plausibility)」を挙げている。Peirce はこの「もっともらしさ」にもとづくアブダクティヴな洞察力の根底に、自然に適応するために人間に本来備わっている自然的能力としての推論能力を有する」という事実をその根拠として置いている。つまり、このようなアブダクションによる推論がもたらす創造的な知見のもっともらしさは、人間に「正しく推論する自然的本能」が備わっていることに由来すると Peirce は捉えている(米

盛, 2007, p.73)。

村川(2012)はこのようなアブダクションに関する Peirce の記述をもとに、「アブダクションにおいては、身体感覚に根ざした直感的推論のプロセスが重視される」と指摘している。アブダクティヴな推論には、伝統的な形式論理的には後件肯定の誤謬と指摘しうるような跳躍的な推論が含まれているが、そのような跳躍的かつ創造的な推論は、人間が本来的にもつ「もっともらしさ」という感覚的な直観を拠りどころとしながら遂行される。その後さらに帰納的推論によってこのような思考はさらに裏付けられていくとしても、非論理的で跳躍的な思考として排除されがちなこのアブダクティヴな推論が、実際に人類の知的な営みを牽引してきたのである。

4. 創造的な推論における身体性

アブダクションは発見的、創造的な推論による思考形式であるが、アブダクションはこれまでにメタファーやアナロジーともその創造的な側面に関連して指摘されている(細谷, 2011 など)。ある対象を別の何かに試しに見立ててみることで、異なる知識領域を対応づけて新しい理解を得るというアナロジーによる推論の特徴は、確かに仮説的な推論であるアブダクションと共通している。

村川(2012)はこうした発見的なアブダクションを含む推論を進めるために必要な言語運用として、メタファーに注目している。村川(2012)は、Lakoff & Johnson(1980)の認知意味論を発端とするメタファー研究が捉えている、「感性」や「身体性」を重視した言語研究や認知プロセスの研究に着目している。例えば、深田・仲本(2008)は「言葉は、環境との相互作用による身体的経験を背景として発達してきた記号系の一種であり、行きた文脈の中で柔軟に用いられている(p.263)」と記述しており、このような環境と相互作用する身体的経験に基づく創造的な推論について、以下のように論じている。

> 我々には、具体的な経験を通して獲得した知見をもとに、新規な経験や直接的には把握できない抽象的な概念を柔軟に理解していく想像力がある。この想像力の一部は、ある経験と別の経験とのあいだに積極的に類似性を見出し、前者の知識に基づいて後者を理解して行くという認知プロセスを基盤としている。この認知プロセスはメタファー(metaphor)と呼ばれる(深田・仲本, 2008, p.129)。

このように、人間が本来的にもっているある種の想像力(の一部)を駆使して、異なる対

象や経験のあいだに類似性を見出しながら新たな知見を獲得していくプロセスを、ここではメタファーと呼ぶ。このようなプロセスは、領域間の対応づけによって知識を拡張していくアナロジーや、ある事象に対してその「もっともらしさ」を手がかりとして説明仮説を創造的に推論していくアブダクティヴな思考方法とも関連している。

村川(2012)は、これらの創造的な思考方法が、環境と相互作用している身体性に根ざしており、「アブダクションとしての洞察と推論によって見いだされる体験を身体感覚に根ざしたメタファーとして言葉で表現していくこと、それが経験の理解に結びつく可能性を秘めた記述になる」と指摘している。これまで見てきたように、メタファー、アナロジー、そしてアブダクションは新しい知見を生み出すための創造的な推論を含んでいるが、村川の指摘のように、そのような創造的側面は我々の身体性に由来すると捉えることができる。

なぞかけを創造的な思考法として用いる場合、その際の推論過程は、メタフォリカルであり、アナロジカルであり、アブダクティヴであるという特徴を有する。そしてこれらの特徴が共有する創造的な側面は、身体的経験に根ざした言語運用によってもたらされると考えられる。

先に本章では、なぞかけとフォーカシング・プロセスの共通点に関して、メタファーを手がかりに指摘したが、フォーカシングとはまさに、このような身体性に根ざした認知プロセスである。なぞかけを用いたアナロジカルでアブダクティヴな思考様式よる創造的な推論について、身体感覚に根ざしたメタファー表現を用いるフォーカシングの要素を組み入れることで、村川(2012)の指摘するさらなる「経験の理解」のための言語運用の方法を考案することができるのではないかと考えられる。

その際の手がかりとして、Gendlin の「交差」概念は、身体感覚に根ざしたかたちでなぞかけを用いた創造的な推論プロセスについて考察する上で、重要であると考えられる。特に、先に指摘したアナロジーによる推論プロセスにおいて用いられる「対応づけ(mapping)」と、Gendlin における「交差」はいかなる関連があるのだろうか。この２つを比較することは、創造的な推論プロセスに関する身体性や、フォーカシングとなぞかけの関連をさらに検討していくことに寄与すると考えられる。

第４節　「対応づけ」概念と「交差」概念の比較検討

「対応づけ(mapping)」と「交差(crossing)」は、共にメタファーに関連して論じられ

る概念である。対応づけは、「写像」「マッピング」などとも訳出されているが、Lakoff (1987,1993)や Johnson(1987, 1997)などの認知言語学におけるメタファー論でも用いられる概念であるが、元々は Gentner によってアナロジー研究に導入された経緯をもつ (Gentner, 1983)。交差は、Gendlin が、従来のメタファー論を修正しさらに発展させようと試みた Gendlin 自身のメタファー論(Gendlin, 1991/1995)を特徴づける概念である。

1. アナロジーにおける対応づけの概念

(1) アナロジーにおける対応づけ

アナロジー(analogy)やアナロジー推論(analogical reasoning,)は、「類推」「類比的推論」などとも訳出される。日常語としての類推は根拠のない推論を指すが、認知言語学におけるアナロジーは「知っている事柄をよく知らない事柄に当てはめて推論を行うこと」(鈴木, 1996, p.13)と定義される。楠見(2001)はアナロジーという思考過程に対応する言語表現の側面をメタファーと捉えており、アナロジーとメタファーは思考過程と言語表出の表裏一体の関係であると記述する。たとえば「あの娘はバラだ」というメタファーは、“ある女性”の特徴を“バラ”の特徴に当てはめて理解しようとするアナロジー思考に支えられて、その意味を成す。

アナロジーに関して、構造写像理論(Structure-Mapping Theory: Gentner, 1983)、多重制約理論(Multiconstraint Theory: Holyoak & Thagard, 1995)、準抽象化理論(鈴木,1996)など複数のモデル化がなされているが、多くは Gentner(1983)の提唱した理論から展開されている。この理論では、アナロジー対象としたい未知の問題や状況を「ターゲットドメイン(target domain)」(ターゲット)と呼び、既知の対象や状況を「ソースドメイン(source domain)」(ソース)呼ぶ。そして、ソースからターゲットへの知識の転用を「対応づけ(mapping)」を呼び、「写像」や「マッピング」とも訳出されている。

Gentner(1983)が示した電流と水流のあいだの対応づけを検討してみたい。電流について学ぶ際に水流に関する知識を転用すると、学習の対象である電流がターゲット、水流がソースとなり、対応づけによって水流に関する知識の様々な側面が、電流を理解するために対応づけられる。例えば水の通るパイプは電線に、水圧は電圧に対応づけられる。そのとき「電線が太くなれば、流れる電流は増えるのか」という問題について、「パイプが太くなれば通る水量が増えるのだから、電線が太くなれば電流も増えるはずだ」というように、水流と電流のあいだの「類似性(similarity)」から推論を行うことがアナロジーである。

このようなアナロジーを用いる際、ソースとなる対象をいかに想起するかが最も難しい点となる(Holland, et al. 1986)。先の例なら、ターゲットの電流に対して、いかに水流という対象をベースにするというアイデアを発想できるかがアナロジーの鍵となる。

(2) ２つの状況のあいだにおける対応づけ

アナロジーは未知の対象に関する学習場面で顕著に見られ、学習理論の観点から捉え、この観点は Thorndike による認知研究の時代までさかのぼることができる(白水, 2012)。Thagard(1996)は、対応づけを２つの状況間で起こる学習の「転移(transference)」と捉えており、アナロジーの対象となる事柄や問題、その対象に関する知識や特徴は、すべてある状況の側面を指し示すため、本研究でこれまで用いてきた「事柄」「問題」「特徴」「対象」「知識」などの用語はすべて「状況」と同義であると指摘する。Thagard のいうように、アナロジーは２つの状況のあいだで生じるプロセスと捉えることができる。

(3) アナロジーにおけるスロットとフィラー

アナロジーでは、ソースの特徴をターゲットへと対応づけることで、ターゲットの未知の側面を新たに捉えようとする。例えば「水圧」が急激に下がった場合、水流(ソース)ではパイプのどこかから「水漏れ」が起こっていることが懸念される。このとき、電流(ターゲット)との対応づけによって「水圧/電圧:水漏れ/ ？」というターゲットの電流に対して「？」の入る未知の側面が際立つことになる。

この「？」を「スロット(slot)」と呼び、スロットを埋める新たな知識を「フィラー(filler)」と呼ぶ(Holyoak & Thagard, 1995)。アナロジーでは、対応づけによってターゲットにおけるスロットを際立たせ、そこに当てはまるフィラーを要求しスロットを埋めようとすることで(電流の例では「漏電」)、創造的で発見的な思考過程を促進している。

２. Gendlin のメタファー論における交差

(1) 言葉の使用群と現在の状況の交差

交差は、メタファーをはじめあらゆる言葉の使用において生じうる、言葉と状況のあいだの創造的な関係性を指す概念である(第 1 章参照)。Gendlin (1991/1995)は Wittgenstein による言葉の意味の「家族的類似性(family resemblance)」を援用し、ある状況における言葉の使用がもたらす意味の類似性を「言葉の使用群(use-family)」と呼ぶ(Gendlin, 1991/1995)。一方、ある状況は別の状況を暗在的に含意しており、状況のもつ複雑さはその状況と相互作用する身体の感覚として直接的に感じられる。この状況についての漠然とした意味感覚がフェルトセンスである(Gendlin, 1991/1995)。

交差とは、フェルトセンスによって言葉の使用群と現在の状況の相互作用することにより、言葉が意味を成し、その意味の理解が成されることである。多くの使用群を伴うある言葉が現在の状況とのあいだで交差しうるのは「その言葉の使い方を知っているというフェルトセンスによって果たされる言語機能」(Gendlin,1991/1995)のためである。

ある言葉が現在の状況で使用されることで、その言葉は独自の意味を成す(Gendlin, 1991/1995)。例えば、この「意味を成す(make sense)」の「成す(make)」という言葉は、多くの使用群を含み、辞書を引けば多くの用法が散見されるが、筆者が現在の状況で「成す」という言葉を使うことで、この「成す」という言葉はこの文脈に独自の意味をもちうる。

さらに、ある言葉をその言葉に含まれる使用群以外の状況で使用することで、その言葉の新しい使い方、つまり新しい意味が創造される(Gendlin, 1991/1995)。すべての言語は、別の状況で使用される可能性を含んでいるが、Gendlin (1991/1995)によれば、言語のもつこのような創造的な側面に着目した研究領域は、メタファーという特殊例の研究のみであったという。

(2) 従来のメタファー論に対する Gendlin の修正点

Gendlin (1991/1995)は交差の概念を元に、従来のメタファーに関していくつかの修正点を挙げている。Gendlin 自身の用いている「あの娘はバラだ」を例に概説する(第 4 章も参照)。まずは、メタファーにおける状況の捉え方の相違である。先述のように従来のメタファー論では、メタファーは今の状況(主題：あの娘)と古い状況(喩辞：バラ)との 2 つの状況間の転移と捉えていたが、実際には古い状況と呼ばれていたものは言葉の使用群である。「あの娘はバラだ」の例で言えば、「あの娘はバラだ」というメタファーの主題である“あの娘”が話題になっている現在の状況において、喩辞として“バラ”という多くの使用群を伴う言葉が実際に使用され、現在の状況と言葉の使用群の交差することでこの「あの娘はバラだ」というメタファーは意味を成すと捉えることができる。

次に、メタファーの共通性(commonality)は後から作られる、という指摘である。従来のメタファー論では“あの娘”と“バラ”には元々共通性が存在し(例: 可憐で美しい)、それがメタファーの意味を決定づけるとされていた。しかし、Gendlin (1991/1995)によれば、「あの娘はバラだ」というメタファーの意味は、このメタファーが作られた後で“あの娘”と“バラ”のあいだの共通性が見出されることで意味を成すと捉える必要があるという。

また、メタファーの意味、つまり“あの娘”と“バラ”の共通性は１つに限られず、さらに次々と見出しうるという指摘もなされている。“あの娘”と“バラ”のあいだには、際限の無い共通性の連鎖(an endless chain of commonalities)が生み出される（例：トゲのような危うさがある、美しさには時間の限りある、など)(Gendlin, 1991/1995)。また、ある共通性のパターンとして捉えられたものも、そのパターンとは異なった働きをする。例えば“あの娘”には適用されづらいような、バラの“根を張る”というパターンであっても「あの娘は“根を張るように”立っている」のように、その共通性が見出されるように機能しうる。

(3) Gendlin のメタファー論とスロット

あるセンテンスにおいて、その中のある言葉を別の言葉に言い換えても意味が成立する場合がある。先述の「あの娘が“根を張るように”立っている」というセンテンスであれば、“根を張るように”の箇所で別の言葉を、例えば“地面を踏みしめるように”や“地下の水を吸い上げるように”（もし、その娘がその土地の文化に浸りながら暮らしているのであれば)という言葉を使用することもでき(Gendlin, 1991/1995)、それぞれ独自の意味を成しうる。また、このように多くの言葉を連ねた後であれば、例えば「あの娘は“....”ように立っている」のような空白箇所を含むセンテンスであっても、何らかの意味を成すことができる(第１章参照)。この空白箇所を Gendlin (1991/1995)は「スロット(slot)」や「ブランク(blank)」と呼び、「スロットが空白のときですら、そのスロットは何かを語りうるのだから、スロットはある言葉がその中で語りうることに貢献している」と記述する。

この「スロットを伴った交差(crossing with the slot)」(Gendlin, 1991/1995)によって、スロットに入る言葉はより精密な言葉の使用を獲得でき、あるいはより精密な意味をもつ次なる言葉を呼び込むために機能する。このスロットは交差と同様に、Gendlin のメタファー論やその言語観を特徴づけている概念だと言える。

3. 対応づけと交差の比較

Johnson (1997)は対応づけの概念を含む認知言語学の立場から Gendlin (1991/1995)のメタファー論に対する同意と反論を示しており、また Gendlin (1997c)もそれに応答するなかで、同意や再批判をもって議論を展開させている。これらの議論を元に、従来のメタファー論、Johnson のメタファー論、Gendlin のメタファー論における各用語の対応を以下にまとめながら、対応づけと交差の共通点や相違点について、２つのトピック

を挙げる。

(1) ソース/ターゲットの対応づけと、交差における言葉の使用群/状況との関係

ジョンソンの認知言語学における対応づけでは、未知のターゲットについて推論を行うために、ソースの知識を転用する(Johnson, 1997)。「あの娘はバラだ」の例で考えると、ターゲットである“あの娘”について理解するためにソースとなる“バラ”についての知識(美しい、トゲがある、水を吸い上げるなど)を転用する。つまり、バラに関する知識やこれまでの経験が、ターゲットとなる“あの娘”の理解に活かされることになる。

一方、交差の概念は現在の状況と言葉の使用群との関係性を扱う。“あの娘”について述べる状況で、その状況におけるフェルトセンスから“バラ”という言葉を使用するとき、“バラ”という言葉の使用群とその状況が相互作用することで、「あの娘はバラだ」というメタファーが意味を成すと説明される。

Johnson (1997)が同意するように、対応づけにおけるソースは、交差における言葉の使用群に対応し、対応づけと交差は“あの娘”と“バラ”のような2つの事柄が関わるという点で共通するように見える。しかし Gendlin (1997c)は、対応づけに関する理論において、ソースからターゲットへと知識を転用する際、ソースの知識しか用いられないと捉えるならば、メタファーの理解やアナロジーによる思考は成り立たないと指摘し、「言葉が現在の状況によって決定づけられる新しい意味を獲得しなければ、ソースからターゲットへの推論は私たちを欺くだろう(Gendlin, 1997c, p.173)」と述べる。

対応づけの概念では、ソースの既存の知識をターゲットへと転用することで、妥当な推論が成され、新しい知識が獲得されると説明される。一方、交差の概念では、メタファーに含まれる妥当な相互関係は「その言葉が状況の中で新しい意味を作り出す際のメタファーによって生み出される。(中略)その推論が妥当なのは、ターゲットとなる状況で精密な新しい意味が生み出されるからである(Gendlin, 1997c, p.174)」と説明される。

新しい知識の獲得を、対応づけではソースからターゲットへという言わば一方向的な転用と捉えているのに対して、交差では状況(ターゲット)の中で、ある言葉(ソース)が実際に使用され、言葉と状況が相互作用することによって新しい意味が生み出されると捉えるという点で、両者には相違が見られる。

(2) 対応づけと交差におけるスロットの機能

対応づけにおけるスロットは、ソースの既存の知識をターゲットへと転用することでターゲットに生じる空白のことであった。この空白が生じることが、そこに当てはまる

新たな知識であるフィラーが要求され、創造的で発見的な思考過程の動因となる。つまり、対応づけにおけるスロットは、ターゲットに対する「知識の空白」を意味し、フィラーを推論する際に際立つように機能する。このスロットの捉え方は、新たな知見の創出をソースにおける既存の知識に由来すると考える対応づけの理論的枠組が反映されている。

一方、交差におけるスロットは、センテンスの中で言葉が意味を成すように機能する箇所を指し、そのスロットが空白であっても「何かを語りうる」ものであった。言葉が不在であっても、そのスロット自体が状況についての意味を示し、さらなる言葉を引き出すために機能する、状況についての有意味な言葉の不在だと捉えられる。この捉え方は、言葉の意味がフェルトセンスによる状況と言葉の相互作用からもたらされると考える Gendlin のメタファー論に依拠している。

対応づけと交差におけるスロットは、どちらも創造性に関する用語ではあるが、両者の理論的背景の相違から、異なった仕方でその機能が説明されていることがわかる。Gentner (1983)などによるアナロジーについての理論では、対応づけを可能にする適切なソースがどのように選出されるかについては十分な説明が成されておらず、ソースとターゲットのあいだには元々何らかの類似性があったとしか想定され得ないだろう。一方で、フォーカシングにおいて、フェルトセンスを手がかりに導き出される状況についての新しい理解は、「ターゲットとなる状況における精密な新しい意味から生成される(Gendlin, 1997c, p.174)」と捉えられる。Gendlin がたびたび指摘するように(第 1 章参照)、詩人による試作やフォーカシング実践、心理療法実践、において見られるスロット(“...”)は、状況についての有意味な空白であり、その状況について新しい理解をもたらす動因として機能するのである。

第 5 節　結語：なぞかけを用いたフォーカシング実践の可能性

ここまで、フォーカシングとなぞかけのあいだの共通性と、なぞかけとメタファーやアナロジー、アブダクションなど、創造的な推論における身体性について確認し、さらにはメタファーやアナロジーの理解における対応づけの概念と、Gendlin の交差概念について比較検討を行った。フォーカシングのプロセスには、フォーカサーが状況とそのメタファーとして機能するハンドル表現を交差させ、なぞかけに見られるような「その心」の意味の探求を行うという共通点があった。

またなぞかけには、メタファーやアナロジー、アブダクションに見られるような創造的な推論と同じはたらきをもたらす構造を有するという共通点があり、これらをめぐる身体性の議論について概観した。そしてメタファーやアナロジーにおいて特徴的な対応づけの概念と、Gendlin の概念には共通点があるが、Gendlin の交差概念やその発想を支える彼の言語論は、直接的に感じられる身体感覚の重要性に注目し、身体性をより重視していると言える。

以上の議論から、状況についてのメタファー表現を手がかりに状況についての意味を探求するフォーカシングは、言わば「フェルトセンスの機能をより自覚的に用いた一種のアナロジー過程」とも捉えることができるだろう。ホリオークらは「いいアナロジーは理解されるだけでなく、感じられるものである(Holyoak & Thagard, 1995, p.78)」と述べているが、確かに、新たな知見が到来する際「腑に落ちる」という開放的な身体感覚を伴う理解がしばしば認められる。このような事象を、フォーカシングではフェルトシフトと呼び(Gendlin, 1981)、これは秀逸ななぞかけのココロが到来した際にも生じうる。

村川(2012)が「アブダクションとしての洞察と推論によって見いだされる体験を身体感覚に根ざしたメタファーとして言葉で表現していくこと、それが経験の理解に結びつく可能性を秘めた記述になる」と論じていることは先に指摘したが、このような過程はまさにフォーカシングのプロセスで重要視されていることである。そしてこれはまた、なぞかけにおいても同じ構造が見受けられたのであった。

このことから実際に、アナロジカルに、アブダクティヴに仮説を考えてみるならば、なぞかけの構造を用いてフォーカシングのプロセスを実施すれば、身体性を重視した創造的な推論をより際立って行うことが可能となる、という推論をすることが可能ではないだろうか。この仮説を検討するために、実際になぞかけの言い回しを用いてフォーカシングを実施した場合、どのようなプロセスとなり、それはいかなる特徴をもっているのかを検証する必要があると考えられる。

註

1) 本章は、岡村心平(2013b).なぞかけフォーカシングの試み−状況と表現が交差する「その心」− *サイコロジスト:関西大学臨床心理専門職大学院紀要 3*, 1-10 における前半部(p.2-5)をもとに、大幅に加筆修正したものである。

[2] 加藤(2010)は Gendlin の交差の機能の機能についてなぞかけを例示としながら、その類似点について言及している。一方、このような交差概念となぞかけの類似的な観点から、フォーカシングのステップやそのプロセスそのものへと言及している文献や記述は、調べた限り岡村(2012)以前には見受けられなかった。

[3] 修辞学において、メタファー(metaphor)は通常「隠喩」や「暗喩」などと漢訳され、“～のような”という言い回しを用いない比喩表現のことをいう(例､「彼はオオカミだ」)。一方で､「彼はオオカミのようだ」という表現はシミリー(simile)と呼ばれ､「直喩」と漢訳される(佐藤,1992)。修辞学上の分類では、両者は区別されるが、Gendlin のメタファーに関する論述においては、シミリーもメタファーと同様の機能を有すると捉えられるため、(Gendlin, 1962/1997, p.114)、フォーカサーが「重たい雲“のような”感じ」と直喩で表現した場合であっても、メタファーとして捉えることができる。

第 7 章　なぞかけフォーカシング簡便法の考案とセッションの実際 1)

第 1 節　導入

前章(第 6 章)で論じたように、なぞかけ(三段なぞ)とフォーカシング・プロセスのあいだには、２つの機能的な構造に共通性が見出された。１つは、状況についてのハンドル表現におけるメタファーの機能であり、もう１つはハンドル表現について問いかけるアスキングの機能である(第 4 章も参照)。これらの機能は、Gendlin の交差の概念によって捉えることが可能であり、なぞかけにはアナロジーやアブダクションなど、創造的な思考を促す構造を有している。

つまり、なぞかけの言い回しを用いることで、フォーカシングの創造的な側面、特に交差の機能を際立たせることができると考えられる。特に、なぞかけの「A と掛けて、B と解く、その心は…」という問いかけが、先に挙げたフォーカシングの２つの機能や交差の特徴をさらに意図的に強調することができると推測される。

そこで本章では、なぞかけの言い回しを用いたフォーカシングのステップ「なぞかけフォーカシング簡便法」の考案を試みる。まず、以下でその具体的な方法を提示し、Gendlin(1981)のフォーカシング簡便法との比較をしながら、なぞかけフォーカシング簡便法の特徴を明確にする。次に、そのステップを用いた実際のセッション記録を提示し、なぞかけフォーカシングのプロセスの特徴について考察する。

第 2 節　なぞかけフォーカシング簡便法：ステップの提示

Gendlin(1981)のフォーカシング簡便法を参照しながら、「なぞかけフォーカシング簡便法」を考案した(岡村,2013a, 2013b)。具体的な手続きと実施上のポイントについて提示する。なお、Gendlin(1981)のフォーカシング簡便法については、ステップ１のクリアリング・ア・スペース(Clearing a space: CAS)を独自のステップとして捉えた例も数多く報告されている(池見, 1997 など)。ここで取り上げるなぞかけフォーカシング簡便法は、フォーカシングにおけるハンドル表現(ステップ 2、3、4)とアスキング(ステップ 5)の機能を強調するというその性質上、フォーカシングの簡便法のステップ２以降を中心に構成されている。

「なぞかけフォーカシング簡便法」は、なぞかけについてのインストラクションと、４つのステップによって構成される。以下のようなステップを参照しながら進めていく

ことができる(岡村,2013a, 2013b を参照)。以下では、ペアワークを想定した簡便法を紹介するが、この方法を用いて１人でなぞかけフォーカシングのセルフワークを実施することも可能である。

【導入】なぞかけについての説明と共有

まず、なぞかけの作り方やその後の手順について、フォーカサーと共有しておく。うまいなぞかけを作る必要も、急いで作る必要も、必ずオチをつける必要もないないことを先に伝えておく。リスナー側の意図やワークを通して促していくプロセスの意図を事前に伝えておくことは、それ自体、話し手が自身のプロセスに集中するための手助けとなる。

なぞかけ遊びのなかには、ダジャレのような音の類似性によるもの(例えば「色鉛筆と掛けて、野球初心者と解く、その心は“カラフル(空振る)でしょう”」)もあるが、なぞかけフォーカシングでは、その人にとって感じられる意味の類似性をよりいっそう大切にする(例えば、「“重たい雲のような感じ”と掛けて、“このうまくいかない状況”と解く、その心は“遠出はしないほうがいい”“雨に控えて休みましょう”あるいは“次の晴れ間は逃すまい”など」)。

【ステップ１】今の状況を思い浮かべる

フォーカシングの導入の仕方にはさまざまなパターンが想定できるが、ここで提示するなぞかけフォーカシング簡便法では、自分自身の状況からセッションを始める。「今の状況や日々の生活を思い描いてみると、どのようなことが浮かんでくるでしょうか」というように、フォーカサー自身の状況について振り返ってもらう[2)]。

このとき、典型的なフォーカシングの進め方と同様に、その状況や出来事についての内容や中身は言葉にする必要はない。ただ、内容は言わずに、例えば「落ち着かない状況」や「込み入った状況」というように、その状況を一言程度で言い表す言葉をつけてもらうと、リスナーもフォーカサーの状況を共有しやすくなるだろう[3)]。

【ステップ２】フェルトセンスについてのハンドル表現や喩えを見つける

このステップは、Gendlin(1981)の簡便法におけるステップ 2～4 と同様のねらいを含む手続きである。状況についてのフェルトセンスに注意を向け、それにぴったりなハンドル表現(言葉やイメージなど)、あるいは喩えを探していく。「そのような状況を思い浮かべていると、どんな感じがするでしょうか。そのフェルトセンスにぴったりなハンドル表現を探しましょう」や「それを何かに喩えるとしたら、どんな感じでしょう」とい

うように教示する。続けて、何かぴったりな言葉や表現が見つかったら、その表現がフェルトセンスを言い表すのにぴったりかどうかを確かめるように促す。

【ステップ３】なぞかけアスキングを試してみる

ステップ３では、ステップ１で思い浮かべられた状況と、ステップ 2 で述べられたハンドル表現を、謎かけの言い回しを用いて交差させ、フェルトセンスに問いかける。「ここでなぞかけをしてみましょうか。“○○(ハンドル表現)”と掛けて、“そのような△△な状況”と解く、その心は…と言ってみるとどのようなことが浮かんでくるでしょうか」というように、なぞかけアスキングを試してみる[4)]。

このとき、「その心は！」というニュアンスで答えを急かすような一方的な質問の仕方はせず、リスナー自身もなぞかけに取り組みながら、問いを共有するように応答することが求められる。フォーカサーに“その心”が浮かばなければ、もう一度ステップ１や２に戻ることも可能であり、またリスナー側に浮かんだ“心”、つまり連想を試しに伝えてみることがフォーカサーのプロセスを促進することもあるため、フォーカサーにそれを紹介することも有効である。

【ステップ４】浮かんできた「その心」を吟味する

フォーカサーに何か思いついたことがあったら、それを丁寧に検討し吟味していく。思い浮かんだはじめはその意味がよくわからなくとも、“その心”についてリスナーとともにさらに言葉にし、連想を進めていくことで、その意味がより精密になっていくこともある。

フォーカサーが十分にそのプロセスを吟味することができたら、そこでセッションを終えることもできるし、さらに次のラウンド(新しい知見についての再試行)を行うこともできる。この点も、通常のフォーカシングと共通している。

なお、なぞかけフォーカシングは手続き的にも理論的にも、通常の典型的なフォーカシングと共通の構造を有しているため、いつでも通常のフォーカシング簡便法へとシフトしてプロセスを進めることができる。例えば、フォーカサーにとって強すぎるイメージや感情が出てきた場合には、クリアリング・ア・スペースを行うこともできるし、ハンドル表現をもつける段階でアートを用いることも可能である。反対に、通常のフォーカシング・セッションの進め方を行なっているなかで、アスキングのバリエーションの１つとして、なぞかけアスキングを用いることも可能である。

第３節　なぞかけフォーカシングの実際：セッション例の紹介

なぞかけフォーカシング簡便法を用いた実践例を紹介する。このセッションは単発で行われたものであり、IC レコーダーの録音から逐語記録を作成した。その概要を以下に示す。セッションの概要には、簡便法の各手順を見出しとして挿入しているが、実際のセッションは手順ごとの切れ目なく進行して行った。

＜セッションの概要＞

大学院生の A さん(20 代女性)がフォーカサー、筆者がリスナーを務めたセッションである。本人の許可を得てその概要を示す。まずはなぞかけのやり方やセッションの進め方などの説明を簡単に行った後、セッションに移った。所要時間は約 20 分で、その後セッションについての振り返りを行っている。

【ステップ１】

筆者が A さんに、今の状況や日々の生活について思い浮かべるように促したところ、A さんには「いろんな人にお世話になって生きている」という状況が思い浮かんだという。「以前はつながりを作らなきゃって、必死になっていた」、人と「つながれていないような気がしていたけれど、つながれているなぁ」と述べた。

【ステップ２】

A さんが、そのような人と「つながっている」ような状況について、からだではどのように感じているかを確かめてみると、「やさしいというか、ふわふわした感じ」や、それに「くるまれている感じ」があり、「守られている」という表現がぴったりであった。

【ステップ３】

筆者はそこで、なぞかけアスキングを試すことを提案し、「“ふわふわにくるまって、守られている”と掛けまして、今の“人と繋がっている状況”と解きます。その心は…と言ったら、何が出てくるだろう？」と問いかけた。約 30 秒の沈黙の後、A さんは「糸とか、なんか、蚕のまゆとか出てきた」とイメージを語った。

【ステップ４】

そこで、A さんと筆者はしばらくのあいだ、出てきたこの「糸」や「蚕のまゆ」のイメージを吟味していった。そこには「蚕のまゆが糸になって、つむいで、わーっていく感じ」や「生まれていくとか、出てくるイメージ」があった。筆者はその「糸」のイメージに興味をもって、どんな糸か尋ねたところ、それは「一本だけ、細いけどぴゅーっと出ている」という。A さんにはそれが「私の人とのつきあい方の下手さ」のようにも

思えたが、まだその意味はよくわからなかったという。

【２ラウンドめ：ステップ２】

ここから、２ラウンドめのセッションへと移行した。「そのような糸のイメージを思い浮かべると、今はどんな感じがするだろう？」と、もう一度ステップ２に立ち戻った。A さんは、「なんかこの辺が、なんか、何だろう…なんか、悪くない感じ」と述べる。さらにそこには「あったかい感じ」や「生まれる！っていう感じ」もあると述べ、笑いもこぼれた。他にも「育てる」という言葉も連想されたが、筆者がどのような言葉がその感じを言い表すのにぴったりかを試すように促すと、「育てるというよりは、あったかさを主語にするとおかしいんですけど…なんか“つむぐ”っていうのが、やっぱり今は一番しっくりとくる」という。

【２ラウンドめ：ステップ３】

ここで、再びなぞかけアスキングを試し、「“つむぐ”と掛けまして、“今の A さんの状況”と解きます、その心は…」と問いかけを行った。約 15 秒の沈黙の後、「地味だけど、楽しい」という言葉が出てきた。「絶対に何かが、生まれてくるというのが、楽しい」。

【２ラウンドめ：ステップ４】

もう一度、A さんがなぞかけアスキングから思いついた「地味だけど、楽しい」という“その心”について吟味していく。筆者がそこから「編み物」を連想したことを伝えると、また A さんに笑いが起こった。A さんは「地味」っていう響きがとても気に入り、今の状況が「地味でいいんだなぁと思う」と述べ、そこには「すごいすっきりした感じ」が伴っているという。しばらくその感じを味わった後、セッションを終えた。

第 4 節　考察

1. 交差と浸り：セッションから見るなぞかけフォーカシングの構造

なぞかけフォーカシングでは、ステップ１で「状況」について思い浮かべ、ステップ２ではその状況についてのからだの感じに関する「ハンドル表現」を見つけ、ステップ３ではそれら「ハンドル表現」と「状況」についてなぞかけのアスキングを用いて問いかける。つまり、「ハンドル表現」をカケ、「状況」をトキとして組み合わせて、そのココロを問うことによって、「ハンドル表現」と「状況」を交差させる(crossing)のである(Gendlin, 1991/1995)。

カケとトキの組み合わせは、前章でも記述したように、メタファーと同様の機能をも

つ。メタファーとして２つの言葉を組み合わせることで、メタファー表現に独自の意味を喚起させることができるのである(Gendlin, 1962/1997)。また例えば、「タバコは時限爆弾である」というメタファーの暗在的かつ多義的な意味は、その意味を問うことによって初めて明示的に理解できるのであった(Gendlin, 1991/1995)。

先のセッション例から言えば、ステップ３でなぞかけアスキングを行う前は、フォーカサーの今の状況について、なぜ“つむぐ”という表現がふさわしいのかは、フォーカサー自身にもまだわからなかった。しかしその意味は、漠然とではあるが、たしかにからだで感じられている。ステップ３で「その心は…」と問いかけ、そのフェルトセンスへと浸る(dipping)ことで(Gendlin, 1991/1995)、今の“人とつながっている”「状況」と“つむぐ”という「表現」のあいだの関連に暗在的に含まれている意味を明示化させ、状況についての理解がさらに進展するように促しているのである。

このような状況と言葉の交差、そしてアスキングによるフェルトセンスへの浸りは、典型的なフォーカシングでも機能的には生じていると考えられる。なぞかけフォーカシングは、カケ・トキ・ココロという三段なぞの構造を用いることによって、フォーカシングのプロセスに暗在的に含まれていた交差と浸りという２つの特徴を意図的に促進させるというねらいを有しているのである。

2. 「その心は…？」という応答の意義

アスキングには、本書の冒頭で取り上げた「その“重たい雲のような感じ”は、あなたに何を伝えているんだろう？」という言い回しをはじめ、「そのことのどこが“重たい雲のよう”なんだろう？」や「その“重たい雲”は、何を必要としているんだろう？」という多くの言い回しがあり、それらいくつかの応答のバリエーションを自由に試していくことができる。先に論じたように、これらのようなアスキングの教示には、「状況」と「ハンドル表現」を交差させることを促す機能を有していると捉えることができる。

アスキングの応答のなかでも、Gendlin 自身がたびたび用いている“What’s the crux of that?”(Gendlin, 1981, p.120) あるいは“What’s the crux of it?”という言い回しは、これまでそのニュアンスを保ったまま翻訳することが難しいと言われてきた(池見・ラパポート・三宅, 2012, p.77)。このアスキングの訳としては、「そのことの肝心なことは？」なども提案されるが、池見(私信)によれば、なぞかけの「その心は？」という言い回しが、“What’s the crux of that?” という教示の訳として最もふさわしいという。

この応答の“that”や“it”とは、ハンドル表現によって指し示されているフェルトセンス

であり、またそのように感じられている状況のことである。つまり、この応答では、その状況の“crux(核心)”にあたるものや本質、その心を問うているのであり、機能的に見ても、双方の構造は共通していると言える。なぞかけフォーカシングでは、“the crux of that?”は「状況」と「ハンドル表現」の交差によって生じる双方の暗在的な意味の関連を指し示し、その未だはっきりとしない状況についての理解を促進するように機能する。よって、「その心は…」という問いかけは、フォーカシングにおけるアスキングの言い回しのバリエーションの１つとして用いることができるのである。

3. 問いかける時間：“フォーカシングはなぞかけである”

繰り返し指摘している通り、なぞかけフォーカシングは、フォーカサーに感じられている「状況」と、その状況についての「ハンドル表現」をカケとトキとして交差させ、そのココロを問うことによって、フェルトセンスに浸っていくことを重視する。通常、なぞかけはすでに“そのココロ”、つまりネタのオチを思いついてから、言わば合の手として修辞的に「その心は…」という表現を挟む。なぞかけフォーカシングではこれとは異なり、フォーカサーにとってまだよくわからない「そのココロ」について探求していくプロセスである。このようなプロセスに関して、Gendlin はフォーカシング実践に関する２つの主著において、以下のように言及している。

> If you spent time sensing something unclear that is right there, meaningful, about this problem, and you don’t know that it is then you are focusing (Gendlin, 1981, p.68).

> If you can spend a little bit of time with this directly felt sense while not yet knowing what it is, you are focusing (Gendlin, 1996, p.74).

このように、まだ意味ははっきりとはわからないが、確かに漠然と感じられている感覚と共にいる時間を過ごすことが、まさにフォーカシングであると Gendlin は強調している。そして興味深いことに、フォーカシングの本質を言い表しているとも考えられる以上の２つの引用文は、どちらの著作においても「アスキング」の説明を行う箇所において記載されているのである。つまりアスキングは、フォーカシングを理解するための鍵だと言えよう。よって、アスキングの機能についての検討をもとに考案されたこのな

ぞかけフォーカシングは、このようなフォーカシングの本質的な特徴を色濃く反映していると考えられる。

それ故に、「フォーカシングとは、ある種のなぞかけである」と言うことができる。まだよくわからない私たちの状況とハンドル表現との交差によって、「その心は？」となぞかけをしながら、そのフェルトセンスに浸っているとき、私たちはフォーカシングをしている。なぞかけフォーカシングとは非常にフォーカシング的な特徴を有するプロセスなのである。

第 5 節　結語

民俗学者の柳田國男によれば、日本においてなぞなぞやなぞかけなどの言葉遊びは、一般にはもともと冬の炉ばたやこたつのそばなどで親しまれ、世代を超えて伝わってきた遊びであったという(柳田, 1976)。そのような場所では、お年寄りが子どもたちに対して、そしてそれを兄姉が弟妹たちに対して、なぞなぞやなぞかけを出題しながら相手をし、楽しみながら共に時間を過ごしていた。

近代的な学校制度が整備させる以前の時代の子どもたちにとっては、このような言葉遊びが文芸や国語への興味の萌芽となり、言葉を使うことの「けいこ(稽古)」としての役割を担っていたのである(柳田, 1976, p.14)。

フォーカシング簡便法も、もともとは心理療法を効果的に利用することが難しい人々へ、フォーカシングのエッセンスを教えるために技法化されたものであり、教育的な「型」として考案された経緯をもつ。池見(1997)が提案しているリスナーの役割としての「体験過程教師」というあり方が物語っているように、フォーカシングには心理療法的応答や傾聴のための「稽古」としての着想が含まれている。

なぞかけフォーカシングも同様に、そのような心理療法的な応答のための「稽古」としての役割を担うことができると考えられる。それはまるで、こたつを囲んで皆に親しまれてきた言葉遊びのように、手軽に楽しみながらゆっくりとした時間とともに取り組むことのできる傾聴の稽古である。

なぞかけフォーカシング簡便法を、アスキングの応答の仕方を身につけ、その機能をさらにより深く理解するために利用することができるだろう。さらに実践例を集積しながら、なぞかけフォーカシングという「型」自体をさらに修練させていく必要があるだろう。

その一方で、なぞかけアスキングは方法的にも機能的にも、典型的なアスキングの応答と同じ構造を有しており、心理療法的なプロセスを促進するための応答としても役立つと想定される。心理療法の文脈におけるその機能を十全に把握しておくためにも、臨床的な観点を含む実践的かつ理論的な検討が要請されるだろう。

註

1) 本章は、岡村心平(2013b). なぞかけフォーカシングの試み−状況と表現が交差する「その心」− *サイコロジスト:関西大学臨床心理専門職大学院紀要 3*, 1-10 の後半部(p.5-10)を加筆修正したものである。

2) ここで用いている「状況」とは、問題や気がかり全体、あるいはある人間関係や出来事、事柄など、フォーカサーが“生きている中で関わりうるものすべて”を指すことができる。よって、ステップ３でなぞかけアスキングを行う際も、「そのような“人間関係”と解く」や「そのような“気がかり”と解く」というように、そのセッションごとに言い換えることが可能である。

3) 「なぞかけフォーカシング簡便法を用いたあるセッションの振り返りのなかで、オブザーバーからステップ１の「状況を思い描く」こととステップ２「ハンドル表現」との違いがわかりづらく、どのようになぞかけを作ればいいかわからない、という指摘があった。この点には多くの重要な示唆があり、フォーカシングについて理解する上で非常に有益な指摘である。状況についての説明する言語運用においては、状況の理解を進展される言葉とはなり得ない。状況の理解を進展させるように機能するのは、フェルトセンスと相互作用する表現としての言葉である。

4) なぞかけアスキングのなかのトキにあたる「“そのような状況”と解く」という言い回しは、註 2 でも述べた通り、フォーカサー自身の「状況」すべてを指し示している。よって、例えば「“今の自分”と解く」と言い換えても、構造上は同様であるはずである。しかし、あるセッションの振り返りの際、試行的に「今の自分」という表現で謎かけアスキングを試してみたらどのように感じるかを尋ねたところ、「ネガティヴな発想が生じやすい」との報告があったことを付記しておく。この点については、体験的距離(Gendlin, 1968)の観点からも捉えられると考えられる。「状況」という言葉を用いた場合は、あたかもフォーカサーが自身の身の回りを見渡すような適切な距離が連想されやすいが、「自

分」という言葉では、そのような適切な距離感が生じにくくなりやすいと解釈できる。

第 8 章　人間性心理学における創造性と交差の機能:セッション例からの検討 1)

第 1 節 導入

人間性心理学の研究において、創造性(creativity)は主要なテーマの 1 つである。人間性心理学の成立に中心的な役割を果たした Abraham H. Maslow は、著作 *Toward a Psychology of being* において、創造性を以下の 2 つに区別している(Maslow,1968)。すなわち、歴史に名を残す発明や芸術作品を生み出した偉人たちが有するような「特別な才能の創造性(special talent creativeness)」と、すべての人に内在する「自己実現の創造性(self-actualizing creativeness)」である。前者は科学や芸術など、特定の専門的な分野における偉業を通して捉えられる創造性であり、後者はより広義の創造性で、自己実現へと向かう人なら誰しもがもちうる創造性を指す。例えば Maslow(1968)は、終日を家事に追われているある人物を後者の例に挙げ、彼女が日々行っている料理や育児、家具の選び方などがあまりに素晴らしく、それは創造的と言わざる得ないほどであり、このことを「一流のスープは二流の絵画よりも創造的である(Maslow, 1968, p.136)」という表現で記述している。このように Maslow は芸術表現などに限らず、日常生活のなかでも十分に創造性が発揮されると指摘している。

Maslow(1968)はまた、この「自己実現の創造性」の特徴をよく表現している言葉として、Carl. Rogers の著書 *On Becoming a Person* における「体験に開かれていること(openness to experience)」を挙げている(Maslow, 1961, pp.137-138)。Rogers(1961)のこの著書に収録されている論文“Toward a Theory of Creativity”では、創造的に行為にもっとも親密な関係をもつ個人の内的な状況である「建設的な創造性のための内的条件(the inner conditions of constructive creativity)」として、以下の 3 つの特徴が挙げられている(Rogers, 1961, pp.353-335)。この 1 番目に挙げられているものが、Maslow の指摘した「体験に開かれていること」であり、2 番目は「評価基準が内部にあること(an internal locus of evaluation)」、3 番目は「要素や概念と遊ぶ能力(the ability to toy with elements and concepts)」である。

また Rogers は、心理療法と創造性に関して「創造性の主な原動力は、我々が非常によく発見する心理療法における治療的な力と同じ傾向性であると思われる(Rogers, 1961, p.350)」と指摘し、心理療法と創造性に共通するこの傾向を「人間が自分自身を実現し、自分の潜在性になろうとする傾向(Rogers, 1961, p.351)」と表現している。このように、

Maslow (1968)によって言及されている、日常生活において発揮されうる自己実現の創造性は、Rogers(1961)にとっての心理療法の原動力とも接する共通の傾向を有しているのである。

創造性への関心は、フォーカシングを考案した Eugene T. Gendlin も共有している。三村(2015)が、Gendlin による哲学者 Wilhelm Dilthey への言及に触れながら「ディルタイから、理解がもつ創造性という観点を学び、同じ論点を異なった仕方で語る(ジェンドリンの)方法が、創造的なものと特徴づけられるようになった(三村, 2105, p.13)」と論じているように、Gendlin は初期の業績(Gendlin, 1962/1997)から、最晩年の論文(2009a, 2009b)に至るまで、一貫して創造性に着目し、議論を発展させてきた。また Gendlin はセルフヘルプ技法としてのフォーカシング(Gendlin, 1981)の成立契機となった概念であるフォーカシング的能力について、創造性との関連を指摘している(Gendlin, et al., 1968)。また実際に、フォーカシングを創造活動へ、例えばクリエイティヴライティング(Perl, 2004)やアイデアの創出(読書猿, 2017)へと応用する取り組みも報告され、実践されている。

しかし、Gendlin の着目する創造性はフォーカシングや心理療法場面に限定されず、創造性に関する哲学的な関心の対象を、例えば「パーティの準備中にトマトソースを焦がしてしまった窮地をどうやり過ごすか(Gendlin, 2009a)」というような日常的な場面にまで広げている。Gendlin が「我々が現に有している思考は、常に体験過程を要求する。思考とは実のところ、シンボルと体験過程の機能的関係である(Gendlin, 1962/1997, p.11)」と記述しているように、心理療法場面から日常生活場面にいたるあらゆる思考には、すでにシンボルが関与している。このシンボルとは、言葉だけでなく、イメージ、事物、行動、状況や出来事、対人的な相互作用など、非常に多くものを含んでいる。「それ〔体験過程〕に注意を向けることでさえ、シンボル化のプロセスなのである(Gendlin, 1962, p.10,亀甲括弧内は筆者による補足)」と Gendlin が指摘するように、心理療法でのやりとりや、日常生活での出来事に注意を向けること、何かを思考することなどを含む、あらゆる体験や思考は、シンボルと体験過程との相互作用である。

一方で、Gendlin はこういったシンボル化のプロセスによって発揮される創造性を、誰しもが学ぶことのできる能力として捉え、実際に教えられる手順として、フォーカシング簡便法(Gendlin, 1981)や、フォーカシングを創造的思考法へと応用した TAE(thinking at the Edge)という方法(Gendlin, 2004, 2009b)を提案している。これら

の方法は、フェルトセンスを言い表すのにふさわしい言葉やフレーズを見つけるという言語運用によって実践されている。このような言語運用の仕方を考慮することは、Gendlin の注目する創造性の特徴を考える上で、さらにその心理療法的な実践の応用を考える上で不可欠であろう。

人間性心理学領域において注目され続けてきた、心理療法から日常生活のさまざまな場面でも発揮される創造性とは、具体的にどのように発揮されるのだろうか。本章では、Gendlin の交差の機能を生かした実践方法であるなぞかけフォーカシングのセッション記録を参照しながら、交差概念のもつ創造性に関して、人間性心理学における文脈でのその位置づけを踏まえた上でさらに検討していく。

交差は哲学的な概念である一方で、実践的な手続きとしても用いられる(Gendlin, 1991, 1991/1995, 2009b; 岡村, 2015)。また、交差という言語運用によって思考するという事態は、フォーカシングのセッション中においても見受けられ、またフォーカシングの手続きを通してフォーカサーに習得されるだけでなく、日常生活のさまざまな場面でも起こりうる、より講義の創造的な営みへと拡張していく可能性がある。このようなより広い射程を有する創造性に関する問題について、交差によってどのように創造性が発揮されるのか、セッション記録からその特徴について考察を試みる。

第 2 節 交差の創造性 :「掛け合わせる」という思考方法

1. 交差の創造的な機能

交差は、言葉と現在の状況とのあいだに生じる創造的な相互作用であり、「精巧に関連する有機的なプロセス(a finely relevant organic process)(Gendlin, 1986, p.150)」と説明される(第 1 章も参照)。例えば、ある状況を「梅雨が明けた」という表現で(字義通りの気象現象としての梅雨明けでなく、何らかのメタファーとして)理解されたとしよう。その際、単にその状況の特徴を、そのような表現で描写しただけでなく、それ以上のことが起こっている。「梅雨が明けた」という言葉は、その状況に暗に含まれている多くの特徴、側面や要素と交差し、「それまでの鬱積した雰囲気」や「状況の変化への待ち遠しさ」、「新しい展開を迎えた清々しさ」など、状況に対して含まれている複雑な意味が、梅雨明けに喩えられることによって後から創造的に理解される。交差はメタファーの理解において顕著に機能するが、通常の言語運用においても生じ、「新たな状況におけるすべての言語使用はメタフォリカルである(Gendlin, 2009b, p.150)」とも主張される。あ

る言葉が意味を成すこと自体が、言葉と状況が交差する創造的な行為であり、日常的な言語運用事態にすでに創造性が発揮されていると考えられる。

さらに Gendlin は交差に関して、「何であれ正確に理解することは、ひとつの交差である。例えば、ある新たな発言は、我々がすでに知っている非常に多くの他のものと暗在的に交差しなくてはならない(Gendlin, 1997d, p.397)」と指摘する。状況を言い表すある言葉が意味を成すということは、その言葉で状況を理解できるということである。言葉の意味自体は多義的であり、その言葉についての先行知識や置かれた文脈によって大きく影響を受けるが、ある状況には「すでに交差された複雑さ(already-crossed multiplicity)(Gendlin, 1997d, p.30)」が含まれていると Gendlin が記述するように、実際には状況自体にすでに多くのものが交差されているため、その言葉は実際に確かに意味を成すのである。「梅雨が明けた」と表現しうるその状況は、そのように表現されるより以前に、すでに交差された複雑さを有している。

2. 交差とフェルトセンス

交差のもたらす新たな理解は、暗在的な身体感覚によって導き出される。Gendlin はこの感覚を「フェルトセンス(felt sense)」と呼び、交差とは「その言葉の使い方を知っているというフェルトセンスによって果たされる言語機能(Gendlin, 1991/1995)」であると記述する。ある状況に対して「梅雨明け」と呼ぶにふさわしい雰囲気が理解されるという先の例で言えば、「梅雨明け」という言葉からもたらされる独自のニュアンスもまた、身体的に感じられている。

Gendlin が著作 *A Process Model* において「我々はあらゆる言葉を別の事物に用いることができるが、それらは交差しうるときにだけ交差する(Gendlin, 1997a, p.53)」と記述するように、交差が可能となるのは、交差によってその言葉がその状況で意味を成すときだけである。つまり、その言葉がその状況を言い表すのにふさわしいかどうかは、その言葉とその状況を交差させるその人のフェルトセンスが知っている。言葉と状況の交差は、言葉を交差させるその人のフェルトセンスによって可能となるのである。

また、Gendlin が「身体感覚とは、その人の身体に暗在的な状況である(Gendlin, 1991, p.82)」と指摘するように、フェルトセンスは外的な環境についての知覚の集合体としての身体ではなく、状況と相互作用する有機的なプロセスとしての暗在的な身体において、直接的に感じられる感覚である。フェルトセンスは、その場の雰囲気やある発言に伴うニュアンスと同様、あえて意図的に注意を向けて身体を感じようとしなくてもすでに感

じられる場合もある。どちらの場合であっても、フェルトセンスから実際に新たな理解が導き出されるとき、創造的に意味が体験される。その際、状況についての新たな理解に伴って身体的に感じられる変化のことを、フェルトシフト(felt shift)と呼ばれているものである（Gendlin, 1981)。

3.「掛け合わせる」という思考方法

言葉が新たな理解の創造に役立つのは、それらが状況のより多くの側面や要素とすでに交差しているからであった。一方で、ある言葉を状況と意図的に交差させること、つまり交差を「方法(method)」として用いることもできる。Gendlin は交差の実例として「あなたの怒りは、イスとどのように似ているだろうか？(How is your anger like the chair?)」という問いかけを挙げている。この問いかけは、怒りとイスという２つの事柄を意図的に交差させることで、両者の共通点を探りながら、例えば「重く居座っている」「投げつけたい」というようなその「怒り」についての新たな理解を導き出すようにはたらく。交差によって、イスと意図的に比較する以前には思いつかなかった、怒りについてのさまざまな側面が、新たに創造されるのである。

ところで“cross”という動詞には、「交差させる」という訳語が適切となるような意味、例えば道を「横切る」や２つの直線が「交わる」というような、「２つの対象が空間内で重なり合う」という意味があるが、それだけではない。Gendlin 自身が指摘しているように(Gendlin, 1991, 1997d)、“cross”という単語には「交配させる」「交雑させる」と訳出できるような「異なる種類の動植物を掛け合わせることで、ハイブリットな新種を創り出す」という意味も含まれている。

Gendlin の用いる新たな理解を創造するという意味での“cross”では、この「掛け合わせる」というニュアンスの方がその語義を的確に言い表すことができると考えられる。Gendlin は時に“cross with”という句動詞を“apply to”という句動詞と同義で用い(Gendlin, 1991, p.99)、またこれら２つの表現をブレンドした“cross-applying”という造語を使用している(Gendlin, 1991, p.77)。先述の怒りとイスの交差の例で言えば、怒りについての理解のために、イスというモチーフを「適用(apply to)」するだけでなく、怒りとイスを「掛け合わせる(cross-applying)」ことで、新たな理解を生み出そうと試みているわけである。このような、Gendlin の交差概念における２つの対象を意図的に掛け合わせるというニュアンスを重視するために、本章の以下の議論では、このような場合の“crossing”や“cross-applying”という表現を、適宜「掛け合わせる」と訳出して論じて

いくこととする(第 1 章も参照)。

4. 能動態としての交差と受動態としての交差

先述のように、「方法」としての交差は、状況と言葉を「掛け合わせる」ことで新たな理解を生み出す創造的な思考方法であるが、このような思考方法が可能なのは、我々の生きている状況が「すでに交差している複雑さ(already-crossed multiplicity)」を有しているからに他ならない。Gendlin による「この意図的な掛け合わせ(this deliberate cross-applying)は、状況が交差される最初の仕方なのではない。多くの状況はいかなる状況においてもすでに交差している(already crossed)(Gendlin, 1991, p.142)」という指摘から明らかなように、「掛け合わせる(cross-applying)」と能動態で表現される意図的な方法としての交差は、「すでに交差している(already crossed)」と受動態で表現される状況の複雑さによって支えられている。例えば、有性生殖により生まれる多くの生物個体が、その親世代の 2 つの個体が交雑することで生まれるため、すべての個体は「混血種」であると言えるように、「すでに交差している」という受動的な交差は、遡及的に「親を作り出す(creating parents)(Gendlin, 1997d, p.397) 」というような創造的な機能を有している。受動的な意味での交差がすでに生じているからこそ、能動的に「掛け合わせる」という意図的な交差を方法として用いることが可能になるのである。

Gendlin が意図的で能動的である「掛け合わせる」思考方法としての交差と、日常的な言語運用においてすでに生じている受動的な交差を、同様に“cross”という言葉で論じていることには注意が必要である。例えば、TAE ではステップ 8 において、検討している対象の諸側面を「交差させる(crossing)」という段階(Gendlin, 2009b)があるが、このステップ 8 における交差は、意図的に「掛け合わせる」という方法としての交差であると言える。しかし、状況にすでに生じている受動的な交差は、言葉が意味を成すことの前提となっているため、TAE の他のすべてのステップにおいて、この受動的な交差は生じていると説明されうる。

能動的な方法としての「掛け合わせ」が可能なのは、状況においてより多くのものが「すでに交差している」という受動的な交差に支えられているからに他ならない。そして、我々のフェルトセンスもまた、すでに多くのものが受動的に交差されているからこそ、その複雑さから新たな理解が導き出される。それ故に、フェルトセンスは「掛け合わせる」という思考方法において、新たな理解を生み出す創造性の源となりうるのである。

第 3 節 「掛け合わせる」思考方法の実際：交差となぞかけ

1.「掛け合わせる」思考方法となぞかけフォーカシングの創造性

フォーカシング実践における交差の例、特に意図的な「掛け合わせ」の具体例はいくつか報告されている。交差の概念はもともと Gendlin による夢へのフォーカシング的な取り組み(Gendlin, 1986)に由来するが、森川(2010)は、痛みや痒みなどの身体症状への取り組みについて Gendlin 哲学の観点から考察する際に、交差の概念に触れている。森川は、先述の怒りとイスの交差(Gendlin, 1986)の例を引きながら、「このように交差とは、通常の想定を超えて何かと何かをオーバーラップさせ、意味を見出す過程である(森川, 2010)」と記述している。オーバーラップ(overlap)とは、画像や映像、転じてイメージや記憶などが重なり合うことを意味する語であるが、身体症状から呼び起こされる連想と状況を交差させ、オーバーラップさせることで、新しい意味を見出す過程に着目されている。

森川が指摘するこの過程は、Gendlin が「掛け合わせる」という仕方で強調している、状況についての新たな理解を想像する意図的な方法としての交差と同様であると言ってよい。このように、新たな理解を生み出すフォーカシング的な過程には、フェルトセンスを手がかりとして言葉やイメージと状況を「掛け合わせる」という、ある種の体験的手続き(Gendlin, 1962/1997)の特徴が見て取れる。本章ではこれを、より広義の「思考方法」という表現を用いて論じていく。

交差の概念をもとに考案されたフォーカシング実践のひとつに、なぞかけフォーカシング(岡村,2013)がある(第 6、7 章参照)。「A と掛けて B と解く、その心は C/C'」というなぞかけの問いかけは、話し手自身の状況と、その状況についてのハンドル表現とを交差させる機能をもつような、フォーカシングにおいて典型的な「そのことのどこが、そのように○○のようなんだろう？」という問いかけと共通の構造を有しており(岡村, 2013)、「(ハンドル表現)と掛けて、そのような状況と解く、その心は…」という問いかけによって、状況についての新たな理解を促進させる方法としてのステップが考案されている。さらに「A と掛けて B と解く」という言い回しは、直接的に A と B を交差させること、つまり「掛け合わせる」思考様式を促すように機能する。つまり、なぞかけの言い回しを用いた問いかけは、従来のフォーカシングの問いかけと共通の特徴を有しながらも、従来の問いかけに含まれていた交差の創造性を、より意図的に際立たせるように

機能するのである。なお、Gendlin(1981)による簡便法のステップ２～４までの手順は、岡村(2013)の提案している４つのステップの２番目である「フェルトセンスを感じ、それにぴったりなハンドル表現を探す」というステップに集約されており、従来の「共鳴させる」という手順が、ハンドル表現がフェルトセンスを精密に言い表しているかどうかを確かめ、そうでなければよりふさわしい表現を見つけることを促す補完的なステップとして捉えられていることがわかる(第 7 章を参照)。

また岡村(2016b)が、「言葉遊びは、それ自体が創造的な営みであり、かつそのような創造性を育むことを伝えるための機能を有している」と指摘している通り、なぞかけのような言葉遊びは、もともと創造的な特徴がある。そして、ある対象 A を別の対象 B に喩えるメタファーは、「A と掛けて B と解く」というなぞかけの言い回しと同じ構造を有しており、メタファーとなぞかけはともに、そこから A と B の共通点(C/C'...)を見出そうとする創造的な営みである点で共通している(第 6 章参照)。なぞかけの言い回しによって見出される共通点は、Gendlin(1991/1995)が記述するように、はじめからすでに存在しているものが後から気づかれるのではなく、共通点は後から創造されるのである。A と B を掛け合わせることで見出される共通点は、A と B に関して創造された新たな理解の仕方に他ならない。このように、なぞかけフォーカシングは、通常の論理的な思考方法とは異なる仕方で、つまりその思考となる体験や状況を別の何かと意図的に掛け合わせることで、その体験や状況についての新たな理解に取り組むという創造的な思考方法である。次のセクションでは、なぞかけフォーカシングのセッション記録を提示し、「掛け合わせる」思考方法が、実際にどのようなプロセスをたどるのかを示す。

2.セッションの詳細

以下に示していくのは、有志により開催されたフォーカシングのワークショップにおいて、大学院生の B さん(20 代男性)が話し手、筆者が聴き手を務めた約 15 分間のセッション記録である。B さん本人の許可を得てその概要を示す。セッションの概要は、録音から書き起こした逐語記録からまとめられたものである。途中には岡村(2013)によるなぞかけフォーカシングのステップが挿入されているが、実際のセッションは応答を通して切れ目なく進行している。鉤括弧(「」)は話し手、山括弧(＜＞)は聴き手の発言である。B さんは以前にもなぞかけフォーカシングの説明を行ったことがあるため、ステップの導入部分は省略された。

聴き手が＜最近どうですか？＞と尋ねると、B さんは少し間をとって日常を振り返っ

てから、担当ケースや趣味のスポーツ、実習など、最近 B さんの取り組んでいることが「流れていくように、すすすーっと行っている感じ」がすると述べた(ステップ１)。オノマトペ？その「流れているような感じ」についてさらに詳細を確かめていくと、「これまでは自分が何かしないとと思い、自分から動いていた」が、最近はいろんな物事が「勝手に進んで行っている」ように思えるという。

そのような、B さん自身の最近の日常に関する感じについて、さらにぴったりな表現を促すと(ステップ２)、いくつか思いついたイメージを試しながら「それに乗っかっているって言ったらあれですけど、なんか綱渡りでもないですけど、何がいいやろうなぁ…スケボー？に乗っているような」と述べた。B さんはスケボー(スケートボード)に乗って遊んだ経験はないが、「グラグラしながら」スケボーに乗っているというイメージが、その感じを言い表すために最もふさわしいようであった。

聴き手はここで、なぞかけを用いた問いかけを導入することを提案し、＜『スケボーに乗っている』と掛けて、『今の状況』と解く、その心は…？＞と尋ねた(ステップ 3)。B さんは数秒間考えた後、「うーん、上達かなぁ」と述べる。これに続いて、B さんがなぞかけの心としてひとまず述べた「上達」というという言葉をめぐって、聞き手とともにさらに吟味していった(ステップ 4)。B さんは「自分の今の状況はこう、スケボーのように、すーっと自分が思ったよりも進んでいく」ものなので、「これまでのように力みすぎているとコケてしまう」。そのため「その乗り方っていうのを、上達していく必要がある」という。

吟味を続けていくなかで、聴き手は B さんに＜上達するための“一番のコツ”は何なんだろう？＞と問いかけた。B さんは 10 秒近く沈黙してから、それは「無理に動かそうとしない。自分の主導になってあんまり動かそうとしない」だと述べる。その後、B さんが「だから、まずはまっすぐに進むためにこの自分の姿勢に、慣れるっていう…」と述べ、聴き手が＜自分の姿勢に…＞と伝え返すと、B さんは「そうそうそう、姿勢が大事なんですよ！」と声が大きくなり、笑い出した。スケボーの初歩的な姿勢が身についていなければ、「(技などで)回ったりできないですよ！」と述べる。

聴き手はもう一度、＜「スケボーに乗っている」と掛けて、「今の状況」と解く、その心は、「姿勢が大事」＞というように、B さんのこれまでの発言をなぞかけのかたちに整理して伝え返し、B さんとそれを確認しながら振り返っていった。 B さんの述べた「姿勢」というのは、担当ケースへと臨む姿勢であり、趣味のスポーツをしている際の「姿

勢」であり、実習先での立ち位置や距離感、課題に取り組むための「姿勢」であり、B さんがはじめに取り上げていた近況についての話題の多くの部分に共通していることがわかった。B さんは笑いながら「うまいこと出てきました」と述べた。そこに伴っている「すっきりとした感じ」を大切にしながら、セッションを終えた。

第 4 節　考察

1.「掛け合わせる」思考方法と新たな理解の創造

「掛け合わせる」という思考方法において、創造性はいかに発揮され、そこから導き出される新たな理解にはどのような特徴があるのだろうか。先のセッション例では、担当ケースや実習、趣味など、さまざまな要素がすでに複雑に交差している B さんの状況について振り返った後、その状況を生きる B さんのフェルトセンスが「スケボーに乗ったような」という喩えで表現される。続いて、聴き手は「スケボーに乗っていると掛けて、今の状況と解く、その心は…」というなぞかけを用いた問いかけを行い、それによって、B さん自身の状況と、その状況についての表現を「掛け合わせる」思考方法が促進されている。

この問いかけを行うまでは、B さんの今の状況がなぜ「スケボーに乗っている」ように感じられるのかはまだ明らかになってはいない。しかし、B さんには確かにそれが「スケボーに乗っている」ように感じられている。この B さんのフェルトセンスから導き出されたスケボーという喩えをなぞかけによって状況と掛け合わせ、さらに交差を重ねることで、「上達」というフレーズや、そのコツとしての「姿勢が大事」という、今の状況のさまざまな側面についての新たな理解が導き出されている。「姿勢が大事」という新たな理解には、確かに「スケボーに乗っている」際の特徴が巧みに反映されている。このような B さん自身にも意外に思われる、状況についての新たな理解は、掛け合わせる思考方法によって創造されたと考えられる。

また、聴き手のフェルトセンスから導き出される問いかけは、B さんの創造性を活性化させる。岡村(2013)はなぞかけフォーカシングについて、「リスナー自身にもなぞかけに取り組みながら、問いを共有するように応答する」ことを強調している。このセッションでも、聴き手は B さんの用いた「上達」という言葉からもたらされた聴き手自身のフェルトセンスに導かれて、その「コツ」について尋ねていることからわかるように、B さんの状況についての表現から聴き手自身もその状況を感じながら進めている。聞き手

と言葉を交えるという交差の仕方もまた、話し手自身の状況と言葉の「掛け合わせ」を促進するのである(対人的な相互作用における交差に関しては、第 5 章も参照)。

2. 体験に開かれていることと創造性

ここからは先のセッション記録を例に、交差概念のもつ創造的な特徴と、本章の導入で取り上げた Rogers(1961)の「建設的な創造性のための内的条件」との比較検討を行う。Rogers は、「建設的な創造性のための内的条件」の 1 番目に「体験に開かれていること」を挙げているが、この用語は心理療法的変化に関して Rogers 自身がたびたび用いる表現でもある(Rogers, 1961)。例えば Rogers は、体験に開かれていることに言及するなかで、あるクライエントの「私が今感じているものは一体何なのでしょう。私はそれを迫りたい。それが何かを知りたいんです(Rogers, 1961, p.173)」という発言を例に挙げ、このクライエントが自身の「感じていることの確かな味わいを見極める(discern the exact flavor of the feelings)(Rogers, p.1961, 174)」ように努めていると指摘する。また別の箇所で Rogers(1961)は、「体験に開かれていること」の具体例として、ある青年との面接を取り上げているが、これを「ほかの感情と同様に、自分の身体感覚に対してより開かれている道のり(Rogers, 1961, p.116)」と紹介している。つまり、身体感覚に開かれているということは、体験に開かれているということの重要な側面なのである。

これらのことから、Rogers のいう「体験に開かれていること」とは、クライエントが自身の身体に直接感じられていることに開かれ、その質感に注意を向けること、つまり Gendlin のいう状況についてのフェルトセンスを感じながら、その状況について考えることと共通する。現在の状況と、その状況についての表現を、フェルトセンスを手がかりとして掛け合わせることで、あたかも新たな種族が誕生するかのように、状況についての新たな理解が生み出される。掛け合わせる思考方法では、フェルトセンスを感じられていることが重要な役割を果たしており、これは Rogers のいう「体験に開かれていること」にも見受けられる特徴である。先のセッションでも、フェルトセンスに開かれていることで「スケボーに乗っている」という表現がもたらされ、「姿勢が大事」という新たな理解が導き出されている。「掛け合わせる」という創造的な思考方法を行うには、言葉と状況とをつなぐフェルトセンスに開かれていることが重要であり、これは Rogers の創造性の内的条件とも共通していることが、セッション記録からも確認できる。

3. 新しさは身体的に感じられる

交差による新たな理解はフェルトセンスによって導きだされるが、新たな理解に伴う

その新しさ(novelty)自体もまた、身体的に感じられる。Rogers(1961)の「建設的な創造性のための内的条件」の2番目は、「評価の基準が内部にあること」であった。創造性のための最も基本的な条件は、他者からの賛辞や批判などの外的な判断ではなく自分自身が決めるものであり、このことをRogersは「『行為のなかに自分がいる』、つまりそれまでは存在しなかったような自分の潜在性がこの瞬間に立ち現れ現実化している、という『感じ』が持てるときには、その個人は大きな満足を得ながら創造的になることができ、外側の評価がその根本的な事実を変えることは決してない(Rogers, 1961, p.354)」と記述している。

先のセッション例では、なぞかけの問いかけの後でBさんは「うーん、上達かな」と述べたが、この「上達」という言葉にはさらなる吟味が必要となった。一方で、聴き手とのやりとりから出てきた「そうそうそう、姿勢が大事なんですよ！」という発言からは、声の調子や笑いを伴うなどの振る舞いから、身体感覚の変化に伴ってこの理解が到来したことがうかがえる。このように、Bさんにとっての理解の新しさは、Bさん自身の所作から明らかなように、身体的に実感され、面白みを伴ってもたらされるのである。

Gendlinは交差概念に関して、「交差とは理解することであり、多くの含意が同時に伴うひとつの感覚である。交差は『そう、そういうことなんだよ！』と我々に言わせる何かなのだ (Gendlin, 1997b, p.29)」と記述している。あるひとつのひらめきが、多くの事柄に適用でき、「あぁ、なるほど！」と納得できるような理解が、交差によって導き出される。Rogersも、創造的な行為に伴って生じる特徴的な現象のひとつに「ユーレカ感情(the Eureka feeling)(Rogers, 1961, p.356)」を挙げている。

入浴中、金の王冠を壊さずにその純度を調べる方法を思いついたアルキメデスの逸話に由来するこのユーレカ感情のように、創造的なひらめきには思わず「これだ！」と叫んでしまうような身体感覚が伴うことが知られている。新たな理解にはこのような「腑に落ちる」という身体感覚の変化を伴い、フォーカシングではこれをフェルトシフトと呼んできた。交差の創造性を生かした実践であるなぞかけフォーカシングでは、掛け合わせる思考方法を実際に技法として用いることで、新たな理解を促している。交差によって導き出される状況についての理解の新しさは、その基準がその人の内部にあり、その人自身にも確かに実感されることがセッションからも確認できる。

4.「遊ぶ」能力と交差の創造性

Rogers(1961)の「建設的な創造性のための内的条件」の3番目は「さまざまな要素や

概念と遊ぶ能力」である。Rogersによれば、これは「アイデア、色や形、さまざまな関係性と自発的に遊ぶ能力(Rogers, 1961, p.355)」であり、また「このように自発的にさまざまなことを試して見ることによって、人生についての新しい意味ある創造的な見方ができるようになる(Rogers, 1961, p.355)」と記述されている。

この点に関してはまた、Maslow(1961)も同様の指摘をしており、自己実現へと向かう人々が体験する「至高体験(peak experience)」には愛情の体験や神秘体験、美的に認知や創造的瞬間が含まれているが、この至高体験に伴う特徴の1つに、ユーモアや遊戯性(playfulness)が挙げられている。Maslowが「人間の状況についてのひとつの良い解決策、それが教えてくれるのは、ある問題を解決するためのひとつの方法は、その状況を面白がること(to be amused by)にある (Maslow, 1968, p.113)」と指摘するように、ある状況について、それを面白がりながら取り組み、あれこれとアイデアを試しながら「遊べる」ということが、問題を解決するための創造性を発揮するための大きな要因となるのである。

なぞかけフォーカシングは、話し手と聴き手がともになぞかけを楽しみながら取り組んでいくワークである(岡村,2013a)。セッション例では、Bさんが自身の状況についてなぞかけをしながら振り返り、「スケボーに乗っている」という喩えから、状況についてのさまざまな連想を遊ばせている様子が見受けられる。岡村(2016b)は、なぞかけフォーカシングという実践を「フォーカシングが利用する『交差』という、元来言葉遊びが持っていた、状況や問題の新たな理解を生み出すための創造性を培う方法へと接近するための方便」と捉えている。なぞかけはそもそも言葉遊びであり、これによってRogersの強調する「遊ぶ能力(the ability to toy)」が触発される。創造的であるとは「遊べる」ということでもあり、意図的な交差を用いた「掛け合わせる」思考方法による、新しいアイデアの到来を楽しめるということでもある。同時に、このような特徴は、体験に開かれ、内側の基準を大切にするという「建設的な創造性のための内的条件」の他の2つの条件とも強く関連しているのである。

また、聴き手が話を聴きながら、話し手が状況を言い表すその喩えをなぞかけの言い回しを用いて伝え返し、尋ねることは、話し手側の状況と言葉の掛け合わせをさらに促進させるように機能している。このような関わりには、聴き手がなぞかけの言い回しを用いることで、話し手が「遊べる」ように、つまり創造的に言葉を用いることができるように誘いかけている、という側面もあると考えられる。先述のように、話し手と聞き

手が言葉を交わし、問いかけを行うという相互作用における問いかけもまた、話し手の創造性を活性化させる重要な要因なのである。なぞかけフォーカシングのような言葉遊びの要素を含む実戦によって、Rogers や Maslow が指摘している、創造的な人には自発的に発揮されている「遊ぶ」という能力を、意図的に引き出すことができるのではないかと考えられる。

第 5 節　結語：人間性心理学における創造性の進展

Maslow は、特別な才能の創造性だけでなく、日常生活において誰もが自己実現へ向かう過程で発揮される創造性に着目した。Rogers も同様に、あらゆる人に発揮される創造性を想定し、それが心理療法の原動力とも共通すると指摘した。Gendlin もまた、日常生活のなかでも発揮される創造性に注目した点で、Maslow や Rogers がともに重要視していた、広義の人間性としての創造性を探求するという系譜のなかに位置づけることができるだろう。

では Maslow や Rogers と比較して、Gendlin に独自の創造性の観点とはどのようなものだろうか。Maslow は自己実現の創造性に関して「業績よりも人格(personality)を強調する(Maslow, 1961, p.145)」と記述するように、創造性をその人格特性から考察した。また Rogers の場合は、導入で指摘したように、「建設的な創造性のための内的条件(Rogers, 1961)」を提示し、そこから個人の創造性を促進するための他者の関わりの条件、言わば創造的な「人になる(becoming a person)」ための人間関係の条件を探求した。Maslow は創造性に関して人格論を、Rogers は個人の変化の諸条件を明らかにしようと試みたのであった。

一方で、Gendlin は創造性を特定の「パーソナリティ」に由来するもの、つまり人格論や、あるいは個人の変化の条件としてではなく、「方法論(methodology)」の観点から捉える(Gendlin, 1962/1997)。Gendlin の哲学は一貫して、具体的にどのようにすれば、誰しもが創造性を発揮できるのか、その方法をいかに学べるのかに注目してきた。それ故に、Gendlin はフォーカシング(Gendlin, 1981)や TAE(Gendlin, 2009b)など、具体的な方法(method)を自身で提案する。これらの方法の重要性は、実際の言い回しやステップの進め方それ自体ではなく、日常場面でも起こりうる、交差や 2 つの対象を掛け合わせるという発想を含むメソッドを、意図的に行えるようになることにある。意図的な交差という思考方法がすでに含まれているフォーカシング指向のワークや心理療法は、そ

れ自体、創造的であると言えよう。このような心理療法は、言葉や体験の意味を、過去や記憶によって決定されるものとは捉えず、状況を生きる有機的なプロセスとの相互作用として捉え、別の発想でクライエントの創造性を発揮させるように支援するのである。

本章では、なぞかけフォーカシングのセッションを具体例として、交差の機能による創造性を発揮するための発想の方法、すなわち「掛け合わせる」という思考方法に着目した。創造的な人の特徴を通してではなく、また創造的な人になる諸条件を通してでもなく、誰もが実践可能な、創造的な方法を、Gendlin の交差概念を通して提示することができるのではないか。さらには、そのような方法に基づくプロセスは、Maslow や Rogers が言及していた創造性の特徴をも含むものであった。本章では特に、状況についての新たな理解を促すものとして、状況と言葉の交差に着目したが、これは思考や言語という枠組みを超えて、あらゆる創造性への源泉へとつながっていくだろう。交差による創造性への言及は「掛け合わせる」という具体的な思考方法の提案を通じて、人間性心理学における創造性の探求の連続線上にあって、かつそれを別の仕方で進展させているのである。

註

[1] 本章は、岡村心平（2017a). 交差と創造性−新たな理解を生み出す思考方法− *人間性心理学研究 35*(1), 89-100 を加筆修正したものである。

第 9 章　言葉遊びの創造性：交差概念による文化的・教育的着想 1)

第 1 節　導入

Lakoff & Johnson(1980)が *Metaphors We Live By* において言語学における客観主義を批判し、認知言語学への新たな潮流を生み出して以降、それ以前とは異なった仕方で、言語の創造性が注目されてきた。例えば深田・仲本(2008)は言葉を「環境との相互作用による身体的な経験を動機づけとして発展してきた記号系の一種(深田・仲本, 2008, p. iii)」と捉え、認知意味論の観点から、感性や身体性に支えられ、生きた文脈のなかで用いられる言葉の創造性やその意味拡張について言及している。

アメリカの哲学者で心理療法家でもある Gendlin は、現象学や解釈学、プラグマティズムや言語哲学などを参照しながらも、Lakoff と Johnson の認知意味論に関する議論にたびたび言及し、独自のメタファー論を展開している(Gendlin, 1991/1995)。Gendlin はまた、心理療法の効果研究を背景に、身体感覚に根ざしたセルフヘルプ技法であるフォーカシング(Gendlin, 1981)を提唱している。フォーカシングは、漠然と身体的に感じられる有意味な感覚「フェルトセンス(felt sense)」と、言葉やイメージ、身振りなどを含む「シンボル」との相互作用によって、自身の状況についての新しい理解を探求する方法であり、言語と、言語よりもより多くの意味を含む身体感覚との関係性を主題とする Gendlin 自身の哲学の実践例である。

岡村(2013a,2013b, 2017a)は、フォーカシングにおけるメタファーの機能に着目し、その言語運用の特徴について言葉遊びとの関連を指摘するなかで、なぞかけの言い回しを用いた「なぞかけフォーカシング」の技法を考案し、実践している(第 7、8 章)。なぞかけを含むいわゆる「言葉遊び(wordplay)」は、世界各地のさまざまな文化圏あるいは時代で見受けられるものである(Augarde, 1984)。人類によって根源的な関わりをもつ言葉遊びについて、Gendlin のメタファー論や彼の哲学はいかなる知見を提示することができ、そこにはどのような意義が含まれているのだろうか。

本章では、まず I. A. Richards などによる、従来のメタファー論を参照したのち、Gendlin のメタファー論における「交差 (crossing)」の概念について取り上げ、その特徴について論じる。次に、言葉遊びという主題を巡って、アリストテレスによるメタファーとなぞなぞに関する記述や、Lewis Carroll の『不思議の国のアリス(*Alice's Adventures in Wonderland*)』に登場する「帽子屋のなぞなぞ」の逸話をめぐる歴史的

な事例、そしてホイジンガの『ホモ・ルーデンス』による「謎(riddle)」をめぐる遊びに関する研究など、これらを辿りながら論考し、言葉遊びそのものがいかに創造的な営みであるかを「交差」概念をもとに検証していく。最後に、このような言葉遊びをめぐる知見が、フォーカシング実践にどのような視座を与えるかについてまとめたい。

第 2 節 言葉遊びとなぞかけ：メタファー・なぞなぞ・なぞかけ

1. メタファーの特徴

メタファー(metaphor)とは、広義にはある対象を別の事柄に喩えることで、表現したり理解したりする表現形式一般を指す。狭義には、修辞法の区分の 1 つであり、例えば「君の瞳は宝石のようだ」など、「～のような(like～, similar to～)」という表現を用いたものをシミリー(simile:直喩)と呼び、これを用いない「君の瞳は宝石だ」という表現をメタファー(metaphor:隠喩)と呼ぶ(山梨, 2012)。

メタファーとシミリーは、その表現の言い回しの違いにより修辞学的には区分されるが、両者には共通の構造がある[2)]。Richards(1936/1965)は、メタファーの特徴を「趣意(tenor)」「媒体(vehicle)」「根拠(ground)」という 3 つの関係性を含むものとして捉える。先述の「君の瞳は宝石だ」というメタファーの例でいえば、「君の瞳」が趣意、つまり当の話題となっている喩えられるものであり、「宝石」が媒体、それを喩えるものとなる。そして直接は語られていない部分、この趣意と媒体に共通する特徴、例えば「とても綺麗で輝いている」や「それくらいとびきりの価値がある」というような意味あいの部分が、このメタファー表現の根拠となる。この構造はたとえこの表現がシミリー(君の瞳は宝石のようだ)となっても変わらない。

Richards の区分では、メタファーの機能は言い回しの有無などではなく、メタファーという表現行為においてどのようなことが理解されるのか、という認知的側面が重要となるが、これは認知意味論におけるメタファー観とも多くの共有している。特に、Lakoff & Johnson(1980)が提唱した「概念メタファー(conceptual metaphor)」は、メタファーという現象を単なる修辞形式としては捉えずに、人間の認知機能において本質的な役割を叩いており、いかに人間の思考が言語によって、メタファー的な言語運用によって規定されているかについて多くの実例とともに言及している。

2. メタファーとなぞなぞ

Aougarde によれば、「『なぞなぞ』Riddles はことば遊びの中でももっとも古くから、

そして最も広く親しまれてきた。歴史上どの時代をとってみても、世界中の至る所に存在した(Augarde, 1984, p.1. 邦訳 p.3)」という。また、メタファーとなぞなぞ(riddle)との関連についても、同じく Augarde(1984)が指摘しているように、少なくとも古代ギリシャの哲学者アリストテレス(Aristotle)まで遡ることができる。アリストテレスは『詩学』において文体に関して論じるなかで、比喩(metaphor)のような語だけを用いて詩作をするならば、謎(riddle:なぞなぞ)のようになるだろうと指摘し、以下のように続ける。

> というのは、謎の本質は、事実を語りながら、組み合わせることができない事柄を結び合わせることにあるが、このことは、他の語の結び合せによってではなく、比喩の組み合わせによって初めて可能になるからである(アリストテーレス (1997) 邦訳 p.84)。

この説明に続いて、アリストテレスは「わたしは、火を使って青銅を人間に膠づけしているものを見た」という表現を例として挙げている。同様の例が、同じくアリストテレスによる『弁論術』にも登場する。これは民間療法として今も残るいわゆる「吸い玉(カッピング)」の喩えであり、かつこれを謎として提示しているのである。『弁論術』ではさらに以下のように言及は続く。

> 一般に、巧みに作られた謎からは優れた比喩を得ることができる。なぜなら、比喩も謎のように何かを仄めかしており、したがって、謎として良ければ、当然、巧みな比喩が与えられたことになるからである(アリストテレス (1992) 邦訳 p.315)。

アリストテレスによって、なぞなぞのような言葉遊びがもつ意外性や創造的な側面が、メタファーがもつ効果によって与えられること、あるいは説明されることが、古来より知られていたのである。なぞなぞへの関心はこのように歴史を辿れば非常に長いが、近年なって認知言語学領域でメタファーとなぞなぞのような言葉遊びとの関連が注目されている。本邦に限っても、杉本(2002)や安原(2002,2007)によって、言葉遊びの創造的な側面についてメタファーの機能に着目しながら論じられている。

また山梨(2012)は、先に挙げた Richards による趣意・媒体・根拠というメタファーの構造と、「三段なぞ」と呼ばれる種類のなぞかけとのあいだに、共通の構造があると指摘

している。三段なぞとは、「A と掛けて B と解く、その心は C/C'…」という言い回しを用いた言葉遊びであり、カケ・トキ・ココロという 3 つの区分からなる(鈴木, 1981, 2009)。

例えば先ほどの「君の瞳は宝石だ」というメタファーの例を三段なぞへと変換すると、「『君の瞳』と掛けて、『宝石』と解く、その心は『とても綺麗で輝いている/それくらいとびきりの価値がある』」となるだろう。この場合、カケに当たる部分が「趣意」、トキが「媒体」となり、なぞかけのオチの部分であるココロが「根拠」となるだろう。ただし、通常メタファー表現では、その根拠となる部分が明示されず暗にほのめかされている場合が多い(山梨,2012)。

根拠を示さずにメタファーを用いることは、言わばなぞかけのカケとトキのみを提示し、ココロを相手に詮索させているような場面と同じであろう。先に引用したアリストテレスの主張をなぞれば、秀逸ななぞかけを見聞きした際のプロセス、つまり「オチは何か」とあれこれ詮索している者の心情とは、メタファーによる仄めかしの効果によって与えられていると捉えることが可能なのである。

3. Gendlin のメタファー論と交差

Gendlin もまた、初期の著者から近年の論文に到るまで、メタファーの創造的な機能に着目している(Gendlin, 1962/1997, 1986, 1991/1995)。Gendlin(1991/1995)は Lakoff らの認知意味論や Wittgenstein の後期言語哲学に言及しながら、従来のメタファー論を批判している(第 3 章も参照)。先ほどから取り上げている「君の瞳は宝石だ」というメタファーを例にすれば、このメタファーが作られた際、往往にしてはじめからメタファーの根拠となる「とても綺麗で輝いている」という両者の共通点が先に存在しており、それらに基づいて趣意となる「君の瞳」を媒体する「宝石」というモチーフが連想される、と考えられがちである。

このような連想の過程はメタファーだけでなく、三段なぞのようななぞかけが作られる場合も同様の流れをたどることが知られている。阿刀田(2006)によれば、なぞかけを作る際のコツとして、カケ→ココロ→トキの順で整理するというポイントが挙げられるという。例えば、カケとなる事柄(君の瞳)が有しているある特徴的な側面を挙げ(輝いている/価値がある)、これをココロとする。そしてこの側面(輝いている)に類似する別の事柄(宝石)を見つけ出し、これをトキする。演芸として即興で行われているなぞかけ芸では、このようにココロ(「根拠」)を先に見つける仕方でなぞかけを作成しているのである。

一方で、Gendlin のメタファー論において「交差(crossing)」の機能から説明されてい

る着目点は、2つ事柄のあいだの共通性が、そのメタファー表現が用いられた後から「創造される」という点である(Gendlin, 1991/1995)。Gendlinがメタファー表現の創造性に着目する際に、メタファーの意味となる「根拠」が前もって存在したり想定され、それに基づいて「趣意」に対する「媒体」が選定されるとは捉えていない(あるいは、根拠をすでに連想していたとしても、それがメタファー表現の意味の前提になっているとは想定しない)。2つの事柄や文脈が「交差」することで、「根拠」に対応するメタファーの新たな意味、新たな理解が創造されるのである[3)]。

Gendlin(1986)はメタファーに見受けられる「交差」がもたらす創造性の実例として、「あなたの怒りは、このイスとどのように似ているだろうか？(how is your anger like the chair?)」という問いかけを挙げている(Gendlin, 1986, p.150)。もし、ある人が自分の怒りを十分に感じているなかで、たまたま目にふれたイスと、その怒りの共通点を見出そうと「交差」させることを試みると、例えばそこから「重く居座っている」や「誰かに投げつけたくなる」、あるいは「今の私をしっかりと支えてくれている」などというように、自身の感じている怒りが有しているさまざまな特徴を挙げられるようにかもしれない。

注意すべき点は、ここで明らかになった怒りのさまざまな特徴というのが、イスと交差せる以前には存在していなかった、ということである。このような過程は、自分の怒りという「趣意」を、イスという「媒体」によって理解しようとする際に、この2つが交差してはじめて、その「根拠」であるような怒りの特徴が新たに理解された、という仕方で記述することができる。言わば、「私の怒りはイス(のよう)だ」というメタファー表現の意味(根拠)は、このようなメタファー表現が実際に用いられた後に創造されるのである(第3、4章参照)。

交差による創造的なプロセスの特徴は、三段なぞのようななぞかけにも言える。Richardsのいう「根拠」を明示しないメタファーと、ココロを提示する前のなぞかけの類似点もまた、交差の観点から捉えることが可能となる。これらはどちらも、怒りとイスの問いかけによって両者の共通点を詮索する交差の例と同様に、2つの事柄のあいだの共通点を探求しており、その探求のプロセスにおいて、未だ明らかになっていない新しいアイデアの創造が促進される。アリストテレスが指摘したメタファーと謎のあいだに共通する特徴的な理解の効果は、Gendlin のいう交差の機能によって与えられる、と指摘することできるだろう。

第 3 節 なぞかけと交差の創造性：「帽子屋のなぞなぞ」をめぐる逸話から

1. 帽子屋のなぞなぞ

ここでもう 1 つ、言葉遊びの創造的な特徴が示されている例を提示したい。なぞなぞ(riddle)は世界各地の寓話や童話、物語のなかにも数多く見受けられるが、そのなかでもイギリスの作家 Lewis Carroll が 1865 年に発表した『不思議の国のアリス(*Alice's adventures in wonderland*)』に登場する「帽子屋のなぞなぞ」と呼ばれるものは、「謎文学史上もっとも有名ななぞなぞ(高山,2015, p.302)」と評されるほど広く知られたものである。

物語中、第 7 章“The mad tea-party”において、とある不思議なお茶会に迷い込んだ主人公アリスは、そこで帽子屋と三月ウサギ、ネムリネズミたちと出会う。帽子屋たちとのユーモラスなやりとりのなかで、アリスは帽子屋から唐突に「大ガラスと書物机が似ているのはどうして？(why is a raven like a writing-desk?)」というなぞなぞ(riddle)を投げかけられる。これを聞いたアリスははじめ「わかりそうな気がするわ！(I believe I can guess that!)と言ってこのなぞなぞの答えを考えようとするが、登場人物たちの噛み合わない話にどんどん流されていってしまう。結局、なぞなぞの回答が思いつかなかったアリスが帽子屋にその答えを尋ねると、帽子屋は「皆目見当もつかん(I haven't the slightest idea.)」と言い、そもそもその場の誰もこのなぞなぞの答えを知らなったのである。作中では最後まで、この帽子屋のなぞなぞの答えが明かされることはなかった。

日本においても『不思議の国のアリス』の多くの翻訳が出版されているが、いくつかの翻訳(例えば高橋訳による河出文庫版、河合訳による角川文庫版)では、この帽子屋のなぞなぞ“Why is a raven like a writing desk”に「大カラスと掛けて、書物机と解く、その心は？」という三段なぞの形式を当てて訳出されている。大ガラスと書物机とのあいだの類似性について問いかける帽子屋のなぞなぞは、日本の三段なぞと共通の構造を有していることがわかる。なお、高橋訳版ではこの帽子屋の「なぞかけ」に訳注がつけられており、そこでは「この『三段なぞ(A とかけて B と解く、心は？)』の答えは、キャロル自身をはじめ多くの人が試みているが、『心はない』というのが正解かも」と指摘されている。

2. 「帽子屋のなぞかけ」の“求心力”

アメリカの数学者で作家のガードナーは、『不思議の国のアリス』の注釈本を出版して

いるが、これによれば「帽子屋の有名な答えのない謎はどこでも茶の間で話題になり、団らんのうちに知恵が絞られた(ガードナー,1980, p.113)」といい、さらに、作者の Carroll のもとには、このなぞなぞの答えについての問い合わせや。答え合わせの投書が殺到したという。

そのため、初版から 30 年を記念して 1892 年に刊行された『不思議の国のアリス』に Carroll が新しく書いた序文のなかで、Carroll 自身による帽子屋のなぞなぞの答えが掲載されることとなった。しかしガードナー(1980)によれば、Carroll 自身が「ただし、この答えは単なる後付けで、このなぞなぞを最初に思いついたときには答えなんてなかったのだ(This, however, is merely an afterthought the riddle as originally invented had no answer at all.)」と記述しておる通り、作者自身もこの帽子屋のなぞかけのココロに当たる部分、つまり大ガラスと書物机の類似性を後から発見したことになる。そして、1896 年版の『不思議の国のアリス』にキャロル自身が書いたこの帽子屋のなぞかけの解答例は、“Because it can produce a few notes, thought they are very flat and it is nevar put with the wrong end in front! ”だったという(ガードナー, 1994, p.142)。最後の“nevar”はスペルミスではなく“raven”を後ろから綴ったもので、作品中にもたびたび見受けられる Carroll 流の機知のもつ特徴が反映されている。しかし、実際には原稿を受け取った編集者が“nevar”を印刷ミスだと誤解してしまったことにより、再版された際に校正して“never”に修正されてしまっていた。1976 年にこの事実が発見されるまで、元々の綴りは活字になっていなかったということが知られている(ガードナー, 1994, p.142)。

実際には、Carroll 自身によるこの曰く付きの解答が発表された以降も、アメリカのパズル学者のサム・ロイドやイギリスの作家オルダス・ハクスレーを始め、非常に多くの人々によって、帽子屋のなぞかけの答えが提案され続けた(作者 Carroll 自身によるこの答えが読者を納得させる説得力をもっていなかったとも解釈できよう)。1989 年にはイギリスのルイス・キャロル協会が新解答のコンテストを催し、それらの作品は最終的に協会の会報『パンダスナッチ』に掲載されている(ガードナー、1994, p,142)。

興味深いのは、帽子屋のなぞかけに関して、作者自身が「もともと答えがなかった」と明かしているのにもかかわらず、多くの人々がその答えを考え出そうとした、ということである。Carroll の『不思議の国のアリス』の多くの読者はこの物語を読むことで、帽子屋のなぞかけに惹かれて、そのココロを探求する“遊び手(player)”となっていった。帽子屋のなぞかけには、このようにココロを求めるよう人を魅了する力、いわば“求心

力”とも言えるようなものを帯びているのである。

3. なぞかけと交差の創造性

先述のように、“why is a raven like a writing-desk?”という“raven”と“writing-desk”のあいだの類似性について問いかける帽子やのなぞなぞは、日本語の三段なぞの形式と同じ構造を有している。また、この“why is a raven like a writing-desk?”という帽子屋のなぞなぞの表現は、これも先に取り上げた Gendlin (1986)における交差の問いかけの例である“how is your anger like a chair?”とも、“why”と“how”の疑問詞の違いはあれども、2つの事柄のあいだの類似性を尋ねる“like～”という言い回しを含む共通の構造が認められる。そのため、帽子屋のなぞなぞ、そして交差の問いかけの例を、三段なぞの形式に置き換えることが可能なのである。

また逆に、Carroll による帽子屋のなぞ謎と三段謎はどちらも、言わば“crossing riddle”とも呼べるような、交差の特徴を共有した言葉遊びの例として挙げられるだろう。帽子屋のなぞなぞと三段なぞには、2つの事柄のあいだの類似性を創造的に探求するという特徴が見て取れる。“raven”と“writing-desk”のあいだの類似性は、当の作者自身である Carroll 自身がその答えを想定していなかったことから明らかにように、前もってすでに類似性が存在していたわけではない。Gendlin の交差の問いかけにおいて“your anger”と“the chair”という2つの事柄を交差させ、両者の共通性を探求するプロセスが示したように、帽子屋のなぞなぞも、“raven”と“writing-desk”のあいだの類似性を新たに探求していく思考のプロセスによって、新たに創造されて行く。よって、Carroll が示した帽子屋のなぞなぞもまた、Gendlin が指摘した交差の概念が有する創造的な特徴の実例として挙げられる。なぞかけのもつ“求心力”は、交差がもたらす創造的な機能によって捉えることができるのである。

第4節 言葉遊びの創造性とその教育的意義

歴史学者のホイジンガ(1973)は著作『ホモ・ルーデンス』において、「人間文化は遊びのなかにおいて、遊びとして発生し、展開してきた(ホイジンガ,1973,p.12)」と記述し、文化に対する遊びのその根源性について強調している。ホイジンガが強調するように、子犬などが遊び戯れている姿が観察されるように、すでに動物が遊びというものを有しているわけであるから、人間文化が存在する以前に、遊びが存在することになる。ホモ・ルーデンス、つまり遊ぶ存在としての人間観において、いかなる文化的秩序であっても、

それ以前に遊びが先行し、さらに遊びのなかにおいてその秩序が展開することになる。「遊びは秩序を創っている。いや、遊びは秩序そのものである(ホイジンガ, 1973, p.35)」。

ホイジンガが分析対象とした遊びはジャンルとしては多岐に渡るが、本章で取り上げてきた言葉遊び、特に「謎(riddle)」についても言及している[4)]。古代より人々が謎を出し合い、それに答えていくという謎解き競技は、もともと供養祭祀の本質的な一部分を成していた。ホイジンガは「謎は初め聖なる遊びであった、すなわちそれは、遊びと真面目の境界上に立っていて、ある高い意識を帯びたもの、祭儀にあたって神に奉献されるものであった、しかしまた、そのために遊びの性格を失うこともなかった(ホイジンガ,1973, p.235)」と記述する。

このような謎を出し合う謎問答は、祭祀としての性格や、社交のための遊びだけでなく、神学的あるいは哲学的な議論のための方法としても機能していた。ホイジンガ(1973)によれば、「後期のギリシャ人も、謎の遊びと哲学の起源のあいだにある種の関連があることをよく理解していた。アリストテーレスの弟子の一人クレアルコスは、諺に関する論文のなかで謎の議論を示し、謎はかつて哲学の対象であったことを証明した(ホイジンガ, 1973, p.244)」という。アリストテレスによるメタファーを介した詩作と謎の関連についてはすでに触れたが、謎を解くということによって、哲学的な実践知を教え、また鍛練していくという風土がかつて存在していたことをホイジンガは強調している。

謎解きのような言葉遊びは、文化的な秩序を生み出し、かつそれを発展し育む土壌でもあり、またそのような創造的な営みを伝え教えるための方法でもある。「遊びはものを結びつけ、また解き放つのである。それは我々を虜にし、また呪縛する。それはわれわれを魅了する(ホイジンガ, 1973, p.36)」というホイジンガによる遊びの捉え方の通り、謎問答という遊びは、例えば Carroll が作った「帽子屋のなぞなぞ」がそうであったように、人々を惹きつけ、虜にし、人々の創造性を育むことに寄与する。帽子屋のなぞなぞはその“求心力”によって、世界中の読者が謎を解くことの魅力の虜にされ、今もなお、この謎を解くという営みの面白さについて、新たな読者に伝え続けている。

このような謎が有する教育的な意味に関しては、本邦でも民族学者の柳田國男が著作『なぞとことわざ』(1976)において言及している。柳田(1976)は、公教育としての学校教育が始まる以前の時代には、なぞなぞやなぞかけのような言葉遊びが、国語力を育む「稽古」として機能していたことを指摘している(第 7 章も参照)。なぞなぞやなぞかけのような謎問答による遊びは、古今東西を問わず、人々に対して、自身が「わからないこ

と」に興味関心を向け、楽しみながらその「わからなさ」を人々とともに共有したり競い合いながら、一緒になって探求してくためのインターフェイスとなっていたのである。

第 5 節　結語：わからなさへのリテラシーを育むこと

言葉遊びは、それ自体が創造的な営みであり、かつ創造性のハグ味方を伝え教えるための機能を有している。読み手を自然とその言葉遊びの「遊び手」へとなるように誘い込み、そのココロの探求の虜にさせてしまうある種の「求心力」を有する「帽子屋のなぞかけ」は、言葉遊びがもっている創造性とその教育的な機能という 2 つの性質を色濃く示している。これらの特徴的な性質について、本章では Gendlin の交差概念を援用することで明確に理解しようと試みてきた。

岡村(2013)は、交差のもつ創造的な機能を促すために、なぞかけの言い回しを用いた「なぞかけフォーカシング」を考案しているが、なぞかけのもつ教育的な「型」の機能にも着目しており、より広く一般にフォーカシング実践の特徴を伝えるためのなぞかけというモチーフの利用を提唱している(岡村,2013)。わからないことに興味をもち、それを探求するという営み、その力は、古来より、そしてさまざまな文化地域において、言葉遊びによって培われてきた。なぞかけフォーカシングという実践は、フォーカシングを普及させるための方便というよりはむしろ、フォーカシング実践において利用されている交差の機能、つまり元来は言葉遊びそれ自体が有していた、状況や問題の新たな理解を生み出すための創造性を培うその方法へと席巻するための方便と捉えることもできるだろう。

先述のように、フォーカシング(Gendlin, 1981)という実践はもともと心理療法の効果研究が 1 つの契機となって考案されたが、実際にはより広く一般向けの書籍を通じて、フェルトセンスとの関わり方を提示するためのセルフケアのワークとして開発されたという経緯がある。また Gendlin 自身も、フォーカシングの考案以降、その発想を創造的思考法へと応用した TAE(Thinking at the edge)という手法を提案し、紹介している(Gendlin, 2004)。TAE のプロセスにおいても交差は重要な位置づけを有しており、創造的な言語運用を促すための手法として反映されている(第 8 章も参照)。

また、TAE の共同開発者でもある Hendricks-Gendlin らによる“Revolutionary Pause”(Hendricks-Gendlin, 2003)という名称で知られるムーブメントや、後続する

Herndández & Grafanaki(2014)らによる取り組みなどでは、フェルトセンスと関わる能力を育むことを強調する際に、「フェルトセンス・リテラシー(felt sense literacy)」というアナロジカルな表現を用いている。“literacy”という語には、字義通りには「読み書き能力」や「識字」を意味するが、そのような意味から転じて、例えばメディアリテラシーや科学リテラシーのように、「ある分野に関する知識やそれらを活用する能力」を比喩的に意味するに至っている。「リテラシー」というアナロジーを用いることによって、フォーカシングにおいて中核的なフェルトセンスを感じるということを能力として捉え、かつこれがもともと人間にとって「自然なプロセス」であり、すべての人が自然に融資うる「最も基本的なレベル」で、かつ読み書きのように「学んでいくことができる」ものであるという特徴を言い表そうとしている。

このフェルトセンス・リテラシーという発想は、なぞかけのような言葉遊びがもつ、創造性と教育的な特徴とも重なる。言葉遊びは、もともと人間にとって根源的なプロセスであり、かつそれらは学ばれ、教え伝え合うことができる。創造的な言語運用や思考方法の実例であるなぞかけのような言葉遊びは、わからないこと、謎についてのリテラシーを向上させるための格好の機会であった。なぞかけフォーカシングという実践は、言葉遊びの性質を利用することによって、フェルトセンス・リテラシーをさらに向上させていくための実践方法として提案することが可能であろう。「わからなさ」へのリテラシーを向上させるためのなぞかけフォーカシングについて、さらなる実践的かつ理論的な展開が必要である。

註

1) 本章は、岡村心平(2016a). 言葉遊びの創造性−ジェンドリンの「交差」概念からの考察− *統合人間学研究 1,* 33-63 を加筆修正したものである。

2) シミリーとメタファーにおける言い回しの区分よりも、両者に共通した機能を見出すという観点は、Gendlin のメタファー論においても認められる特徴である(Gendlin, 1962/1997, p.114)(第 4 章も参照)。

3) Gendlin は交差(crossing)という概念を、メタファーにおける趣意と媒体のような 2 つ言葉のあいだの関係性や、言語によって想起される古い状況と現在の状況という 2 つの状況間の関係性、そして状況と言語とのあいだの関係性など、あらうる対象にわたって

適用している(Gendlin, 1986, 1991/1995)。「交差」概念は Gendlin 自身によるその使用の仕方にも文献間による変化や差異が認められるが(岡村, 2015、第 3 章参照)、交差という概念が創造的なプロセスを生成する機能的な関係性について言及する際に用いられる点では一貫している。

[4] ホイジンガ(1973)は謎の遊びの機能を分析するなかで、オランダ語の“raadsel”をドイツ語の“Rätsel”、英語の“riddle”と同義として用いている(p.235) 。

第Ⅳ部　総合的考察

第 10 章　総括

第 1 節　総合的考察

本章ではこれまでの議論、特に第Ⅱ部(第 2～5 章)と第Ⅲ部(第 6～9 章)での議論を俯瞰的に整理し、その内容について概観した上で、本研究の意義に関して、今後のさらなる検討事項を提示しながらいくつかの観点から総合的に考察する。

1. メタファーとアスキングの機能についての心理療法的意義

第Ⅱ部では、理論的な検討を主として、第 2 章では心理療法のプロセスにおいて多様に見出されるメタファーの機能について概観し、第 3 章では Gendlin がメタファーを捉える際の理論的な枠組みの変遷について、Gendlin による 3 つの論述(Gendlin, 1962/1997, 1986, 1991/1995)を追いながら概説した。その上で、第 4 章ではフォーカシング実践やフォーカシング指向心理療法におけるメタファーやその役割、取り扱い方について論じた。その過程で、Gendlin が指摘するメタファーの機能に関して、特に新奇性(novelty)を見出すという創造的な特徴を論じる際に用いられる「交差」概念の重要性を指摘し、次いで第 5 章では、この概念を用いた対人的な相互作用において言及される際にも、メタファーの使用において見られる新奇性や創造性という側面を重視している故に交差概念が用いられていることを確認した。

以上のように、第Ⅱ部では心理療法やフォーカシング実践に見られるメタファーの機能について、理論的な検討を通して、特に Gendlin の交差概念からメタファーを捉えることによって、メタファーが有する状況や体験についての新たな理解を生み出す機能が、心理療法全般に見られるその療法的効果を支えていることが明確となった。

また第 4 章で、「状況についてのメタファー」であるフェルトセンスを言い表す「ハンドル表現」の機能を心理療法の治療変数である体験過程レベル(Hendricks, 1986)などの着想から、メタファー表現を作り出すことと、そのメタファーを手がかりに状況をより理解するための「アスキング」による意味の探求という、フォーカシング・プロセスの特徴について検討した。特に、この論点に関して交差概念を参照することで、ハンドル表現を見出す「喩える」という契機と、そのハンドル表現に対して問いかけ、アスキングを用いる「尋ねる」という契機という 2 つの契機が、フォーカシングのプロセスの進展させるために重要な役割を担っていることが明確となった。このことから、Gendlin の交差概念がフォーカシングの発想の心理療法的意義に関する考察に貢献することが示

された。

メタファー表現の使用は心理療法においてたびたび見受けられるが(第 2 章)、そのメタファーをクライエントとセラピストがともにどのように扱っていくのかという観点もまた、心理療法のプロセスについて重要である。さらにその扱い方にはその心理療法実践を支える理論的な背景が反映されており、メタファーの重要性は心理療法実践全般において広く共有されているとしても、異なる理論的背景をもつ心理療法実践においては、メタファーの扱い方もまた異なる仕方となる可能性が示唆される。

例えば第 4 章でも指摘した通り、妙木(2005)は精神分析的な観点から論述するなかで、「意味を有機的に織り込む行為」としてのメタファー使用を「発見的メタファー」と呼び、重要な治療的意義を指摘している。その際に妙木が指摘するメタファーに伴う体験のもつ「なまなましさ」や「実感」の重要性に関して、本研究の観点から言えば、これはフォーカシングおける重要な契機の 1 つである、フェルトセンスを言い表す「状況についてのメタファー」に伴う“生き生きとした実感”という観点とも共通していると言える。このようなメタファーのもつ身体性に基づく創造的な機能について、本研究では Gendlin (1991/1995)の交差概念の機能から探求してきたのであった。

一方で妙木(2005)は、第 4 章でフォーカシングにおける 2 点目の契機として提示した、アスキングを通じてフェルトセンスの意味を探求する「尋ねること」や「問うこと」をめぐって、重要な指摘を行っている。妙木(2005)は、精神分析における「問う」という営みを解釈の投与という治療的文脈において捉え、質問する(questioning)という行為が成立する条件を検討しながら「質問をするという心理は、かなり健康度を必要とする(p.120)」と指摘する。質問は、使われる文脈や声の使い方などで意味が繊細に変化するもので「文脈によって、質問は否定形よりも強い力を持つし、応答者にはある種の自我の力が求められる(p.120)」と記述し、「だから一定の条件の整っていないときに質問を使うと、質問者は応答者から、本人も思ってもないところで、かえって否定を引き出したり、質問者の問いが応答者からは、非難に聞こえたりする効果がある(p.120)」と強調する。そのため、「なに、それ」という何かわからない未知のもの、無意識を指し示す「それ」に関して問うこと、つまり精神分析における「問うこと」という営みは、クライエントとセラピストの共同作業であり、治療関係のなかにおいて「それ」について共有されているという前提によって、その有効性が担保されていると結論づけている(妙木, 2005, p.147)。

上の論述を踏まえ、本研究の主題であるフォーカシングのプロセスにおけるメタファーの意味を探求するための「問う」「尋ねる」という契機においても、その機能や有効性をめぐっては議論の余地があると指摘できる。例えば、Gendlin (1981)はフォーカシングにおいて最も重要な手順の１つとして 5 番目の「アスキング」を挙げ、アスキングの特徴を「開かれた質問(open question)」と論じており、それに対比して「修辞疑問(rhetorical question)」を取り上げている。Gendlin は以下のように論じている。

> People usually think they know the answers to such questions, or they decide what the answer should be. They ask themselves closed questions–in effect, rhetorical questions that they themselves answer immediately. Don't do that to your felt sense. Asking a felt sense is very much like asking another person a question. You ask the question, and then you wait (Gendlin, 1981, p.67).

このように、フォーカシングにおけるアスキングというステップは、妙木(2005)の指摘する否定や非難の意味であるような「修辞疑問」（例えば、「どうしてこれができないの？」とその理由の質問ではなく誰かを諭すような質問の機能）として用いられている際にはうまく機能しないと指摘していると捉えられる。反対に、まるで誰かに本当にわからないことを質問するかのように尋ね、その回答を待つ、という仕方で「開かれた質問」としての問いの機能がフォーカシングにおけるアスキングのねらいである。妙木(2005)の指摘するような否定や非難とは取られない意味の探求としての「問いかけ」については、心理療法における「問いかけ」の意義として新しい知見をもたらす創造的な側面を位置づけるという点で言えば、説明の方略などは違えども、ここで両者の問いかけをめぐる発想は概ね同じ傾向性をもっていることがわかる。

またアスキングというステップは、そもそもフェルトセンスを言い表す「ハンドル表現」に対して、クライエント(フォーカサー)自身が取り組んでいくものである。例えば、フェルトセンスが感じられていない場合や、それがメタファー的に捉えられていない場合に、「それは何を伝えているだろう？」や「その心は？」というアスキングを行うようにセラピスト(リスナー)が提案したとしても、クライエント(フォーカサー)側はその意図がわからず、そもそもアスキングとしての機能、つまりメタファーと状況の交差による意味の探求が生じ得ないのである。

つまり、心理療法のプロセスについて検討するなかで、「交差がいかに生じるか」という観点から考察することによって、メタファーの使用やその意味を問う心理療法に関する重要な要因について捉えることができると考えられる。妙木(2005)の強調している、クライエントとセラピストがともに未だわからない対象について探求するプロセスとしての心理療法的な「問い」は、第 5 章で取り上げた Gendlin(1991/1995)の対人的な相互作用としての交差の捉え方においても、同様の特徴が見られた。お互いに自身の未だ体験してない体験、あるいは自分とは異なる体験から、新たな理解を創造していくプロセスとも共通の枠組みを有し、既知の存在だけでなく、未知の存在へと開かれた問いを行うことが心理療法面接を進展させる契機となるという点は、多くの心理療法の理論的に背景においても共通するものである(Ikemi, 2017)。

このような、心理療法における異なる体験を有する者同士の相互作用プロセスを Gendlin の交差概念からさらに検討することが可能であろう。本研究では、Gendlin の交差がもたらす創造的な側面への着目を通して、心理療法のプロセスの動因となるメタファーを取り上げることで、心理療法における「創造性」という共通のテーマによってそのプロセスのもつ特徴やその効果を捉えるという視座を得られた。

2. なぞかけフォーカシングの実践的意義と遊ぶという観点

第Ⅲ部(第 6～9 章)では実践的な検討として、第Ⅱ部でのメタファーと交差に関する理論的な検討を踏まえた上で、方法としての交差と、その具体的な進め方のヒントとなる「なぞかけ」というモチーフを活かしたフォーカシングのステップという新たな技法を考案し、実際のセッション記録から、そのプロセスの特徴の考察を試みた。

まず第 6 章において、なぞかけとフォーカシングの共通点に関して、第 4 章で検討したハンドル表現とアスキングというフォーカシング・プロセスと三段なぞの構造が有する共通の特徴について、メタファーと交差の観点から論じた。その上で、メタファーのもつ創造的な特徴の検討において、学習場面でも活用されている「アナロジー」を含む創造的な推論や、「アブダクション」という仮説創造的で発見的な推論に関する理論的な知見を参照し、このような創造的な推論における身体感覚の重要性と、身体感覚をさらに有効に活かす推論方法として、フォーカシングとなぞかけの特徴を反映した思考方法の可能性について論述した。

この議論を踏まえ、第 7 章では、実際に三段なぞの言い回しを活かした 4 つのステップからなる「なぞかけフォーカシング」の方法を考案し、実際のセッション例を提示し

た。このプロセスから、なぞかけフォーカシングという方法に引き継がれているフォーカシング的な特徴を再度論じることで、この方法が有するリスニングの「稽古」としての意義について指摘した。また、第 8 章においては、Gendlin の提示する交差の発想が創造性の実際をさらに検討するために、人間性心理学における創造性についての知見を参照しながら、その重要な要因の 1 つして Maslow によるユーモアや遊戯性、Rogers の指摘する「遊べる能力」という側面をめぐって、なぞかけフォーカシングのセッション例をもとに、交差概念による「掛け合わせる」という創造的な思考方法のプロセスについて検討した。 最後に第 9 章では、なぞかけを含む言葉遊びという営み自体が有する創造性を捉えるための Gendlin 交差概念について、メタファーやなぞなぞ、なぞかけをめぐる歴史的な事例や逸話など、哲学、民俗学的な観点をもとに検討した。その上で、なぞかけと交差されることさらに Hendricks らによる「フェルトセンス・リテラシー」という発想を参照しながら、なぞかけフォーカシングを特徴づける言葉遊びの性質である「わからないことへ興味をもつ」ことを育むという教育的意義について考察した。

本研究では、第Ⅱ部において心理療法やフォーカシングのプロセスにおけるメタファーの機能を手がかりとして Gendlin の「交差」概念について検討し、さらにその交差概念を手がかりとして、交差をもたらす問いかけと同じ構造を有する「なぞかけ」というモチーフを援用することで、新たなフォーカシングの技法の考案を行い、実際のセッションからその技法のフォーカシング的な特徴を検討することを行った。Gendlin(1981)のフォーカシング簡便法は、もともとの原文(英語)を翻訳したものが知られており、実践における応答の工夫により洗練されてきたとは言っても、翻訳した応答例による技法が日本語におけるフォーカシング実践を支えてきた。

一方で、本研究では、交差概念を手がかりとした理論的な検討により、技法や応答の翻訳とは異なる仕方で、すでに日本語に馴染みのある言い回しを用いて、Gendlin(1981)の考案したフォーカシングを「再現」するという試みを行った。交差概念により明らかとなったフォーカシングの理論的な特徴と同じプロセスを、新たに作り出したステップを通して示すことで、フォーカシングのプロセスにおける、表面的ではない、より本質的なその特徴を提示することを可能にしたと考えられる。

また、なぞなぞやなぞかけのような言葉遊びの性質を利用した本研究でのフォーカシング実践を例として、「遊ぶ」ということの特徴からさらに考察を進めた。「遊ぶ」というモチーフは、渡辺(1992)の指摘するように、メタファーの使用をめぐる心理療法の治

療要因としても重視されている(p.302)。また賀陽(1989)は、言葉遊びの着想の手がかりとして「すべての精神療法をプレイセラピーとして捉え直す(p.170)」という企てを提案する中で、「言葉には治療的な力がある。それは言葉の持つ力よりも、むしろ遊ぶこと Playing(ウィニコット)のもつ力に負うところが大きい(p.175)」と指摘する。このように、治療媒介としての遊びに着目した遊戯療法に限らず、「遊ぶこと」から見た心理療法の治療的意義は、心理療法の多くの側面へと適用できるだけでなく、第 8 章で明らかにしたように、広く一般の人間の健康や成長において重要な要素なのである。本研究では、このような心理的健康における「遊ぶこと」というテーマに対して、Gendlin の交差概念の観点から言及し、この概念の特徴である方法的な側面から、言葉遊びの性質を活かしたなぞかけフォーカシングという具体的な方法を提案し、実際のセッション記録からその特徴を明らかにしたのであった。

第 9 章において参照した「フェルトセンス・リテラシー」いうフォーカシング指向のムーブメントは、Marry Hendricks-Gendlin の提唱を出発点とし、現在 The International Focusing Institute(TIFI)の支援のもと、世界規模で取り組まれているプロジェクトの 1 つである。Hendricks(undated)は TIFI の公式ホームページ内の「フェルトセンス・リテラシー」の紹介サイトにおいて、フォーカシングという取り組みが考案された当初の大きな目標(ビジョン・ステートメント)として「フォーカシングを人々に、あるいはすべての国々、文化、社会階級の人口における『かなりの割合』にもたらすこと」ということをあげていたが、現時点ではそれはまだ達成されているとは言えないと指摘している。そして、なぜ人々がフォーカシングを知る機会が少ないのかについて、次の 3 点の理由を挙げている(Hendricks, undated)。

まず 1 点めは、フォーカシングの実践の主たる手段が、秘匿的なカウンセリング・オフィスの中であったということである。フォーカシングは心理療法の場面で発展したため、その中で何が行われているのかが周知されにくいという構造がある。2 点めは、フォーカシングを学ぶために時間を要するであり、フォーカシング・トレーナーになるためには、一般的に数年を要することに起因すると Hendricks は指摘する。また 3 点めは、フォーカシングが言葉や概念では記述するのが難しいということである。Hendricks が「人々に『フォーカシングとは何ですか？』と尋ねられると、私たちのほとんどは舌が絡んでしまうか、あるいはその効用について話をします」と記述しているように、フォーカシングのプロセスを、それを知らない他の誰かには説明しづらく、そのため、ある

人がフォーカシングを体験したことがあっても、その人が所属している職場やコミュニティ、家族にはフォーカシングのことを話さない傾向にあると指摘されている。

Hendricks は、この①心理療法という制約、②時間のかかる学習、③フォーカシングについて話すことの難しさ、という３つの理由から、フォーカシングがすべての国々の「かなりの割合」に向けた世界規模のムーブメントになり得なかったと振り返る。Hendricks の指摘の通り、心理療法を成り立たせているその守秘性が、閉鎖性や排他性となり、かつその学習の難しさや、フォーカシングを説明すること、あるいは背景となる Gendlin の哲学自体の難解さも影響も考えられる。このような状況では、フォーカシングの普及に関して望ましい状況とは言えないであろう。

この自体を進展させるため、現在では新しいアプローチとして、“Revolutionary Pause(Hendricks-Gendlin, 2003)”という取り組みや、エクアドルの Herndández による「ポーズ(the pause)」を教える取り組みを紹介し、それらの実践を支える「フェルトセンス・リテラシー」という用語を提示したのであった。Hendricks は、“literacy”、つまり「読み書き能力」というアナロジーを用いることで、フォーカシングを、元々人間にとって「自然なプロセス」であり、すべての人が自然に有しうる「最も基本的なレベル」に位置づけて捉えている(Hendricks, undated)。実際、本来の意味での「読み書き能力」についても「最初の取り組みから 100 年かかり、まだ完全ではない」ように、フェルトセンス・リテラシーという構想も、その教育的な観点をもつという性質上、継続的な取り組みを要すると記述し、世界的なプロジェクトが進行している。

岡村(2013b, 2014)が報告しているように、本研究で提案した「なぞかけフォーカシング」という取り組みもまた、フォーカシングのエッセンスをより多くの人々へとわかりやすいかたちへ普及させることの１つのねらいとした取り組みである。なぞかけという既知のモチーフを題材としてフォーカシングのエッセンスを提示することで、言葉遊びの媒介としてその取り組みやすさを担保しながら、フォーカシングで「遊ぶ」という側面をより強調することで、遊びながら学ぶことの重要性を提案している。これは、心理療法的な面接でのフォーカシング的な枠組みのさらなる精緻化だけでなく、Hendricks らがその問題意識から提唱し続けたフォーカシングのさらなる普及や新たな可能性に貢献すると考えられる。

なお、上記のように、フェルトセンス・リテラシーというムーブメントは 2000 年代以降になって展開されている経緯があるが、その骨子はフォーカシングが考案された時点

ですでに含意されていると指摘できる。それはフォーカシングのもっている「教えられる(teachable)(Gendlin, 1981)」という特徴に関連している。

第 1 章で確認したように、フォーカシングは心理療法の効果研究がその開発契機となっているが、心理療法を効果的に利用することのできるクライエントが自然に行っているある種のプロセスを、それが自然には行えていない人々が行えるように教えられるようにした一連の手続きが、フォーカシングのステップである。伊藤(2000)や Purton(2004)が記述しているように、Gendlin 自身が「教えられる手続きとしてのフォーカシング」を開発していくにあたって、いくつかの修正を繰り返しており、1978 年に Everest House 社から刊行された *Focusing* (Gendlin, 1978)と、1981 年に Bantam books 版として刊行された *Focusing (2nd ed.)*(Gendlin, 1981)とでは、教示のためのステップに関して内容が修正されている。

邦訳版『フォーカシング』 (1982)のあとがきにおいて、邦訳は当初、初版(Gendlin,1978)をもとに訳出が進められていたが、出版直前に第 2 版(Gendlin, 1981)が届き「とくにフォーカシングの手引きの部分が全面的に書き改められ、たいへんわかりやすくなっていた(p.234)」と記述されており、バンダム・ブックス版が作成されるにあたり、手続きをさらにわかりやすくする工夫が成されていることがわかる。

なお *Focusing* (Gendlin, 1978)は、ハードカバーで刊行された 1978 年の初版の時点で、一般の読者を想定したセルフヘルプのための書籍として発表されていたが、1981 年の第二版(*Focusing (2nd ed.)*)では、小さなペーパーバック版として再販されている。日本の規格でいう新書サイズと同様の大衆向けのこのペーパーバック規格は、新聞売店や地下鉄や鉄道売店、バス・ターミナル、空港ターミナル、ドラッグ・ストア、スーパーマーケットから、さらにはペーパーバック専門店や一般書店、大学の書店など、非常に多様な流通経路をもち (金平,1973)、このようなペーパーバック体裁での刊行自体が、フォーカシングをより幅広い層の読者へ、つまり人口の「かなりの割合」へと届ける取り組みの一翼を担ったと指摘できよう。

その後も、Gendlin 自身の実践の展開に限って指摘するとしても、フォーカシングを夢のワークへ応用する取り組み(Gendlin, 1986)や、フォーカシングを心理療法へと「還元」するという取り組み(Gendlin,1996)による“focusing oriented therapy(FOT)”のような臨床実践の分野におけるフォーカシングの適用についても提唱されている。

心理療法実践におけるフォーカシング研究の潮流の一方で、「より多くの人にフォーカ

シングを伝えるためのもの」というフォーカシングが元来有していた「学習可能性(teachability)」という特徴が、より強調されたものが「フェルトセンス・リテラシー」という発想だと言えるだろう。創造的思考にフォーカシングを応用した“Thinking at the Edge(TAE)”も、フォーカシングと同様に「教えられる(teachable)」手続きであることを強調されている(Gendlin, 2004,)。フォーカシング指向のワークは、第 8 章でも明らかにしたように、心理療法家が用いる専門的な技術としての側面だけでなく、より一般に教えられるもの、「方法」としての特徴がその開発当初から強調され、かつそのための工夫がなされてきたのである。

第Ⅲ部で論じたように、なぞかけの構造に含まれている、メタファーやアナロジカルな推論が有する共通の特徴は、学習場面においてより活用されている(Holyoak & Thagard, 1995)。このような観点を含んだかたちで考案されたなぞかけフォーカシングは、新たな理解を創造する Gendlin の交差概念の方法的な特徴を、なぞかけというモチーフを用いることで、フォーカシングが本来有している「学習可能性」をさらに引き出すということを促す取り組みであると指摘できる。

3. メタファーと交差によって「新たな理解」を共有するプロセス

また、第Ⅱ部において論じたメタファーの使用というテーマをめぐっても、フォーカシングを「学ぶ」というプロセスをさらに検討するための示唆が見受けられた。村川(2012)が指摘するように(p.330)、メタファーやアナロジーなどの推論プロセスを含む、体験的な理解を促す実践的な場面に特に「経験の伝達」や技術の「熟達」に寄与する言語使用についいて、生田(1987/2007, 2011)は、これらを「わざ言語」という用語で呼び、わざ言語を「指導者と学習者との間に『身体感覚の共有』と呼ぶべき関係性の構築を促す媒介物」として捉え、その機能についての検討を進めている。

生田(1987/2007)は、歌舞伎や能などの古典芸能や、茶道や武道、声楽など芸事において「わざ」の教授過程で用いられる特殊な言語運用に注目し、それらを通常の記述言語と対比させ、「わざ言語」と捉えている。わざ言語の例として、生田は劇作家の竹内敏晴のいくつかの記述を引いている(竹内,1987)。竹内(1987)は、あるオペラ歌手がレッスンで述べた「声を葉の裏に置く」という表現や、伝統的な舞踊の稽古の際に、古老が若い弟子に対して、扇の開き方を「ただ差し出すのではなく、天から舞い降りる雪を受ける」という言い方で伝えることを挙げる。

わざの伝承過程では、師匠の巧みなわざを支える身体運用のための「型」を、弟子が

真似ることでそのわざが習得されていくが、「型を取るということは、その型をなしているイメージを受け取る、あるいは自分らのうちに発見する、そのイメージをかもしだすからだを、自らのうちに発見すること(竹内, 1987, p.151)」であり、舞踊の例であればそのように扇が「開いた途端にふっとからだが、そのイメージによってピタッと決まって動いた時、その型が受けつがれたということになる」(p.151)。

動きの正確さを伝えるためであれば、例えば「腕を 60 度の角度しながら何秒かけて扇を開いて」というように客観的に捉えられる「形」を記述的に表現すればいいはずであるが、わざの伝承プロセスでは上記のように、師匠に身体的に感じられ、またイメージされている「天から舞い降りる雪を受ける」というような「比喩的な表現」を用いる。生田は「声楽あるいは日本舞踊や歌舞伎といった各種の「わざ」の世界での教授プロセスでしばしば用いられる特殊な比喩的な言語表現は、理論的な専門用語でも、単に遠回しの表現でもなく、学習者にある望ましい動作を生じさせることを目的とした、いわば『わざ』言語と呼ぶことがふさわしい」(生田, 1987, p.97)と論じている。

生田は、ここで、学習プロセスにおいて「新しく知るべき知識と比喩表現の間に類似性を積極的に作り出す」という新しい知識と比喩との間の相互作用的な側面への注目を参照しており、「比喩は学習者に、そこに隠れている、あるいは埋もれている類似性を発掘させ、そこに注目させる働きをする。すなわち学習者は比喩によって推論活動に誘われる(生田, 1987, p.98)」と論じている。また「『わざ』の習得プロセスが、学習者の身体全体を通してのプロセスであるからこそ比喩のこうした相互作用的な側面が、学習者にある種の動作を生じさせ、彼の動作を改善するように機能する(同、p.99)」として、わざ言語が比喩表現であるからこそ、学習者に新しい知識や技術をもたらすことを強調している。

このような比喩表現は、最初から学習者に理解されるとは限らない。「比喩的な言語表現はしばしば学習者を当惑の境地に追いやる。本来は異なる別の系統の表現を示されると、学習者は自分が一体何を指示されるのか理解できず混乱する(p.99)」ことになる。しかし、理解できないからこそ、そこに一体どのような意味があるのかを問い続ける必要が出てくるのである。「『なぜに師匠はある『形』を示すのにこのような表現を用いるのであろうか』という疑問を出発点として、比喩によって喚起されたイメージを頼りに、自分の知るべき「形」を身体全体で探っていこうとする(p.99)」。

わざが伝達され、学習者の熟達が進んでいくという過程で、わざ言語という比喩的表

現がもつ一種謎めいた「わからなさ」のような側面が、学習者自らが問いを成し、自らのうちに新しい知見や技術を発見させるための動因となっている。また、わざ言語という発想は、伝統芸能や武道のような身体の技術に限らず、看護実践などの対人援助の技能に関しても援用されている(生田,2011)。

学習者に「類似性を発掘させ、そこへ注目させる働きをする」という比喩表現の特徴は、Gendlin のメタファーの捉え方における重要な機能(Gendlin, 1991/1995)として取り上げている。メタファー表現によって、状況と言語のあいだの交差が生じ、それによって類似性が新たに創造されるのである。また、発声する際に「声を葉の裏に置く」と述べ、「天から舞い降りる雪を受ける」ように扇を扱うというような表現はすべてメタファーであるが、本研究の第 9 章での議論で指摘したように、これらのような表現を通して「あたかもそうであるかのように(as if)」試してみるという、メタファーが有するある種の仮想性(鍋島, 2017)を伴う理解を試していくプロセスこそ、学習者の技術の熟達に大きく貢献していくと指摘できる。

実際に、竹内(1987)は「歯の裏に声を置く」という表現に対して「それは、学問的ないしは文字による記述の目から見たらば、メタファーということになるかもしれないが、それを発した主体にとってみると、事実そのものなのだ(p.146)」と記述する。単なる修飾ではなく、あたかもそうであるかのように理解し、捉えてみることが必要であるというわざ言語の観点から捉えれば、第 9 章で取り上げた Rogers の共感的理解(Rogers,1959)についての「クライエントの私的世界をそれが自分自身の世界であるかのように感じとる」という表現は、Rogers にとっての共感的理解というその主観的体験を独自に言い表した、ある種のわざ言語と捉えることも、その着想を捉えるための手がかりとなるであろう。

これまで体験したことのない体験を、確かに共有することがありながら、そこには常に、新しさ(novelty)があり、創造性がある。このような対人関係的な相互理解の過程において、第 9 章で取り上げた他者の異なった体験を理解する際に用いられる Gendlin の「共に感じること(co-feeling)」という発想や対人関係的な相互作用における交差によってお互いにとっての新しさを見出すという着想は、この「わざ言語」という対人的な相互作用のプロセスや熟達の方法、またメタファーを用いた新たな理解の創造やその共有という、本研究で取り上げてきた心理療法的な課題やさらに広範の創造的な思考方法の熟達についての研究について示唆的であると指摘できる。

4. まとめ：交差概念のもつ実践研究への示唆

以上、本研究のこれまでの議論について、(1)メタファーとその意味を問うことをめぐる心理療法的な意義、(2)「遊ぶ」という観点から捉えるフォーカシングの普及やその学習可能性をめぐるなぞかけフォーカシングという実践の有用性、(3)経験の伝達や身体感覚の共有、新たな理解の創造など、心理療法や熟達のプロセスに関する研究におけるメタファーの使用や交差概念からの示唆、という3つの観点から、総合的に考察を試みた。

メタファーの使用は、心理療法プロセスだけでなく、日常場面を含むさまざまな状況において見受けられ、人間の教育や成長、熟達、創造的な過程、心理療法的な進展などに影響を与える大きな要因である。Gendlin は交差概念の着想から、メタファーをめぐるこれまでの知見における身体性への着目をさらに進展させ、誰もが学び、活かすことのできる方法としてのフォーカシング的な実践を考案し続けてきた。Gendlin の哲学的な知見を参照することによって、新しい実践を考案し、我々の体験をめぐる知をさらに拡張していくことが可能となると考えられる。

第2節　課題と今後の展望

最後に、本研究の課題と、今後の展望についてまとめる。

まず本研究では、フォーカシング(Gendlin, 1981)の考案した簡便法(short form)を参照し、フォーカシングのプロセスにおけるメタファーとしてのハンドル表現についての機能を検討し、また第Ⅲ部におけるなぞかけフォーカシングの方法を考案する際にもこの簡便法を参照することで、各ステップの機能を検討している。しかし、この6つのステップの最初にある「クリアリング・ア・スペース(Clearing a space)」という方法に関しては、池見(1997)が指摘するように、このステップのみで単独でワークとして活用されているという点を加味し、考察の対象から除外している。「間を置く(clearing a space)」(池見,1997)という言い回しにすでに顕著なように、気がかりをどこかの場所に「置く」あるいは「距離を取る」というクリアリング・ア・スペースのプロセスにも、メタファー表現による体験への作用の側面が大いにあると考えられる。池見(2010)の指摘するように、クリアリング・ア・スペースの臨床的な応用性を踏まえた上でも、今後は、Gendlin のメタファー論から見たクリアリング・ア・スペースの意義について検討する必要があると考えられる。

次に、本研究では特に第Ⅲ部(第7、8章)において、なぞかけフォーカシングのプロセ

スについて、実際のセッション記録をもとに検討を行っている。各章で提示した２つのセッションは、特に臨床群を対象とした心理療法面接ではないため、なぞかけを用いたフォーカシングについての臨床的な意義や、交差概念の臨床的な意義を検討するためには、臨床実践における事例研究など、臨床群を対象とした研究を行う必要があると考えられる。本研究の関心領域は、状況についての新たな理解や創造的な思考など、一般的な問題解決場面やセルフヘルプの領域であり、必ずしも臨床的な問題行動などへの介入を目的とはしていないが、心理療法面接におけるメタファーの機能や、交差の機能のさらなる検討のためには、心理臨床的な知見を踏まえた研究が求められる。

また本研究で用いた２つのセッション例は、どちらも単発のフォーカシング・セッションであり、かつ、なぞかけフォーカシングという方法や交差の創造的な側面の特徴について検討するという本研究の目的により、なぞかけフォーカシングのステップを用いる場合に典型的なプロセスの例や、状況についての新しい理解の進展が促されている様子が顕著に見受けられるセッション例を参照している。このようなセッション例の振り返りにより、本研究では Gendlin の交差概念がもつ理論的な論述と、その実際的な方法としての活用の仕方や新たなステップの開発について検討することで、理論と実践を架橋する探索的な取り組みが可能となった。

その一方で、なぞかけフォーカシングの有するその教育的な意義や学習可能性をさらに検討していくためには、継続的なセッションや、定期的な面接、トレーニングを通したフォーカシング的能力への影響や、セッションの難航例からなぞかけフォーカシングのもつ特徴やその限界について、実践例の詳細な分析や、本章で取り上げた「わざ」や「型」の議論を踏まえた上で、さらに考察していくことができるだろう。

本研究では交差の機能を促すモチーフとして、メタファーと共通の構造をもつ言葉遊びである「なぞかけ」に着目し、なぞかけの言い回しを利用したフォーカシングのワークを開発するに至った。一方で、交差という特徴がそこに含意されているならば、なぞかけというモチーフではない何か別の対象を利用しても、フォーカシングのプロセスを促すステップを再現できるはずである。重要なのはなぞかけの言い回しそれ自体ではなく、そこで体験へと作用するその仕方である。

このような観点から、Gendlin の理論的知見を活かしたさらなるフォーカシング実践の考案が期待される。本研究ではフォーカシングのプロセスの特徴への理解を際立たせるために、メタファーの使用や交差概念を用いた。言わば、フォーカシングに対して交

差概念を「応答的(responsive)」(Gendlin, 1997d)に用いることで見出されたのがなぞかけフォーカシングというプロセスである。Gendlin 哲学の他の概念に着目し、その概念をさらに応答的に用いれば、本研究で明らかにしたのとはまた別の種類のフォーカシングの特徴、フォーカシング実践が立ち現れてくるはずである。別の概念に着目することを通して、別の特徴の際立ったフォーカシング技法を考案できる可能性が開かれている。

最後に、Gendlin の哲学自体に対する批判的な言及の必要性について補足しておく必要がある。本研究は、Gendlin の交差概念の理解とその実践応用をさらに展開させることが主たる目的となっており、Gendlin の哲学概念やその着想自体への批判的な検討は議論の対象とはしなかった。一方で、第 3 章でも概観した通り、Gendlin の文献の時代的な推移によってメタファーの捉え方に齟齬が見受けられ、またこれは Gendlin の論文全般において見受けられ、特に本研究では第 5 章での取り組みがこれにあたるが、参照文献が明示されず自身の論理を展開するというその Gendlin 自身のスタイルのため、Gendlin の発想のもととなった先行研究へとアクセスし背景的な理解を踏まえた上での読解が困難となる場合も多い。

もちろん、心理療法を含む「実践」や Gendlin 自身の「体験」からその論を展開しているということが彼の特徴であるとしても、実際には交差概念においても、認知意味論や Wittgenstein の言語哲学への言及など、先行研究を踏まえ上でその概念が構成されていることには疑いの余地はない。Gendlin 哲学の背景にある、彼の臨床実践以外の理論的な背景を追いながら、批判的な検討を含むさらなる精読を継続していくことが、フォーカシングという取り組みをさらに進展させていくためには必須であると考えられる。

このように、Gendlin の哲学はその実践的な性質上、他の哲学的な知見や心理療法論だけでなく、身体論、言語学、教育学、民俗学、あるいは認知科学などの学際的な分野と関連しており、よって本研究も、このような学際な知見を参照することで展開するに至った。今後もこのような分野横断的な取り組みによって、さらなる知の交差を通じて、豊かな知見が生成されていくことが求められよう。

文献

阿刀田高 (2006). ことば遊びの楽しみ 岩波新書.

アリストテレス (1992). 戸塚七郎(訳) 弁論術 岩波文庫 .

アリストテレース / ホラーティウス(1997). 松本仁助・岡道男 (訳) 詩学 / 詩論 岩波文庫 .

Augarde, T. (1984). *The Oxford guide to word games.* New York: Oxford University Press. (新倉 俊一 (監訳)(1991). 英語ことば遊び事典 大修館書店.)

Barker, P. (1985). *Using metaphors in psychotherapy.* New York: Brunner/Mazel. 堀恵・石川元(訳) (1996). 精神療法におけるメタファー 金剛出版.)

Breuer, J. and Freud, S. A. (1893/1995). "On the psychical Mechanism of Hysterical Phenomena; Preliminary Communication", in Freud, S. and Breuer, J. (1895/1955*) Studies on Hysteria,* The *Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. 2, London; Hogarth press and the institute of Psycho Analysis.

Carroll, L. (1865/2006). *Alice's adventures in wonderland & Through the looing-glass.* New York: Bantam Books. (高橋康也・高橋迪(訳)(1988). 不思議の国のアリス 河出文庫/ 河合祥一郎(訳) (2000). 不思議の国のアリス 角川文庫.)

土江正司 (2005). こころの天気−体験過程の象徴化−. 伊藤義美(編著) フォーカシングの展開. ナカニシヤ出版 pp.63-73.

Cornell, A. W. (2013). *Focusing In Clinical Practice.* W.W. Norton & Company, New York. 大沢美枝子・木田麻里代・久羽康・日笠摩子(訳) (2014) 臨床現場のフォーカシング 変化の本質 金剛出版.

Cooper, M. (2008). *Essential Research Findings in Counselling and Psychotherapy: The Facts are Friendly,* London: Sage Publications.

Dilthey, W. (1910/2002). Drafts for a critique of historical reason section one: Lived experience, expres- sion and understanding. R. A. Makkreel & F. Rodi (Eds.), *Wilhelm Dilthey selected works vol. III, the formation of historical world in the human sciences.* (R. Makkreel & W. Oman, Trans.). Princeton: Princeton University Press. pp. 213–270.

読書猿 (2017). アイデア大全 フォレスト出版.

Fink, B. (1995). *The Lacanian subject:Between language and jouissance.* Princeton, NJ: Princeton University Press. (村上靖彦 (監訳) 小倉拓也・塩飽耕規・渋谷 亮 (訳) (2013) 後期ラカン入門 : ラカン的主体について 人文書院.)

Freud, S. (1921/1955). Group Psychology and the Analysis of the Ego. Strachey, J. (Ed) *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, London; The Hogarth Press and The Institute of Psycho-Analysis. *Vol.18,* pp.65-143.

深田智・仲本康一郎 (2008). 概念化と意味の世界 研究社.

Gardner, M. (1960). *The annotated Alice: Alice's adventures in wonderland & Through the looking glass by Lewis Carroll.* New York: Bramhall House. (高山宏(訳) (1980). 不思議の国のアリス 東京出版.)

Gardner, M. (1990). *More annotated Alice: Alice's adventures in wonderland & Through the looking glass by Lewis Carroll.* New York: Random House. (高山宏(訳) (1994).新注 不思議の国のアリス 東京出版)

Gendlin, E. T. (1962/1997). *Experiencing and the Creation of Meaning*. Evanston: Northwestern University Press. (Gendlin, E, T. (1962) *Experiencing and the Creation of Meaning*. New York: The Free Press of Glencoe.)

Gendlin, E.T. (1964). A theory of personality change. P. Worchel & D. Byrne (Eds.), *Personality change* New York, NY: John Wiley & Sons. pp. 100–148.

Gendlin, E. T. (1968). The Experiential response. Use of Interpretation in Treatment. Grune & Stratton, New York, pp.208-277.

Gendlin, E.T. (1978). *Focusing.* New York: Everest house.

Gendlin, E.T. (1981). *Focusing (2nd ed.).* New York: Bantam Books. (村山正治・都留春夫・村瀬孝雄(訳) (1982). フォーカシング 福村出版.)

Gendlin, E. T. (1986). *Let your body interpret your dreams*. Illinois: Chiron. (村山正治訳 (1988).夢とフォーカシング 福村出版.)

Gendlin, E.T. (1987). *Thinking after distinctions.* Hidegger Conference, George Mason University, Dept. of Philosophy.

Gendlin, E. T. (1991). Thinking beyond patterns: body, language and situations. In B. den Ouden & M. Moen (Eds.), *The presence of feeling in thought*. New York: Peter Lang. pp.25-151.

Gendlin, E. T. (1991/1995). Crossing and Dipping: someterms for approaching the interface between natural understanding and logical formulation. *Minds and Machines. 5*(4), 547-560. (Gendlin, E. T.(1991): Crossing and Dipping: Some Terms for Approach- ing the Interface between Natural Understanding and Logical Formation. M. Galbraith and W. J.

Rapaport(Eds.)"Subjectivity and the Debate over Computational Cognitive Science" (pp. 37-59). Buffalo State University of New York, Center for Cognitive Science.)

Gendlin, E.T. (1992). The wider role of bodily sense in thought and language. Sheets-Johnstone, M. (Ed.) *Giving the body its due*, State University of New York.Press, Albany. pp.192-207.

Gendlin, E.T. (1993). Word can say how they work. Crease R.P. (Ed.) *Proceedings, Heiddeger conference,* Stony Brook: State University of New York. pp.29-35.

Gendlin, E. T. (1996). *Focusing-Oriented Psychotherapy*. New York: Guilford Press. (村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子(監訳) (1998). フォーカシング指向心理療法(上)体験過程を促す聴き方 金剛出版/村瀬孝雄・池見陽・日笠摩子(監訳)(1999). フォーカシング指向心理療法(下)心理療法の統合のために 金剛出版).

Gendlin, E. T. (1997a). *A Process Model*. New York: The Focusing Institute.

Gendlin, E. T. (1997b). How Philosophy Cannot Appeal to Experience, and How It Can. *Language beyond Postmodernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy*. Levin, M. (Ed) Evanston; Northwestern University Press, pp.3-41.

Gendlin, E. (1997c). Reply to Johnson, *Language beyond Postmodernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy,* Levin, M. (Ed) Evanston; Northwestern University Press, pp168-175.

Gendlin, E.T. (1997d). The Responsive Order: A new empiricism. *Man and World*, *30*(3),383-41.

Gendlin, E. T. (2004). Introduction to 'Thinking at the Edge'. *The Focusing Folio. 19*(1): 1-8.

Gendlin, E.T. (2009a). What first and third person processes really are. *Journal of Consciousness Studies, 16*, No. 10–12, 332–362.

Gendlin, E.T. (2009b). We can think with the implicit, as well as with fully formed concepts. In Karl Leidlmair (Ed.) *After cognitivism: A reassessment of cognitive science and philosophy*. Springer, pp.147-161.

Gendlin, E. T. (2012). Implicit Precision. Radman, Z. (Ed.)*Knowing without Thinking: The Theory of the Background in Philosophy of Mind,* Basingstoke: Palgrave Macmillan. pp.141-166.

Gendlin, E.T., J. Beebe, J. Cassens, M. Klein & M. Oberlander (1968). Focusing ability in psychotherapy, personality and creativity. In J.M. Shlien (Ed.), *Research in psychotherapy*. Vol. III, pp. 217-241. Washington, DC: APA.

Gentner, D. (1983). Structure-mapping: Theoretical framework for analogy. Cognitive Science, 13, 295-335.

Gibbs, R.W. (1994). *The poetics of mind：figurative thought, language, and understanding* , New York, Cambridge University Press. (辻幸夫,井上逸兵（監訳）小野滋・出原健一・八木健太郎(訳) (2008). 比喩と認知:心とことばの認知科学 研究社.)

Gilligan, C. & Wiggins, G. (1987). The origins of morality in early childhood relationships. Kagan, J. & Lamb, S. (Ed.) *The emergence of morality in young children.* Chicago, IL: University of Chicago Press. pp.277-305.

濱野清志（1990). 臨床治療場面におけるメタファー. 芳賀純・子安増生（編著） メタファーの心理学. 誠信書房. pp.179-199.

羽野ゆつ子（2007). アナロジー思考の多様性　楠見孝（編著）メタファー研究の最前線 ひつじ書房 pp.441-462.

Herndández,W.& Grafanaki, S. (2014). *Social Development with Focusing through the Pause.* The Folio. *25*(1), 172-185.

Hendricks, M.N., (1986). Experiencing Level as a Therapeutic Variable. *Person-Centered Review.* pp.141-162　Sage Publications, Inc. (大田民雄（訳）(1991). 治療変数としての体験過程レベル. フォーカシング・セミナー　福村出版. pp.150-174.)

Hendricks-Gendlin, M. (2003). Focusing as a force for peace: The revolutionary pause. Keynote address for the 15th Focusing International Conference, Germany.

Hendricks-Gendlin, M. (undated). *Felt Sense Literacy.* Retrieved from (http://www.focusing.org/literacy/) (November 27, 2017)

平野智子（2016). セラピスト・フォーカシングでは新しいクライアント理解はどのように生じるのか：体験過程理論からの考察 *サイコロジスト:関西大学臨床心理専門職大学院紀要　6*, 75-85

Hoffman, M. (1976). Empathy, Role-taking, Guilt, and Development of altruistic Motives. Likona, T. (Ed.) *Moral Development and Behavior.* New York: Holt Rinehart, and Winston. pp.125-143.

ホイジンガ（1973). 高橋英夫（訳）ホモ・ルーデンス 中公文庫 .

Holland, J.H., Holyoak, K.J., Nisbett, R.E. and Thagard, P.R (1986). Induction: Processes of inference, Leaning , and Discovery. Cambridge: The MIT press.

Holyoak, K.J. & Thagard, P. R. (1995). *Mental Reaps: Analogy in Creative Thought,* Cambridge: The MIT press. (鈴木宏昭・河原哲雄(監訳) (1998). アナロジーの力 認知科学の新しい探求 新曜社.)

細谷功（2011). アナロジー思考 東洋経済新報社.

池見陽 (1991). 超個、失個、交差と意味形成〜井上・白岩論文へのコメント〜 人間性心理学研究, *9*, 82-87.

池見陽 (1997). セラピーとしてのフォーカシング:3 つのアプローチ 心理臨床学研究 15(1), 13-23.

池見陽 (1999). あとがき ユージン・ジェンドリン・池見陽(著)、池見陽・村瀬孝雄(訳) セラピープロセスの小さな一歩–フォーカシングからの人間理解 金剛出版 pp.243-245

Ikemi, A. (2005). Carl Rogers and Eugene Gendlin on the Bodily Felt Sense: What They Share and Where They Differ, Person-Centered and Experiential Psychotherapies, *4*(1): pp.31-42.

池見陽 (2010). 僕のフォーカシング=カウンセリング:ひとときの生を言い表す 創元社.

Ikemi, A. (2013.) You can inspire me to live further: Explicating pre-reflexive bridges to the other. In J. Cornelius-White, R. Motschnig-Pitrik, & M. Lux (Eds.), Interdisciplinary handbook of the person-centered approach: Research and theory. New York: Springer. pp.131-140.

池見陽 (2016a). 「感じる」とは如何にあるのか 池見陽(編著) 傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング 感じる・話す・聴くの基本 第 2 章 ナカニシヤ出版 pp.39-51.

池見陽 (2016b). セラピストが聴くとき何が起こるのか 池見陽(編著) 傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング 感じる・話す・聴くの基本 第 4 章 ナカニシヤ出版 pp.75-97.

池見陽 (2017). フォーカシング *臨床心理学* 第 17 巻 第 4 号 pp.459-460.

Ikemi, A. (2017). The Radical Impact of Experiencing on Psychotherapy Theory: An Examination of Two Kinds of Crossings. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies, 16* (2) 159-172.

Ikemi A., Yano, K., Miyake, M., Matsuoka, S. (2007). Experiential Collage Work: Exploring Meaning in Collage from a Focusing Oriented Perspective. *Journal of Japanese Clinical Psychology 25* (4), 464-475.

池見陽・ラパポート, L. 三宅麻希 (2012). アート表現のこころ—フォーカシング指向アートセラピー体験 etc. 誠信書房.

生田久美子 (1987/2007).「わざ」から知る—コレクション認知科学 6 東京大学出版会.

生田久美子 (2011). 「わざ」の伝承は何を目指すのか–task か achievement か わざ言語—感覚の共有を通しての学びへ 慶應義塾大学出版会.

井上達彦 (2017). 模倣の経営学 実践プログラム版 日経 BP 社.

伊藤義美 (2000). フォーカシングの空間づくりに関する研究 風間書房.

Johnson, M. (1987). The Body in The Mind. Chicago: University of Chicago press. 菅野盾樹・中村雅之(訳)(1991). 心のなかの身体 紀伊国屋書店.

Johnson, M. (1997) .Embodied Meaning and Cognitive Science, Language beyond Postmodernism: Saying and Thinking in Gendlin's Philosophy, Levin, M. (Ed) Evanston; Northwestern University Press, 148-168.

金平聖之助 (1973). 世界のペーパーバック　出版同人.

Karali, A., Zarogiannis, P. (2014). The FOT View of Change: What Is Therapeutic about Therapy? Madison, G. (Ed.) *Theory and Practice of Focusing-Oriented Psychotherapy.* Jessica Kingsley Publishers.

加藤敬介 (2010). フェルトセンスの日本語訳は“こころ”？ 日本フォーカシング協会ニュースレター *13*(1).

賀陽濟 (1989). 言葉遊び　北山修・妙木浩之(編) 現代のエスプリ　言葉と精神療法　264, 170-176.

河﨑俊博 (2014). Eugene Gendlin の理論及び実践に関する研究動向. 関西大学心理臨床カウンセリングルーム紀要 *5*, pp.19-27.

Kiesler, D. J. (1971). Patient experiencing level and successful outcome in individual psychotherapy of schizophrenics and psychoneurotics. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 37*, 370–385.

北山修 (1993). 言葉の橋渡し機能およびその壁 岩崎学術出版社.

Klein M.H., Mathieu, P.L., Gendlin, E.T., & Kiesler, D.J. (1970) *The Experiencing Scale: A Research and Training Manual.* Madison: University of Wisconsin Extension Bureau of Audio visual Instruction.

小林孝雄 (2010). 共感 岡村達也・小林孝雄・菅村玄二(著)カウンセリングのエチュード 反射・共感・構成主義 第２部 遠見書房 pp.69-145

子安増生 (1980). 児童における比例概念の発達過程 (1) 序論 愛知教育大学教科教育センター研究報告, *4,* 23-25.

Kundera, M. (1984). *The Unbearable Lightness of Being.* New York: Harper and Row.　西永良成(訳)(2008). 存在の耐えられない軽さ (池澤夏樹=個人編集 世界文学全集) 河出書房新社.

楠見孝 (2001). アナロジーとメタファー 辻幸夫(編) ことばの認知科学事典 大修館書店 pp. 364-370

Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by.* Chicago, IL: University of Chicago Press.

Lakoff, G. (1987). *Women, Fire and Dangerous Things.* Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, G. (1993). The contemporary Theory of Metaphor. Ortony, A. (ed.) *Metaphor and thought.* 2nd ed., pp..202-251. Cambridge: Cambridge University Press.

Levin, D. (Ed.) (1997). *Language Beyond Postmodernism Saying and Thinking in Gendlin Philosophy* Evanston: Northwestern University Press.

前田重治・北山修 (2012). ダイアローグ:精神分析と創造性 遠見書房.

Martin, J. Zcummings, A. L. &Hallbrg, E. T. (1992). Therapist's intentional use of metaphor: memorability, clinical impact, and possible epistemic/motivational functions. *Journal of Clinical and Consulting Psychology, 60*, 143-145.

Maslow, A. H. (1968). *Toward a Psychology of Being(2nd ed.)*. London: D. Van Nostrand Company, Inc.

松石佳奈 (2011). 心理療法におけるメタファー. 心理臨床学研究 *29* (4), 409-419.

松本卓也 (2015). 人はみな妄想する―ジャック・ラカンと鑑別診断の思想 青土社.

McMullen, L. M. (1989). Use of figurative language in successful and unsuccessful cases of psychotherapy; Three comparisons. *Metaphor & Symbolic Activity*, *4*, 203-225.

三村尚彦 (2011). そこにあって、そこにないもの―ジェンドリンが提唱する新しい現象学― フッサール研究 *9*, 15-27.

三村尚彦 (2015). 体験を問いつづける哲学 第１巻 初期ジェンドリン哲学と体験過程理論 ratik (電子書籍 PDF 版 ver1.0).

三好暁光 (2004). 健康と病態 心理臨床大事典[改訂版] 培風館 pp. 149-151.

村上靖彦 (2010). メタファーという治療装置 フォーカシング・フッサール・よしもとばなな 現代思想 特集＝現象学の最前線 青土社 *38* (7), 236-245.

村川治彦 (2012) . 経験を記述するための言語と論理–身体論からみた質的研究 看護研究 Vol. 45, No4, 324-336.

村里忠之 (2005).「TAE: Thinking At the Edge (辺縁で考える)」あるいは「未だ言葉の欠けるところ(Wo noch Worthe fehlen) 伊藤義美 (編著) フォーカシングの展開 ナカニシヤ出版 pp.33-47.

村山正治 (監) 日笠摩子・堀尾直美・小坂淑子・高瀬健一 (編) (2013) . フォーカシングはみんなもの 創元社.

妙木浩之 (2005). 精神分析における言葉の活用. 金剛出版.

森川友子 (2010). 身体症状へのフォーカシング的取り組みに関する一考察–「それはフォーカシングか」という議論に関して一 人間性心理学研究 *28* (1), 35-47.

森川友子 (2012). フェルトセンス 日本人間性心理学会(編) 人間性心理学ハンドブック 創元社 p.395

鍋島弘治朗 (2016). メタファーと身体性 ひつじ書房.

中村太戯留 (2007). 比喩の面白さを感じるメカニズムの検討 楠見孝 (編著) メタファー研究の最前線 ひつじ書房　pp.385-402.

中田行重・村山正治 (1994) .HANDLE-GIVING 法のフォーカシングへの適用. 九州大学教育学部紀要. 37, 21-29.

成田善弘 (1987). 転移と逆転移の観点から 精神分析研究 *31* (1) 7-12.

成田善弘 (2003). 精神療法家の仕事—面接と面接者—　金剛出版.

岡村心平 (2011). 暗黙的機能の観点から見た心理療法のための一考察–ジェンドリンのフォーカシング・セッションより– *サイコロジスト:関西大学臨床心理専門職大学院紀要*、*1*, 41-50

岡村心平 (2012). フォーカシングにおけるメタファー論 日本人間性心理学会第 31 回大会発表論文集 pp.120-121 (宇部フロンティア大学).

岡村心平 (2013a). なぞかけフォーカシング　村山正治 (監) : *フォーカシングはみんなのもの*　創元社. pp. 82-83

岡村心平 (2013b). なぞかけフォーカシングの試み–状況と表現が交差する「その心」–　*サイコロジスト:関西大学臨床心理専門職大学院紀要*　*3*, 1-10

岡村心平(2014). 関西部会活動報告:なぞかけフォーカシング・ワークショップワーク　日本人間性心理学会ニュースレター *81*, 7.

岡村心平 (2015). ジェンドリンにおけるメタファー観の進展 *サイコロジスト:関西大学臨床心理専門職大学院紀要* *5*, 9-18

岡村心平 (2016a). 言葉遊びの創造性–ジェンドリンの「交差」概念からの考察– *統合人間学研究* *1*, 33-63

岡村心平 (2016b). 日本語とフォーカシングの交差 :「漢字一字」と「なぞかけ」池見 陽 (編著) : *傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング : 感じる・話す・聴くの基本*　ナカニシヤ出版　pp. 189-197.

岡村心平 (2016c). 心理臨床とメタファー　池見陽 (編著) : *傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング : 感じる・話す・聴くの基本*　ナカニシヤ出版　pp. 59-66.

岡村心平 (2017a). 交差と創造性–新たな理解を生み出す思考方法– *人間性心理学研究*　*35*(1), 89-100.

岡村心平 (2017b). 共に感じること: 対人的な相互作用における交差に関する理論的研究　*サイコロジスト:関西大学臨床心理専門職大学院紀要*　*7*, 29-38.

岡村達也 (2010). 「理解すること」から「いま—ここに—いること」としての「反射」へ　岡村達也・

小林孝雄・菅村玄二(著)カウンセリングのエチュード――反射・共感・構成主義 第Ⅰ部　遠見書房 pp.9-67.

Perl, S. (2004). *Felt Sense: Writing With the Body,* Boynton: Cook Publishers, Inc.

Purton, C. (2004). *Person-Centred Therapy: The Focusing-Oriented Approach.* Palgrave Macmillan. (日笠摩子(訳) (2006).パーソン・センタード・セラピー:フォーカシング指向の観点から 金剛出版.)

Rappaport, L. (2009). Focusing-Oriented Art Therapy. Accessing the Body's Wisdom and Creative Intelligence. London and Philadelphia, Jessica Kingsley Publishers. (池見陽・三宅麻希(監訳) (2009). フォーカシング指向アートセラピー　誠信書房.)

Rennie, D. L, (1998). *Person-Centred Counselling :An Experiential Approach.* London, SAGE Publications.

Richards, I. A. (1936/1964). *The philosophy of rhetoric.* Oxford, UK: Oxford University Press. (石橋幸太郎（訳）(1961). 新修辞学原論 南雲堂.)

Romanyshyn, D. E. (1982). *Psychological life: From science to metaphor.* Austin: University of Texsas Press. (田中一彦（訳）(1984). 科学からメタファーへ―映像としての心理的世界 誠信書房.)

Rogers, C. (1959) .A theory of therapy, personality and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In S. Koch (Ed.) *Psychology: A Study of a Science, Vol.III: Formulation of the person and the social context.* New York: McGraw-Hill, 184-256.

Rogers, C. R. (1961). *On Becoming a Person: A Therapist's View of Psychotherapy.* London: Constable & Robinson.

佐藤信夫 (1992). レトリック感覚 講談社学術文庫.

白岩紘子・春日菜穂美・井上澄子 (1991). フォーカシングによるトランスパーソナル体験と成長のプロセス　人間性心理学研究, *9*, 67-81.

白水始 (2012). 認知科学と学習科学における知識の転移 人工知能学会誌 27 (4), 347-358.

Stott,S., Mansell,W., Salkovskis, P., Lavender, A., Cartwright-Hatton, S. (2010). *Oxford Guide to Metaphors in CBT: Building Cognitive Bridges.* UK: Oxford University Press.

末武康弘 (2009). 臨床的問題としてのジェンドリン哲学 諸富祥彦(編) フォーカシングの原点と臨床的展開 岩崎学術出版 pp. 89-146.

杉本孝司 (2002). なぞなぞの舞台裏 その理解と認知能力 大堀壽夫(編) 認知言語学Ⅱ：カテゴリー 化 東京大学出版会 pp. 59-78.

鈴木宏昭 (1996). 類似と思考　共立出版.

鈴木棠三 (1981). なぞの研究 講談社学術文庫.

鈴木棠三 (2009). ことば遊び 講談社学術文庫 .

高山宏(編) (2015). ユリイカ 3 月臨時増刊号 総特 集 150 年目の不思議の国のアリス 青土社 .

Thagard,P. (1996). Mind Introduction to Cognitive Science. Cambridge: The MIT press. P.サガード 松原仁 (監訳) (1999). マインド　認知科学入門　共立出版株式会社.

竹内敏晴 (1987) からだを見出すこと、からだを捨てること ー伝承について伝える―混沌のなかから（３）　未來社 pp. 145-164.

田中秀男 (2004). ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究 (上): 心理療法研究におけるディルタイ哲学の影響. *図書の譜: 明治大学図書館紀要. 8*, 56-81.

田中秀男 (2005). ジェンドリンの初期体験過程理論に関する文献研究(下): 心理療法研究におけるディルタイ哲学の影響 *図書の譜: 明治大学図書館紀要. 9*, 58-87.

田中秀男 (2015). 「一致」という用語にまつわる問題点とジェンドリンによる解決案　*人間性心理学研究*　33(1), 29-38.

田中秀男・池見陽 (2016). フォーカシング創成期における２つの流れ：体験過程尺度とフォーカシング教示法の源流　*サイコロジスト：関西大学臨床心理専門職大学院紀要 6*. 9-17.

Tay, D. (2013). *Metaphor in psychotherapy: A descriptive and prescriptive analysis*. Amsterdam: Benjamins.

近田輝行 (1999). フォーカシングの訓練　村山正治(編) 現代のエスプリ　フォーカシング　382, 61-68.

筒井優介 (2016). フォーカシングと夢解釈　池見 陽 (編著)：*傾聴・心理臨床学アップデートとフォーカシング：感じる・話す・聴くの基本*　ナカニシヤ出版　pp. 170-179.

得丸さと子 (2010). ステップ式質的研究法― TAE の 理論と応用 海鳴社.

Worsley, R.(2012). Narratives and lively metaphors: Hermeneutics as a way of listening. *Person-Centered & Experiential Psychotherapies, 11*(4),　304- 320.

柳田國男 (1976). なぞとことわざ 講談社学術文庫.

山梨正明 (2012). 認知意味論研究 研究社 .

安原和也 (2002). 認知言語学と「なぞなぞ」研究 Riddler の認知プロセスを探る 言語論研究 , 4, 1-16.

安原和也 (2007). ことば遊びの創造性と概念ブレンディング 追手門学院大学心理学部紀要, 1, 259-287.

安原和也 (2011). なぞなぞ研究小史 人文学研究 *1*, 15-34.

米森裕二 (2007). アブダクション−仮説と発見の論理− 勁草書房.

Winnicott, D. W. (1958). Primitive Emotional Formation, *Int. J. Psycho-Anal. 38*, 391-397.

Wittgenstein, L. (1953/ 2009). *Philosophical investigation(4th edition).* Anscombe , G. E. M., Hacker, P. M. S., & Schultze, J. (Ed.) UK: Wiley - Blackwell.

吉本雄史・中野善行 (編) (2004). 無意識を活かす現代 心理療法の実践と展開 メタファー/リソース/トランス 星和書店.

渡辺智英夫 (1992). 技法としての比喩 imago 8 月臨時増刊号 総特集=ことばの心理学−日常臨床語辞典 *3* (9), 296-303.

謝辞

本論文を執筆するにあたり、お世話になりました皆様に、御礼申し上げます。

関西大学臨床心理専門職大学院教授の池見陽先生には、学部ゼミから専門職学位課程、博士課程後期課程と、長きにわたってご指導を賜りました。先生ご自身による数々のフォーカシングのデモセッションや、Gendlin 哲学に関する理解しやすくかつ独創的な読解から独自の手法を創造していくという先生の研究スタイルを、間近で学ぶ機会に恵まれたことで、ここまで研究を進めることができたと確信しております。ある日、「論文なかなか書けません」とお伝えしようとした矢先、「昨日、筆が進んでさぁ」と楽しく研究の話をされる先生にいよいよもう後がなくなり、魂を振り絞って書いたものが、本研究でまとめた「なぞかけフォーカシング」の原型となりました。長年に渡りご指導いただき、本当にありがとうございました。

同大学文学部教授の串崎真志先生、また同人間健康学部教授の村川治彦先生には、ご多忙の中、副査をお引き受けくださり、大変感謝いたします。学部卒業時に卒業論文の優秀論文賞をいただいた折、串崎先生と個人研究室でコーヒーを飲みながら、自分の卒論のテーマをもとに実践と理論を共に大事にすることの重要性についてお話いただいたことを鮮明に記憶しております。その後もゼミなどに参加させていただいた時に議論させていたことは、自分の研究のスタンスについて振り返るための大切な契機でした。村川先生には、身体論やメタファー研究に関する研究会などを通して、本研究に関連する多くのご示唆をいただきました。村川先生のお声がけによって叶った人間健康学ラボラトリ委託研究員としての堺キャンパスでの２年間は、ソマティック心理学や東西の身体観について学び、自分の研究を進展させる重要な期間となりました。両先生にお礼申し上げます。

同文学部教授の三村尚彦先生には、学部生の時より長年に渡って、「ジェンドリン読書会」など様々な場面でご教授いただく機会に恵まれました。三村先生との決定的な出会いから、研究に対する厳しさと楽しさを学び、Gendlin 哲学の最も本質的な部分についてご教授いただきました。また同人間健康学部准教授の小室マイケル弘毅先生には、読書会やヨガ教室、ワークショップなどさまざまな機会のみならず、その後遅くまでケーキをつつきながら、ゆったりとした議論を共有させていただきました。あのマインドフルな時間が、自分の研究の確かな土壌となっています。両先生との出会いに、深く感謝いたします。

長い時間がかかりましたが、その分、たくさんの先生がたよりご示唆をいただく機会に恵まれました。東西学術研究所身体論研究班でお世話になっております、同大学文学部教授の門林岳史先生、東洋大学教授の稲垣諭先生、高千穂大学教授の染谷昌義先生、荒川＋ギンズ東京事務所代表の本間桃世さま、およびスタッフの松田剛佳さまはじめご関係の

方々、また身体性研究会でお世話になっております、同文学部教授の菅村玄二先生、鍋島弘治朗先生、社会学部准教授の福島宏器先生にも、多くのご示唆をいただきました。

大学院池見研究室 OG・OB の先生がた、およびゼミ生の皆様には、数多くの議論や共同での研究、ゼミ以外でもたくさんの時間を共に過ごす中で、多くの学びを共有させていただいたこと、大変感謝いたします。またいつも研究会でお世話になっております、越川陽介さま、阪本久実子さま、細見知加さま、田代千夏さまには、博士論文として本研究をまとめる構想段階から校正に至る過程で、お力をお借りしました。記して御礼申しあげます。そして、これまでなぞかけセッションを体験し、多くを学ばせていただいた方々、また特にセッション記録の掲載をご許可いただいたフォーカサーの A さん、B さんに、深く感謝いたします。

最後に、いつもいつでも、先の見えない長い学生生活を見守ってくれ、応援してくれた家族に、心から感謝します。その声を励みに、ここまで頑張ることができました。

皆様、ありがとうございました。

2017 年 11 月

岡村 心平